

現代語「ばかり」の諸用法  
—用法分化と用例分布の特徴—

朱 琳

平成 27 年度名古屋大学大学院文学研究科  
学位（課程博士）申請論文

現代語「ばかり」の諸用法  
—用法分化と用例分布の特徴—

名古屋大学大学院文学研究科  
人文学専攻日本語学専門

朱 琳

平成 27 年 6 月

## 目次

第一章 序論	3
1. はじめに	3
2 先行研究と研究方法	3
3 本研究の立場と目論見	5
3.1 スキャニング考察の適用可能性	5
3.2 「ばかり」の曖昧性	9
4. 本論での課題	10
4.1 本論の構成	11
第二章 「名詞（句）＋ばかり」における「ばかり」の諸用法について	13
1. はじめに	13
2. 考察	13
2.1 「名詞（句）＋ばかり＋は／か／も」	13
2.2 「名詞（句）＋ばかり＋の」	18
2.3 「名詞（句）＋ばかり＋で」	23
2.4 「名詞（句）＋ばかり＋か」	26
2.5 「名詞（句）＋ばかり＋だ／である」	27
2.6 「名詞（句）＋ばかり＋述語句」	29
3. まとめ	31
第三章 「動詞（句）＋ばかり」における「ばかり」の諸用法について	33
1. はじめに	33
2. 考察	33
2.1 「タ形＋ばかり」	34
2.2 「テ形＋ばかり」	42
2.3 「ル形＋ばかり」	45
3. まとめ	54
第四章 「形容詞／形容動詞／副詞など＋ばかり」における「ばかり」の諸用法について	57
1. はじめに	57

2. 考察	57
2.1 「形容詞+ばかり」	57
2.2 「形容動詞+ばかり」	64
2.3 「副詞+ばかり」	66
2.4 「感動詞／連語／ $\emptyset$ +ばかり」	67
3. まとめ	68
第五章 結論と今後の課題	70
1. はじめに	70
2. 用法分化の条件と連続性	70
3. 用例分布の特徴と用法の偏り	74
4. 課題の設定条件	76
5. 「ばかり」の本質的な特徴	77
6. 今後の課題	78
参考文献	80

## 第一章 序論

### 1. はじめに

現代日本語の助詞「ばかり」には多様な意味や用法がある。構文上では、名詞、動詞、形容詞、副詞、助詞など多種類の成分と共起でき、その表す意味も、限定、比況、程度など多岐に渡っている。このような煩雑な用法の中で、例(1):「雨ばかり降る」のように日本語学習者がごく初級で学習する用法もあれば、例(2):「割れんばかりの拍手」のような上級表現として教わる用法もある。

本研究において、筆者は、「ばかり」のすべての用法を新しく分類するため、「ばかり」のあらゆる用法を分析対象とする。また、「ばかり」のあらゆる用法を記述説明するための枠組みや「ばかり」の用法の分類方法を探りたいと考えている。

### 2. 先行研究と研究方法

現代語「ばかり」は、伝統的な国語学の背景を持つ研究では、副助詞として研究されてきた。しかし、とりたてという概念が確立してから、「ばかり」はとりたて詞またはとりたて助詞として認識されるようになった。「とりたて助詞」と命名したのは、宮田(1948)である。宮田(1948)では、「取り立て助詞というのは文または句の一部を特に取り立てて、その部分をそれぞれの特別の意味において強調する助詞である」(p.178)と定義している。しかし、宮田(1948)では、「だいたい普通の文法でいう「係助詞」に当たる」とし、「ばかり」をとりたてに入れていなかった。その後、宮田(1948)で命名された「とりたて」という用語は、教科研東京国語部会・言語教育研究サークル(1963)、鈴木(1972)などで取上げられ、従来の副助詞(「ばかり」を含む)まで含めた文法範疇に使用されるようになる。「ばかり」が「とりたて助詞」との認識が一般的になったのは、寺村(1981)以降、実質的には沼田(1986)以降だと言われる。それ以来、沼田(1986)(1992)、中西(1995)(2001)、益岡(1992)、定延(2001)(2003)など、多くの研究者が「ばかり」をとりたて詞またはとりたて助詞として扱い、研究を重ねている。

「ばかり」の諸用法についての先行研究の蓄積は大きいですが、その分類方法や分析対象とする範囲などは異なっている。先行研究をまとめてみると、「ばかり」の用法はとりたて用法(例(1):雨ばかり降る)、アスペクト的用法(例(3):引っ越してきたばかりだ)、程度用法(例(4):リンゴを三つばかり買う)の三つに大別することができる。しかし、その三つの用法の境界や連続性は明確とは言えない。また、この三つの用法を個別に研究したものが多いため、とりたて用法とアスペクト的用法、とりたて用法と程度用法をそれ

---

<sup>1</sup> 例えば、とりたて用法について、沼田(1986)(2000)、中西(2001)、安部(2000)、茂木(2002)などがある。アスペクト的用法について、高瀬(1997)、前田(2001)、小林(2003)などがある。程度用法について、森田(1968)、丹羽(1992)、丸山(2001)などがある。

それぞれ合わせて研究したものはあるが、三つの用法を一括して扱った研究はごくまれである。管見の限り、沼田（1986）（2000）（2009）だけである。しかし、沼田でも言及するにとどまり、詳しく研究されていない。沼田（1986）では、「ばかりも先の「だけ」などと同様、とりたて詞の一般的特徴を持っている。つまり、「ばかり」に任意性があり、連体文内性を持ち、非名詞性、分布の自由性も備えているのである。（中略）ただし、数量詞には後接できない。数量詞につく「ばかり」はすべて、およそその数量を表す形式名詞の意味、機能しか持たない。（中略）「ばかり」は限定の意味を持たず、どちらも「およそ3個」や「およそ10人」とおよその数量を表す」（p.198-199）とし、「アスペクト詞とも考えられる「だけ」や「ばかり」も（中略）とりたて詞としての限定の意味から派生と考えられる」（p.201）としている。沼田（2000）では、「「ばかり」に関する形式副詞の中の各種の用法やとりたて詞との連続性はまだ十分に捉えられない」（p.205）としている。また、沼田は（2000）（2009）では、アスペクト的用法について、「助動詞的」「慣用的」、概数量の用法については歴史的用法の残存などと記述している。したがって、沼田（1986）（2000）（2009）では、限定（狭義のとりたて用法）の研究に注目が偏重し、各用法について離散的な研究が積み重ねられてきたとわかる。

しかし、「ばかり」には大別された三つの用法以外に、「ばかり」には「ばかりに」「ばかりか」など派生的な用法が多い。これらの用法と「ばかり」本来の用法の関連などもまだ明らかではない。また、現実には三つの用法の確な区分は困難であるが、とりたて以外の用法も広く用いられている。同形態である以上、日本語文法上の合理的な説明が必要である。学習者への説明においても、用法の分化のしくみを明らかにする統一的な枠組みが必要である。

本稿では、「ばかり」のあらゆる用法をすべて見ることにする。とりたて助詞またとりたて詞として研究されてきた「ばかり」（例（1）など）も、アスペクト詞として研究されてきた「ばかり」（例（3）など）も、形式名詞として研究されてきた「ばかり」（例（4）など）も、形式副詞として研究されてきた「ばかり」（例（2）など）も、すべて見ることにする。「ばかり」のあらゆる用法を記述説明するため、一貫した研究方法を探りたい。

数多くの先行研究の中で、興味深いのは定延（2001）（2003）で用いられる探索という心身行動に着目する認知主義的アプローチである。定延（2001）では、「探索とは既知領域の拡大行動である。典型例を言えば、未知の空間がどんな様子なのか調べることである」（p.118）と定義している。たとえば、「初めて訪れた見知らぬ街を、「どんな様子か？」という意識で見回す」（p.118）こと、または、「すでにある程度知っている街でも、「どんな様子か？」という意識で改めて見回してみる」（p.118）ことである。例えば、

(5) 三太郎はただしょんぼりと、とぐろを巻いておるばかりであった。

例（5）では、「三太郎はとぐろを巻いておる」というデキゴトは一つだけだが、探索は複数回であるという。「つまり、「どうするだろうと三太郎の様子を見る（探索する）」と、

三太郎はとぐろを巻いておる」「もうそろそろ三太郎は何か動きを見せよう様子を見る（探索する）と、三太郎はやはりとぐろを巻いておる」「なおも見る（探索する）が、相変わらずとぐろを巻いておる」という具合である」（p.132）。

定延（2001）では、「ばかり」のいわゆるとりたて用法についてこの説明を行っている。また、澤田（2007）では、定延（2001）の探索の定義と同じ立場をとりつつ、走査<sup>2</sup>という概念として使用し、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法について分析を行った。その結果、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法の時、発話者や聞き手の観察行動は定延（2001）の探索と類似しているとした。一方、定延（2001）では、「ばかり」のいわゆるとりたて用法についてしか言及していない。澤田（2007）では、「ばかり」のいわゆるアスペクト的用法についてしか言及していない。しかし、筆者は、定延（2001）で「探索」、澤田（2007）で「走査」とされる認知的な観察行動が、「ばかり」のあらゆる用法で行われているのではないかという見通しを持っている。また、この発話者や聞き手による観察行動の違いによって、「ばかり」がなぜ異なる用法を表すかについて、説明がつくのではないかと筆者は考えている。したがって、本研究では、定延（2001）の探索と澤田（2007）の走査を基盤的な考え方として採用し、一用法にとどまらず「ばかり」のあらゆる用法について分析してみる。また、一用法だけで使われている探索や連続走査という名称を避け、「ばかり」全体に適用可能な概念として区別するために、「スキヤニング考察」という新しい名称を設定し、一貫した記述説明を目指す。

### 3. 本研究の立場と目論見

#### 3.1 「スキヤニング考察」の適用可能性

定延（2000）（2001）では、探索とスキヤニング探索<sup>3</sup>は、とりたてに留まらずかなり幅広く言語現象の説明に適用可能な認知操作として位置づけられている。例えば、定延（2000）では、以下のように述べている。

たとえば学生マンションのチラシを路上で学生に配ろうとする業者は、通行人が学生なのかどうか、服装や顔立ちなどから1人ずつ瞬時に判断する（そして学生と判断すればチラシを差し出す。学生でないと判断すれば差し出さない）。その際、通

---

<sup>2</sup>澤田（2007）では、「連続走査」を「時間概念を状態の連続の中に組み込むこと、つまり展開された状態の連続を時間順で追っていくこと」と定義している。また、自身の説を「基本的に定延（2001）の立場をとるものである」（p.134）としている。

<sup>3</sup>定延（2001）では、探索は「全体的探索とスキヤニング探索に二分される」とし、「例えば畳半畳の部屋のように狭く、見通しがきく場合は、探索領域の全体が一举に把握されるということが十分にあり得る。この探索が全体的探索である。逆に、探索領域がテーマパークのように広大である場合や、L字型の部屋のように見通しがきかない形状をしている場合は、探索領域の全体を一举に把握できず、探索領域をいくつかの部分に分けて、探索を何回かおこなっていかねばならないことが多い。これがスキヤニング探索である。スキヤニング探索とはスキヤニングを用いる探索である。スキヤニングとは、全体を一举にとらえるのではなく、一度に一部分ずつとらえていく方式の行動である」（p.119-120）としている。

行人の耳の形などは無視され、学生かどうかだけがすばやくチェックされる。本稿のスキヤニングとは、たとえばこの業者がチラシ配布のためにおこなう行動を指す。つまり、集合（通行人全員）を1要素（1人）ずつ粗くすばやく観察し、その1要素について必要な情報（その人間の服装や顔立ちなど）を得、それに基づいてその要素に属性（[学生である]や[学生でない]）を付与して次の要素に移るという一連の心身行動である。スキヤニングは人間のさまざまな日常的行動の基礎になっており、言語表現の意味や形式もスキヤニングと深くかかわる。（p.258）

すなわち、スキヤニング探索は人間の様々な言語表現に深くかかわる認知操作である。例えば、「この山はすごく高い」を言うために、「この山」について観察する必要がある。その高さを目測し、「すごく高い」という結果にたどり着く。よって、「この山はすごく高い」を言うことができる。また、「この部屋に学生は5人いる」を言うために、まず、部屋の中の人間について観察する必要がある。学生であるかどうかをチェックし、学生であれば計算して、最後に「5人」にたどり着く。よって、「この部屋に学生は5人いる」を言うことができる。また、「50メートルおきに地面が高くなる」を言うために、地面について観察する必要がある。50メートル観察するごとに地面の高さが高くなるということにたどり着く。よって、「50メートルおきに地面が高くなる」を言うことができる。したがって、「ばかり」については、すべての「ばかり」の用法に、以上のような観察行動が行われる可能性が考えられる。本研究では、以上のような考え方と同じ立場をとり、定延（2001）（2003）で研究された「ばかり」のとりたて用法と、澤田（2007）で研究された「ばかり」のアスペクト的用法以外の用法についても、「スキヤニング考察」が適用できるかどうか検証してみたい。

まず、「スキヤニング考察」を使用する前に、「スキヤニング考察」に関わる多く概念を定義づける必要があると考えられる。定延（2001）では、探索を使用するための、数多くの概念を定義づけている。例えば、探索が及ぶ領域を探索領域とし、探索者が探索を通して解決しようとする課題を、探索課題としている。本稿では、定延（2001）と同じく、探索領域としての集合と、探索課題によってばかりの用法を記述説明する立場をとるが、探索領域・探索課題ではなく、領域・課題<sup>4</sup>と呼ぶことにする。

また、定延（2001）では、「ばかり」による探索はスキヤニング探索とし、以下のよう

例えばある人物を一定期間観察したところ、ミカンが7つ食べたが他には何も食べなかったとしよう。これは「だけ」の文「この人物が食べたのはミカンだけだ」でも、「しか」の文「この人物はミカンしか食べなかった」でも、「ばかり」の文「こ

---

<sup>4</sup> 本稿では、以上のような言語生活における一連の心身行動を、スキヤニング考察とするが、「スキヤニング考察領域」「スキヤニング考察課題」としないのは、単にこれだと概念の名称として長いので、略して「領域」と「課題」にする。



の人物が食べたのはミカンばかりだ」でも表現できるが、これらの文の意味は異なる。「だけ」や「しか」の文は、「リンゴやバナナやミカンのような、問題の人物が食べる可能性のあった品種の集合を探索領域とし、『その人物が食べたかどうか』を探索課題として、もし仮に1品種ずつスキニング探索していくと、[食べた]という属性が認められるのはミカンという品種に限られる」という仮想的なスキニング探索を意味している。このように「だけ」「しか」の場合、探索領域はタイプ（上の場合はリンゴやバナナやミカンのような品種）の集合である。

他方、「ばかり」の文は「この人物が食べたのはミカンばかりだ」の場合、探索領域はタイプの集合ではない。そして、問題の人物が食べたモノの集合でもない。問題の人物が食べたモノが何なのか調べるデキゴト（問題の人物が食べたモノを探索領域とし、[品種は何か]を探索課題とする探索）が複数回（典型的には、つまり1回で2個を調べたりしなければ7回）あり、その探索の集合を探索領域として、それらがどういう探索なのか、仮に1探索ずつスキニング探索していくと、すべて[ミカン]という情報を得た探索だというのが、文「この人物が食べたのはミカンばかりだ」の意味である。このように、「ばかり」の探索領域は、事物を探索領域とする探索の集合である。(p.128-129)

つまり、「ばかり」のスキニング探索は、デキゴト（事物を探索領域とする探索）の集合を探索領域とし、そのデキゴトの複数性を示唆している。本稿の筆者は、このデキゴトレベルでの複数性を、とりたてて用法（あるいは加えてアスペクト用法）のみならず、「ばかり」の用法全体に見られる特徴だと考える。また、本稿の筆者は、この認知操作について、定延（2001）（2003）と澤田（2007）と同じ立場をとるが、「ばかり」は「スキニング探索を意味する」（定延 2001, p.125）という指摘、「話し手が、複数回、「ばかり」で明示された対象を含む現象を観察する」（澤田 2007, p134）という記述を重視し、「スキニング考察」と呼ぶことにする。観察という語句を使用しないのは、発話者や聞き手は観察だけでなく、ほかの行為（第二章で述べる計算など）も行っているためである。そして、「ばかり」のあらゆる用法において、この観察行動が適用できるかどうかを検証したいと考えている。例えば、まず、先行研究で大別された「ばかり」の三用法のもう一つの用法にあたる程度用法について、考えてみたい。

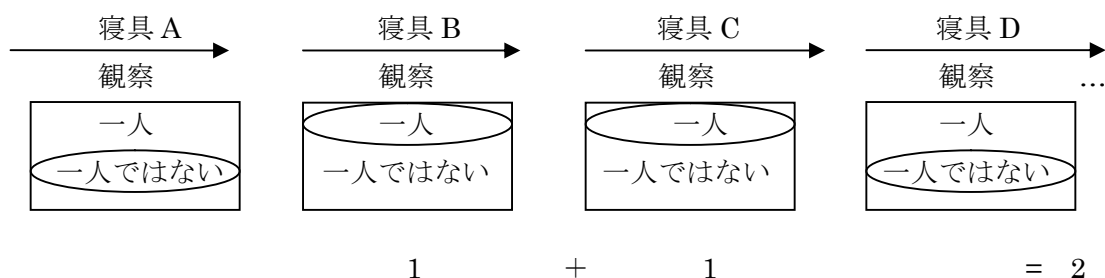
以下の用例を見てみよう。

(6) 夜具は五布で三人いっしょに寝る規則だが、人数に対して夜具にゆとりがあるため、三人の小頭と栄二、また女衞の六のほか二人ばかりは、めいめい一人で寝ていた。（山本周五郎『さぶ』）

(7) 八千円ばかりはいった折りたたみの財布の中に、小型の女もちの名刺が四五枚、バラにはいていた。（松本清張『点と線』）

例(6)では、「ばかり」は数量表現「二人」に下接している。数量表現に下接することは、程度用法の特徴の一つである。まず、発話者が例文の人たちがどういうふうに寝ていたかを知らないとしよう。発話者は例(6)を言うために、例文の人たちがどういうふうに寝ていたかを観察しなければならない。つまり、実際の寝具に寝ている人物たちを考察する。最初の寝具では、三人と一緒に寝ていた。次の寝具では、三人と一緒に寝ていた。...次の寝具では、一人で寝ていた。...その次の寝具では、一人で寝ていた。...などの結果にたどり着く。その結果、一人で寝ていたのは一人+一人の二人である。観察する過程で計算もしている。

図1



つまり、「ばかり」を用いた文(6)における「観察」の領域は、寝具に一人で寝ているかどうかを課題とする観察の集合であると仮定するのである。一つ一つの観察の領域は実際の寝具である。その過程で、「一人」と「一人ではない」を要素とする集合の中から、「一人」または「一人ではない」を選んだ。「二人」というのは、その観察の結果に相当する。観察をしながら、計算した結果、たどり着いた答えが「二人」であると考えられないだろうか。「二人」という数量は、「ばかり」による観察の過程で行われた計算の結果ととらえられる可能性がある。また、その場合、実際の寝具について観察をした回数は複数となる。少なくとも、一人で寝ている二つの寝具を考察した回数より多いので、三回以上である。つまり、「ばかり」による観察の領域である集合の中に、デキゴト観察が複数ある。さらに、たどり着いた、計算の結果が「ばかり」の上接する語句であるといえるのではないか。程度用法とされる「ばかり」について、このような計算結果の明示という説明が可能かどうか、数量を表す上接語句の場合を精査することで、検証する必要がある。

次の例(7)では、「ばかり」は数量表現「八千円」に下接している。発話者が例(7)を言うためには、財布の中に入っているお金がいくらを知っていなければならない。その場合、折りたたみの財布の中にいくらあるか、実際の紙幣や硬貨を観察する認知行動は必須と言える。その観察の内実は、折りたたみの財布の中に入っているお金の形の可能性によって異なると思われるが、いずれにしても、金額の全体を把握するには、その観察が少なくとも紙幣、硬貨の有無を含めて複数回行われる必要があると思われる。また、「ばかり」の上接する語句数量「八千円」は、「いくら入っているか」について、

複数回の観察を経て計算した結果、たどり着いた答えに相当する。つまり、「ばかり」文における観察行動は、述語事態や文脈によって設定される課題について、実際のモノについての観察というデキゴトの集合を領域とし、複数回観察をしながら計算し、たどり着いた結果が「ばかり」の上接する語句といえるのではないか。

先行研究では、このような「ばかり」の用法を概数量または程度の用法と呼ぶ。「ばかり」の上接する語句は「八千十円」のような細かい数量表現ではなく、「八千円」「二百首」など区切りのいい数量表現であり、緻密、正確であっても細かい数値は現れないためである。一方、このような「ばかり」の用法を、「最適値計算」(井上 1993)「度数算出用法<sup>5)</sup>」(定延 2003)と呼ぶ先行論もある。計算を伴う観察行動の結果を表示するという本稿の味方に矛盾しない名称といえる。「探索」「走査」のような認知的な観察行動による説明を、程度用法に適用しようとする本稿の立場の可能性を示唆するのではないだろうか。

以上のように、「ばかり」のいわゆる程度用法に、「探索」「走査」のような認知的な心身行動が適用できると仮定できる。したがって、本研究の各章で詳しく検証したいと考えている。

### 3.2 「ばかり」の曖昧性

先行研究では、「ばかり」の用法は三つに大別されたが、その三つの用法の境界や連続性は明確とは言えない。本稿では、「ばかり」のあらゆる用法に詳しく記述説明し、各用法の相違点や連続性を明らかにしたいと考えている。また、「ばかり」の用法はどの用法なのかを判断するのに迷う例文も存在すると考えられる。例えば、以下の用例である。

(8) 源氏の心あたりの邸は住む人もないままに留守居役だけが守っている。門の内は、ゆくほどに木立が深く物古りて、気味わるいばかりである。(田辺聖子『新源氏物語』)

例(8)では、「ばかり」の上接する語句は「気味わるい」である。「気味わるい」は属性的意味を示す形容詞であるが、場合によって情意的意味を示す形容詞として用いることがある。「気味わるい」が情意的意味をとる時、「気味わるい」は何となく恐ろしいという意味を表し、つまり、感じられる感情の程度の高さを表す。発話者が行う心身行動は以下のように考えられる。発話者は門の中を観察し、木の数、木の葉の隙間から入る日差しなどを見、「木立が深い」などと感じ、さらに、雰囲気は何となく恐ろしいと感じる。したがって、門の中は「気味わるい」と判断する。その過程で、程度を表す集合(中に考えられる要素は「気味わるい」「さほど悪くない」「普通」などがある)の中から「気味わるい」を選んでいる。したがって、例(8)では、「ばかり」の用法はいわゆる程度

---

<sup>5)</sup>定延(2003)では、「ばかり」のいわゆるとりたて用法に「探索」という概念を用いているが、「ばかり」の「度数算出用法」を記述説明する時に「探索」という概念を使用していない。

用法になる。一方、「気味わるい」が属性的意味をとる時、「気味わるい」は何となく恐ろしいという意味を表し、つまり、「気持ちいい」などではない。発話者が行う心身行動は以下のように考えられる。発話者は門の中を観察し、木の数を見、「木は多すぎるな、（気持ちいいなどではなく）気味わるいな」と感じる。さらに、木の葉の隙間から入る日差しを見、「すこし暗いな、（すがすがしいなどではなく）気味わるいな」と感じる。発話者が門の中の各場所を観察し、複数回（気持ちいい、すがすがしいなどではなく）「気味わるい」と感じる。その過程で、属性を表す集合（中に考えられる要素は気味わるい、気持ちいい、すがすがしいなどがある）から、「気味わるい」を選んでいる。したがって、例（8）では、「ばかり」の用法はいわゆる「とりたて」解釈の用法になる。

本論では、以上のような用例の曖昧性に注目する。このような例の存在は、用法ごとに離散的に記述研究する現代日本語文法の見方の限界や問題点を示しているのではないか。また、「ばかり」の用法は、いわゆるとりたて用法、アスペクト的用法、程度用法がすべてではない。「ばかりに」「ばかりか」「んばかり」など派生的な用法がある。本研究では、このような問題を解決し、現代日本語の「ばかり」の諸用法に統一的な説明を与えたい。曖昧例も含め、各用法の相違点や連続性を明らかにすることを目的として、各章の考察を行う。

#### 4. 本論での課題

「探索」「走査」に相当する認知的操作とその複数性によって「ばかり」の全用法を記述説明しようとする本論での具体的な検討に入る前に、先行論の概念の問題点を確認しておこう。

まず、定延（2001）（2003）や澤田（2007）では、探索／走査を行う時の客観的な課題の設定条件を明らかにしていない。双方とも、人間の心身行動の観点から、自然に導かれるものとして記述説明している。本稿では、「スキニング考察」によって、「ばかり」のあらゆる用法を研究し、分類することを目指すので、その前提となる課題の設定条件を明らかにすることも大きな課題となる。

先行研究の課題を見ると、課題はほとんど「ばかり」の上接する語句によって設定される。例えば、文「みかんばかり食べる」では、課題は「みかん」「食べる」に対して、「何を食べるか」である。つまり、上接する語句「みかん」の属性はモノなので、設定集合はモノとなり、モノに対しての課題となる。また、3.1 節で挙げた例（6）（7）を見ると、「ばかり」はすべて数量表現に下接している。つまり、上接する語句の属性が数量表現の場合、課題は、「どれくらい／いくら／何人…」となる。よって、スキニング考察を行う時の課題の設定条件は、上接する語句の属性によって設置されるといえる。しかし、課題の設定条件はこれだけではないと考えられる。例えば、「ばかり」の上接する語句が数量表現の場合、課題は「どれくらい／いくら／何人…」になるはずだが、以下のような例外が存在する。

(9) 今別れるんなら、どうしたって二千元は貰わなくちゃ。(中略) 何さ、五百円ばかり。これじゃ今までの苦労が水の泡じゃないの。このくらいなら、もうすこし潮時を見てたほうがよかったわ。あたしどうしたって二千元…… (石川淳『焼跡のイエス・処女懐胎』)

例(9)では、課題は「いくらもらえるか」ではない。前文脈と例文の最後に「どうしたって二千元」という表現がある。このような先行文脈がある場合、これがスキヤニング考察を行う前提として関与し、「どうしたって二千元ほしいが、いくらもらえるか」が課題といえる。

このように、「ばかり」のスキヤニング探索の課題は、「ばかり」の上接する語句と主節述語によって大きく条件付けられ、そのうち、「ばかり」の上接する語句の属性は、その語句の品詞に大きく左右される。したがって、本論では、「ばかり」の上接する語句の品詞ごとに場合分けをし、詳しく記述説明する方法をとる。このような記述により、スキヤニング考察を行う時の課題の設定条件として、上接する語句の属性によるということ以外、また、主節述語や文脈以外に、どのような条件が関与するのかを明らかにしたい。

次に、「ばかり」のあらゆる用法を新しく分類し、どの場合にどの用法になるかを明らかにしたい。また、新しく分類した各用法の相違点や連続性を明らかにしたいと考えている。

#### 4.1 本論の構成

本論と結論は具体的に以下のように議論を進める。

第二章「名詞(句)+ばかり」における「ばかり」の諸用法については、『新潮文庫100冊』(CD-ROM版)の昭和時代以降の用例から、「形容詞語幹+ミ/サ+ばかり」、「数量詞+ばかり」「指示詞+ばかり」「名詞+である+ばかり」の用例も含め、「ばかり」の用例を採取し、分析する。スキヤニング考察という認知主義的アプローチを用い、「ばかり」の用法を再分類し、文中に分布する特徴を探し、名詞句における「ばかり」の特徴を分析していく。また、スキヤニング考察の課題の設定条件を提示することに試みる。

第三章「動詞(句)+ばかり」における「ばかり」の諸用法については、「ばかり」が動詞(句)に下接する場合、名詞の場合と同様に分析する。また、第二章で提示した課題の設定条件の適用可能性とともに検討し、それ以外の設定条件があるかどうかを探る。

第四章「形容詞/形容動詞/副詞など+ばかり」における「ばかり」の諸用法については、「ばかり」が形容詞、形容動詞、副詞とそのほか(感動詞、連語)に下接する場合、名詞の場合と同様に分析する。また、第二章と第三章で提示した課題の設定条件の適用可能性を検討し、「ばかり」によるスキヤニング考察の課題の設定条件を確定する。

第五章「結論と今後の課題」では、本論（第二、三、四章）の記述をふまえ、本研究の成果として、「ばかり」の用法分化の条件を提示し、新たに分類した「ばかり」の各用法の相違点や連続性を明確にする。また、「ばかり」の用法分布の特徴と偏りを再度確認し、「ばかり」の用例では、なぜそのような用法分布の特徴と偏りが現れるかのわけを明らかにする。さらに、本論で提示した、スキミング考察を行う時の課題の設定条件を再度確認し、「ばかり」のすべての用例に適用できるかどうかを検討し、設定条件を確定する。また、以上のことをふまえ、「ばかり」の本質的な特徴を明らかにする。最後に、本研究で十分に論じることのできない問題点や日本語教育に向けての今後の課題を提示する。

## 第二章 「名詞(句) +ばかり」における「ばかり」の諸用法について

### 1. はじめに

現代日本語では、「ばかり」は名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞など様々な成分に接続することができる。このうち、「名詞(句) +ばかり」の用例が圧倒的に多い。

名詞は具体的な人・物・事などを指す語である。「ばかり」が名詞に下接する場合、「いつも」「すべて」というニュアンスを含む例文が典型的である。例えば、例(1)である。また、ここでは名詞に数量詞も含まれると考えておく。例(2)のような用例も数多く見られる。

(1) ここまでに記したのは、どれもこれも、あとあとかなり有名になった事件ばかりである。(井上ひさし『ブンとフン』)

(2) 富士田工場長の間借りしている家から、一丁ばかり離れた民家の隠居所である。(井伏鱒二『黒い雨』)

例(1)と(2)では、「ばかり」は明らかに全く異なる意味である。では、同じ「ばかり」が異なる意味用法を示す原因はなんだろうか。本研究では、スキヤニング考察という観点で、名詞に下接する「ばかり」のすべての用例を分析する立場をとる。スキヤニング考察という認知的な観察行動が、すべての、名詞に下接する「ばかり」の例文に適用できるか、また、スキヤニング考察の課題の設定条件は何かなどを探りつつ、名詞に下接する「ばかり」の用法分化の条件や用例の分布の特徴などを明らかにしたい。

また、本章では、「形容詞語幹+ミ/サ+ばかり」、「数量詞+ばかり」「指示詞+ばかり」「名詞+である+ばかり」も含め、「名詞(句) +ばかり」のすべての実例を考察し、名詞句における「ばかり」の特徴を分析していく。

### 2. 考察

分析対象として、『新潮文庫 100 冊』(CD-ROM 版) から、「ばかり」の用例を採取し、分析する。しかし、『新潮文庫 100 冊』(CD-ROM 版) には、夏目漱石『こころ』(1914) や島崎藤村『破戒 (1906)』など非常に古い用例がある。よって、本研究では、昭和元年以前のデータを除き、昭和時代以降の用例を中心に分析する。単純に構文的な環境によって分類し、「ばかり」の用法を整理してみる。「名詞+ばかり」の場合について、文中での位置によって、六つのパターンに分けて記述説明する。

#### 2.1 「名詞(句) +ばかり +は/が/も」

「名詞(句) +ばかり」の全 3286 用例のうち、「名詞(句) +ばかり +は/が/も」の用例は 267 例ある。そのうち、「ばかりは」は 122 例とやや多く、「ばかりが」は 117 例あって、「ばかりも」は 28 例見られる。

まず、以下の用例を見てみよう。

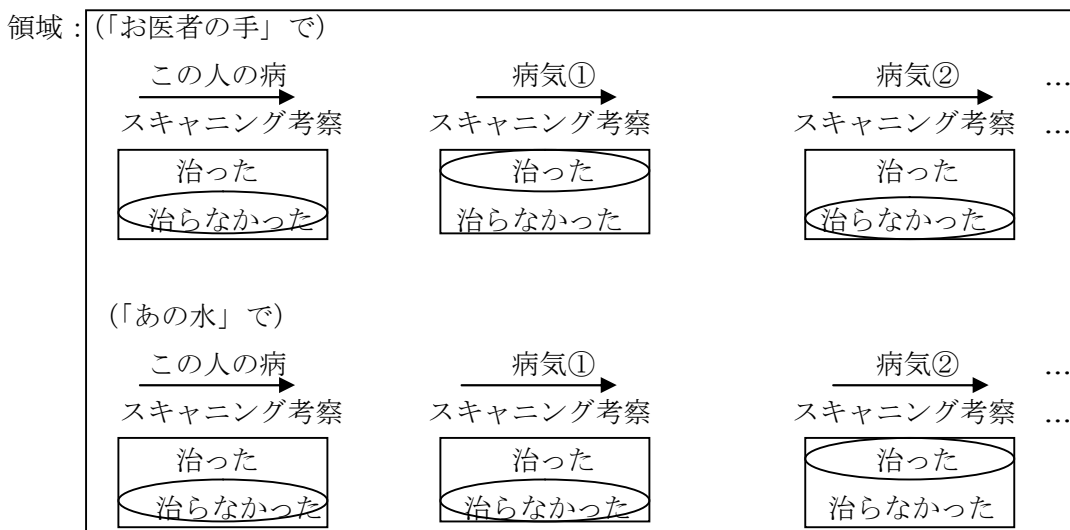
(3) 貴僧、申せば何でも出来ましようと思ひますけれども、この人の病ばかりはお医者  
の手でもあの水でも復りませなんだ。(泉鏡花『高野聖』)

(4) 尼さんばかりが寄って、幾月も雪のなかでなにをしてるんだらうね。(川端康成『雪  
国』)

例(3)では、「ばかり」は「この人の病」に下接している。まず、発話者はまだ、「お  
医者の手」「あの水」で治せる病を知らないと仮定しよう。例(3)を言うためには、発  
話者は一連の観察行動を取らなければいけない。つまり、以下のようなのである。まず、「お  
医者の手」で治せる病を探す。その結果は、「この人の病」は治らなかった、病気①は治  
った、病気②は治らなかったなどである。それから、「あの水」で治せる病を探す。そ  
の結果は、「この人の病」は治らなかった、病気①は治らなかった、病気②は治ったなど  
である。したがって、何回も観察して、「この人の病」だけが「お医者の手」でも「あの  
水」でも治らなかったことがわかった。

本稿では、以上のような一連の観察行動をスキャンニング考察とする。一回の観察は一  
回のスキャンニング考察とし、一回のスキャンニング考察の領域は各の病である。また、「ば  
かり」による全体のスキャンニング考察の領域は各スキャンニング考察を含む集合であると  
考えられる。以下の図で表示できる。

図 1



複数回スキャンニング考察をした結果、お医者の手でもあの水でも治らなかった病は「ば  
かり」の上接する語句の「この人の病」である。

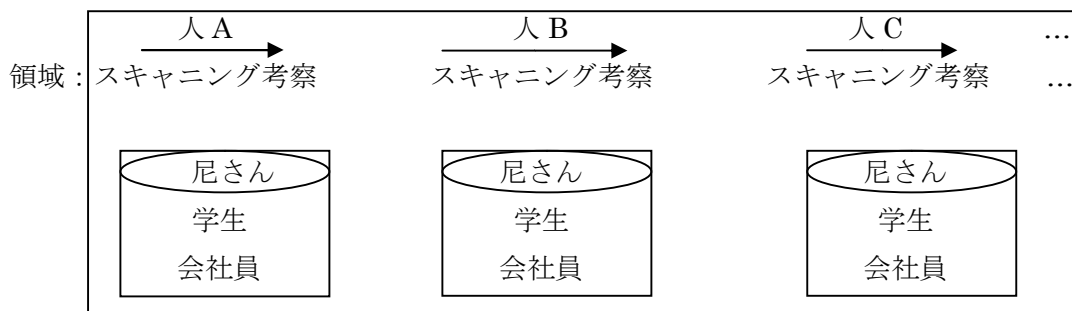
また、発話者が言いたいのは「この人の病」が治らなかったということなので、「この  
人の病以外の病はすべてお医者の手かあの水で治った」のような構文の例文ではなく、



例 (3) のような構文の例文をとったと考えられる。このことから、「ばかり」によるこの構文に必要な一連の観察行動の課題には、例文の述語部分を使用して「この人の病」について設定された質問が、前もって念頭にあるということになるのではないかと。つまり、「どの病が「お医者の手でもあの水でも復りませなんだ」のか」という課題を解こうとするからこそ、以上の複数回のスキヤニング考察を行うことになる。それでは、「ばかり」の上接する語句についての質問、そして、当該の文の述語部分によって設定される質問というのがスキヤニング考察設定の必要条件なのだろうか。例 (4) も見てみよう。

例 (4) では、「ばかり」の上接する語句は「尼さん」である。まず、発話者は寄ってくる人をどんな人なのかを知らないと仮定しよう。例 (4) を言うためには、発話者は目の前の状況、とくに「尼さん」の上位集合「人」について、一連の観察行動を取らなければいけない。つまり、以下のようなものである。まず、目の前に寄ってきた人 A について観察する。その結果、人 A は考えられるほかの人種の学生や会社員ではなく、尼さんだった。それから、人 B について観察する。その結果、人 B も学生や会社員ではなく、尼さんだった。何回も観察して、寄ってくる人がすべて尼さんだという結果にたどり着く。つまり、複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた結果は「ばかり」の上接する語句の「尼さん」である。以下の図で表示できる。

図 2



また、以上の観察行動を行う前に、発話者にとっては「どんな人が寄ってきているか」という疑問が念頭にあるだろう。つまり、例 (4) の課題は「どんな人が寄ってきているか」である。課題は「ばかり」の上接する語句についての質問であるが、その述語部分は文の主節述語ではなく、「ばかり」を含む節の述語によって構成されている。したがって、以上で仮定した課題の設定条件は「ばかり」の上接する語句についての質問、そして、「ばかり」を含む節の述語部分によって設定される質問という条件に修正することができる。

例 (3) では、一回一回スキヤニング考察をした結果がすべて「ばかり」の上接する語句に一致するわけではないが、例 (4) のように、一回一回スキヤニング考察をした結果がすべて「ばかり」の上接する語句となる場合もある。また、スキヤニング考察の過程は異なるが、例 (3) と例 (4) の共通点は、スキヤニング考察が複数回行われているこ

とと、その全体の帰結が「ばかり」の上接する語句にたどり着くことである。

例 (3) (4) のような例文は「名詞 (句) +ばかり+は／が／も」の用例の中で、237 例見られる。そのすべての例文で、スキニング考察は複数回行われ、そこから得られた帰結が「ばかり」の上接する語句となっている。例えば以下の例文である。

(5) そんな直接的な手段で、もっぱら空想に鞭うち、自分をはげまして来たものだが、いざ実行の機会をあたえられてみると、そう子供っぽいことばかりも言っていられない。

(安部公房『砂の女』)

(6) でも、どうしても今夜ばかりは、落ち着いて勉強なんかにかかれないわ。(モンゴメリ『赤毛のアン』)

(7) 彼はそこばかりは自分の主張を押し広げた広い台所で、自分でわざわざ買出しに行ってきた魚を器用に刺身にした。(北杜夫『楡家の人びと』)

(8) まず第一ページに、人の名まえばかりがたくさん書かれてある。(三浦綾子『塩狩峠』)

(9) 春がきましたとお知らせしたく参上しましたが、あまりに切ない思い出ばかりがよみがえりまして、心乱れるのみでございます。(田辺聖子『新源氏物語』)

したがって、以上のような、スキニング考察が複数回行われ、全体の帰結が「ばかり」の上接する語句のような「ばかり」の用法を「ばかり」の複数性明示用法とする。また、この明示された「ばかり」の複数性は「ばかり」の本質だと考えられる。

さらに、この「ばかり」の複数性は、「ばかり」に対してしばしば指摘されるマイナス評価の含意を持つという問題を解く鍵でもある。想定していない状況で、課題が設定され、スキニング考察が複数回行われたうえで、想定していない結果が複数回出る。このことから、「ばかり」はマイナスの含意を持つことになると考えられる。そうではない場合は、「ばかり」はマイナスの含意を持たない。例えば、

(a) 彼女が高い料理ばかり注文したから、私は支払いに困ってしまった。

(b) 彼女は安い料理ばかり注文したから、助かった。

例 (a) では、発話者は高い支払いを想定していなかったので、「これも高い料理だ」「これも高い料理だ」というスキニング考察の結果に対し、発話者により否定的評価が与えられる。「ばかり」はマイナスを表す。例 (b) では、想定していなかった状況ではないので、「これも安い料理だ」「これも安い料理だ」というスキニング考察の結果に対し、発話者により否定的評価が与えられない。その結果、必ずしも「ばかり」はマイナスの含意を持たないことになる。

さらに、上で仮定した課題の設定条件、つまり、「ばかり」の上接する語句についての質問、そして、「ばかり」を含む節の述語部分によって設定される質問という条件はすべ

での237例に当てはまる。例えば、例(5)では、課題は「どんなことについて言ってもらえないか」である。「ばかり」の上接する語句は「子供っぽいこと」という形容詞を伴う名詞句なので、疑問詞は「どんな」を使用する。課題の述語は「ばかり」を含む節の述語部分によって設定されている。例(6)の課題は「いつ落ち着いて勉強(なんか)にかかれないか」である。「ばかり」の上接する語句は「今夜」という時間を表す名詞なので、疑問詞は「いつ」を使用する。課題の述語は「ばかり」を含む節の述語部分となっている。また、例(5)でわかるように、前章で仮定した課題の設定条件、つまり、課題は「ばかり」の上接する語句の属性によるということ、精確ではない。以上で提示した、課題は「ばかり」の上接する語句についての質問であるという設定条件に、修正すべきである。よって、「ばかり」の上接する語句についての質問、そして、「ばかり」を含む節の述語部分によって設定される質問という設定条件は課題の設定条件として適切といえよう。また、「名詞(句)＋ばかり」のほかの例文についても、以上の条件が当てはまるかを検討し、新しく補充すべき設定条件がないかを考え、引き続き分析する。

一方、「名詞(句)＋ばかり＋は／が／も」の用例には、以下のような、数量詞が上接語句となる用例が30例見られる。

(10) 夜具は五布で三人いっしょに寝る規則だが、人数に対して夜具にゆとりがあるため、三人の小頭と栄二、また女衞の六のほか二人ばかりは、めいめい一人で寝ていた。(山本周五郎『さぶ』)

(11) 坂本には六角勢が一万ばかりもあつまっていると申すではござりませぬか。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

例(10)では、「ばかり」は数量詞「二人」に下接している。まず、発話者は例文の人たちがどういうふうに寝ていたかを知らないとしよう。発話者は目の前の事態や状況を何らかの言語で表現するためには、つまり、例(10)を言うために、観察対象の領域内の人たちがどのように寝ていたかを観察しなければならない。つまり、実際の寝具に寝ている人物たちを考察する。最初の寝具では、三人が一緒に寝ていた。次の寝具では、三人が一緒に寝ていた。…次の寝具では、一人で寝ていた。…その次の寝具では、一人で寝ていた。…などの結果にたどり着く。その結果、一人で寝ていたのは一人＋一人の二人である。観察する過程で計算もしている。この点は例(3～9)と異なるところである。また、このような観察と計算は発話者が無意識に行っているもので、わざわざ布団をめぐって何人寝ているかを見るというような具体的物理的なものではない。その過程での計算も、瞬時に素早く行われるため、粗い計算である。よって、例(10)の発話時、以上のような発話者の心身行動が考えられる、つまり、ある種のスキニング考察が行われているといえよう。また、スキニング考察をしている過程で粗い計算をした帰結として、「二人」という数量表現に帰結したと考えれば、そのスキニングは「ばかり」によって導かれたものと見て矛盾しない。

例(11)では、「ばかり」は数量詞「一万」に下接している。まず、発話者は「六角勢」が何人いるかを知らないでしょう。発話者は例(11)を言うために、六角勢の人たちを観察しなければならない。しかし、この観察は瞬時に素早く行われるため、人を一人一人見ていくわけではない。その人たちが占めた面積や合わせた声の大きさなどを観察し、総合的判断をした結果、「一万」にたどり着く。つまり、観察している過程で、総合的判断をしている。この点は例(3~9)とも例(10)とも異なるところである。この観察は瞬時に素早く行われており、例(11)でも、「ばかり」によるスキヤニング考察の帰結が「一万」という数値だったと考えられる。例(11)では、スキヤニング考察の過程で粗い計算ではなく、総合的判断をしている。

「名詞(句)+ばかり+は/が/も」の用例には、以上のような用例は30例しかないので、ここでの記述は以上にとどめ、次節で詳しく分析する。

また、「名詞(句)+ばかり+は/が/も」の267用例には、「ばかり」の複数性明示用法の用例が237例見られる。全体の88.8%を占めている。用法の偏りが非常に大きい。この原因は何であるか、次の節から探してみたい。

## 2.2 「名詞(句)+ばかり+の」

「名詞(句)+ばかり」の全3286用例のうち、「名詞(句)+ばかり+の」の用例は327例ある。そのうち、「ばかり」が数量表現に下接する用例は231例を占める。

まず、以下の用例を見てみよう。

(12) 二人は気ながに待つよりほかはなかったので、ゆっくり弁当を食べていると上り列車が入って来て、三十人ばかりの下車客がプラットフォームに降りて来た。(井伏鱒二『黒い雨』)

(13) 太郎は、自分の受験番号を、もう一度、掲示板で確かめてから、ちらほらとしか人気のない窓口に行き、十七万八千円ばかりの金を納めた。(曾野綾子『太郎物語』)

(14) 三十秒ばかりのあいだは物音一つしなかった。(フィッツジェラルド『クレート・ギャツビー』)

(15) 私は二枚ばかりの単衣を風呂敷に包むと、それを帯の上に背負って、それこそ飄然と、誰にも沈黙って下宿を出てしまった。(林芙美子『放浪記』)

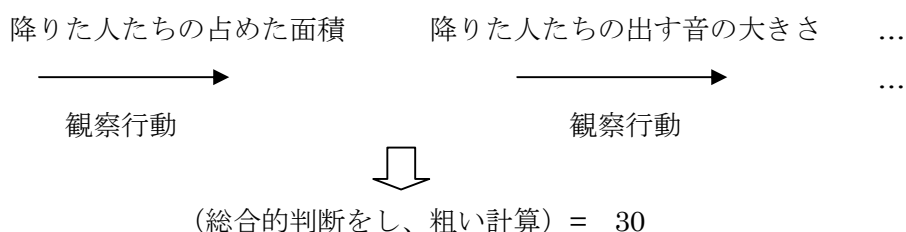
(16) カペルナウモフの住居の入口はどこだろうと、なんだか狐につままれたような気持ちで、真っ暗い中をしばらくうろろろしていると、不意に、三歩ばかりのところで、誰かのドアが開いた。(ドストエフスキー『罪と罰』)

(17) 傍の粗朶の束に乘せられて、三歳ばかりの女の子が無心に毛糸の玉を持っていた。(川端康成『雪国』)

(18) 家まで二百メートルばかりのところへ来ると、リョーヴィンは向うから走って来るグリーシャとターニャの姿に気づいた。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

例（12～18）では、「ばかり」の上接する語句はすべて数量を表す語句である。例（12）では、「ばかり」の上接する語句は「三十人」である。まず、例（12）の発話以前に、発話者は実際に上り列車から降りた人の数を知らないとしよう。例（12）を言うために、発話者による降りた人の数を数える認知行動が必須だろう。すなわち、上り列車が来た時、列車の搭乗口に注目し、まず一人が降りた、もう一人が降りた、また一人が降りた...などと観察する。しかし、発話者は瞬時に無意識でこの一連の観察行動を行っているわけで、「よし、上り列車から降りた人を数えよう」などを考え、積極的に行動に移したわけではない。よって、この一連の観察行動は素早く粗く行われるものである。確実に降りた人たち全員を一人一人観察し、数えることは一瞬でできないので、降りた人全体を観察し、粗く計算をする。その結果、「三十人」にたどり着く。また、複数回観察し、降りた人たちの占めた面積などをも含め、総合的判断をした結果、「三十人」にたどり着く。言い換えれば、1+1を30回足し算する単純な計算ではなく、降りた人たちの状態を見るなどの総合的判断をした粗い計算である。以下の図で表示できる。

図 3



また、実際に降りた人の数は 29 人かもしれないし、31 人かもしれない。しかし、一瞬で粗く行った計算では、29 人や 31 人などの精確な数字を算出するのは不可能である。すなわち、30 人という大まかで区切りのいい数量しか算出できない。

例（13）では、「ばかり」の上接する語句は「十七万八千円」である。まず、発話者が太郎が実際にいくら金を納めたかを知らない場合、例（13）を言うために、発話者には太郎が納めた金を観察する認知行動が必須だろう。その観察の内実は、太郎が納めたお金の形の可能性によって異なると思われるが、いずれにしても、金額の全体を把握するにはその観察が少なくとも紙幣、硬貨の有無を含めて複数回行われる必要がある。また、「ばかり」の上接する数量「十七万八千円」は、「太郎はいくら金を納めたか」について、複数回の観察を経て、すべての紙幣の厚みなどを見て総合的判断をし、粗く計算した結果、たどり着いた答えに相当する。

また、当該の 230 例を精査すると、すべての「ばかり」の上接する語句は区切りのいい数量詞である。「百メートル」「一時間」「二年」などが数多く見られる。一方、「百十メートル」「一時間十分」「二年一か月」などの細かい数量詞は一例も見当たらない。また、2.1 節であげた例（10）のような 30 例にも、細かい数量詞は見られない。したがって、「ばかり」の上接する語句が数量表現の場合、区切りのいい数量表現でなければなら

ないといえよう。

例(12)でも、以上のような観察は発話者が無意識で瞬時に行っているもので、わざわざ紙幣を一枚一枚詳しく数えるというような大げさなものではない。その過程での計算も、素早く行われるため、粗い計算である。例(13)では、発話者はただ見るだけで瞬時に計算しているので、もし硬貨が入っているとしても、実際に一つ一つ数えることはない。硬貨の大体の数と形を見て、紙幣の額に加算する。したがって、緻密な計算をしていない。

しかし一方、例(15)では、粗い計算をしたものの、実際の枚数は確かに「ばかり」の上接する語句の「二枚」である。実際に、「単衣」は一枚でも、三枚でもなく、「二枚」である。つまり、「二枚」は概数ではなく、実際の枚数である。この場合の「ばかり」は実際の数量を指示している。逆に、もし実際に三枚ある場合、「二枚ばかり」ではなく、「三枚ばかり」と表現されるはずである。また、実際の数量(例(15)では「二枚」)が上接する語句となるのは、少ない数量の場合、粗い計算でも計算の結果が一致しやすいからだと考えられる。

また、例(16)では例(15)と似ているが、実際の距離は人によって二歩の場合も四歩の場合もある。これは、「ばかり」が実際の正確な数値を表しているわけではなく、人間の歩幅を目安にして粗い距離を観察していることによると考えられる。「ばかり」の上接する語句「三步」自体は決まった距離ではなく、人によって違うものであり、その点で、例(16)でも、例(15)でも、「ばかり」は実際の正確な数値を表してはいない。

例(12~16)の共通するところは、「何人の下車客がプラットフォームに降りてきたか／いくらのお金を納めたか／どれくらいのあいだか」などを知るため、複数回観察をし、粗く計算した結果、帰結として「ばかり」の上接語句としての数値にたどり着くことである。例(12~14)では、総合的判断をし、粗く計算をしたが、例(15)では、単衣は「二枚」で、瞬時に足し算で算出できる数字、つまり、単純な計算で算出できる数字なので、総合的判断は必要ない。例(16)では、「三步」の距離も単純な計算で算出できる数字なので、総合的判断は必要ない。また、例(15)(16)では、「ばかり」は実際の数量に一致する値が帰結となっているので、先行研究では、概数量や程度用法などではなく、「最適値計算」(井上 1993)「度数算出用法」(定延 2003)<sup>6</sup>と呼ぶことがある。本稿でも、同様の立場からこのような「ばかり」の用法の命名に最も相応しいものを検討したい。

例(17)では、「ばかり」の上接語句は「三歳」である。例(17)を言うために、発話者は女の子の年齢を知らなければならない。したがって、女の子を観察する必要がある。しかし、この観察行動は、例(12~16)で行われてきたような観察行動と相当異なる。観察しながら計算しているわけではない。ただ女の子の外見や背丈などを見て、総合的

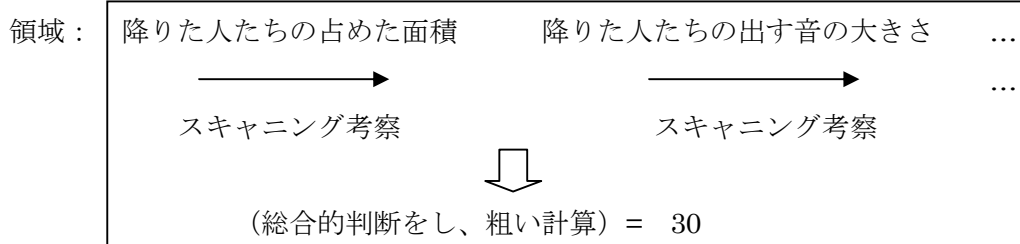
---

<sup>6</sup>定延(2003)では、「ばかり」のいわゆるとりたて用法に「探索」という概念を用いているが、「ばかり」の「度数算出用法」を記述説明する時に「探索」という概念を使用していない。

判断をし、「三歳」にたどり着く。総合的判断をするには、女の子の外見や、背丈、仕草などの点から複数回観察する必要がある。この点では、例（12～16）と同じように、複数回観察を行った結果、「ばかり」の上接する語句にたどり着く。

例（15）（16）からわかるように、「ばかり」は実際の値に一致する数量を指示することもある。概数量や程度が本質とはいえない。また、例（17）からわかるように、「ばかり」は必ずしも計算を行っていない。例（12～14）と同じように、総合的判断をしている。ただし、例（12～14）では、総合的判断とともに、粗い計算をしている。例（17）では、総合的判断だけを行っている。一方、例（12～17）の共通点は、複数回観察を行った結果、「ばかり」の上接する語句の数量表現にたどり着くことである。したがって、本研究では、先行研究の名称を避け、数量表現が上接する語句となる例（12～17）のような「ばかり」の用法の共通性に注目して、これを数量指示用法とする。また、以上の考察から、「ばかり」による数量指示用法においては、いずれにしても認知的な観察行動が行われていると考えられる。例えば、例（12）では、「ばかり」によるスキヤニング考察の領域は一回一回スキヤニング考察の集合で、スキヤニング考察をしている過程で、粗い計算をし、総合的判断をしている。以下の図で表示できる。

図 4



例（12～18）のような「ばかり」の数量指示用法の、前節で述べた「ばかり」の複数性明示用法との違いは、「ばかり」の数量指示用法では、スキヤニング考察をしている過程で粗い計算また総合的判断をする、または粗い計算と総合的判断の両方をするのである。

次に、前節で提示した課題の設定条件が「名詞（句）+ばかり+の」の場合に適用できるかどうかについて見てみよう。

例（12）では、「ばかり」の上接する語句は「三十人」なので、課題の疑問詞は「何人」となる。「ばかり」を含む節の述語が課題の質問の述語をなすので、課題は「何人の下車客がプラットフォームに降りて来たか」となる<sup>7</sup>。この課題は発話者が当該の文を発話する前の心理行動と一致している。よって、前節で提示した課題の設定条件が例（12）に適用できる。また、例（18）では、「ばかり」の上接する語句は二百メートルなので、課題の疑問詞は「何メートル」となる。「ばかり」を含む節の述語部分は「来る」なので、

<sup>7</sup> 「名詞句+ばかり+の」の場合、ばかりが名詞句内にあるが、この場合では、「ばかり」を含む節の述語は自動的に主節の述語になる。

課題は「何メートルの所へ来るか」である。この課題も発話者が例(18)の文を発話する前の心理行動と一致している。また、例(12)と例(18)からわかるように、「名詞(句)＋ばかり＋の」の場合、課題は「疑問詞＋の＋「ばかり」節の修飾する語句」の形で、当該の文の「名詞(句)＋ばかり＋の＋「ばかり」節の修飾する語句」という構文と同じである。また、「名詞(句)＋ばかり＋の」の例(12～18)のような231例では、すべての例文の課題は「疑問詞＋の＋「ばかり」節の修飾する語句」の形で設定される。したがって、前節で提示した設定条件以外に、特殊な条件が適用されると考えられる。つまり、「ばかり」に「の」が下接する場合、課題の構文は「ばかり」節の構文環境をとり、「疑問詞＋の＋名詞」であるということである。さらに、前節で提示した、「ばかり」の上接する語句についての質問、そして、「ばかり」を含む節の述語部分を使用する質問という設定条件は、231例すべてに適用できる。

一方、「名詞(句)＋ばかり＋の」の327例のうち、以上の231例以外の96例は以下のような用例である。

(19) 私が話しかけると、それまで見知らぬ顔ばかりの控室の中でいくらか緊張していたらしい大戸は、ふっと表情を柔らげて答えた。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(20) 石ばかりの小さな中庭は雨水に溢れ、水は石から石へ黒いつややかな背を見せて伝わっている。(三島由紀夫『金閣寺』)

(21) 名ばかりのような泉水には幾年も前から水が涸《か》れたままになっているらしく、青ごけが生えていた。(新田次郎『孤高の人』)

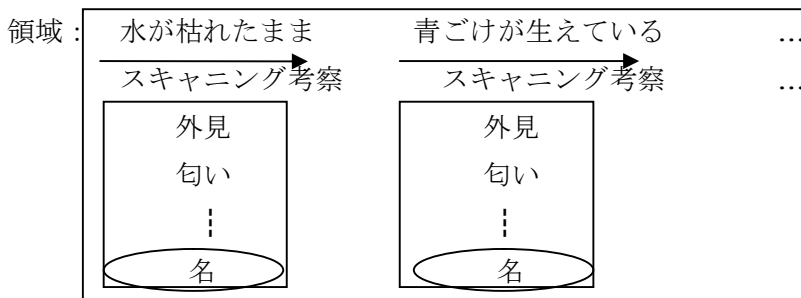
(22) といって、形ばかりの外來診察では、残った従業員の給料さえまかなうことは難かしい。(北杜夫『楡家の人びと』)

例(19～22)は例(3～9)と同じように、「ばかり」の複数性明示用法である。例(21)では、「ばかり」の上接する語句は「名」である。「どのような泉水に幾年も前から水が涸れたままになっているらしく、青ごけが生えていたか」という課題に対し、一回泉水について観察、つまりスキニング考察をしたところ、結果は、その泉水は泉水らしくなく、水が涸れたままになっており、唯一泉水というものにふさわしいものは名(外見や匂いなどは泉水にふさわしくない)である。何回スキニング考察しても、結果は唯一泉水というものにふさわしいものは名だということである。つまり、一回一回のスキニング考察の領域は泉水(の各部分)で、全体のスキニング考察の領域は複数回のスキニング考察を含む集合である。一回一回のスキニング考察の時、「外見、匂い、色、名」などを含む集合の中から、「名」を選んでいく。スキニング考察が複数回行われており、その全体の帰結が「ばかり」の上接する語句「名」にたどり着く。以下のように図示できる。



図 5

課題：どのような泉水に幾年も前から水が涸れたままになっているらしく、青ごけが生えていたか



例（3～9）のスキャンニング考察の過程とは異なるが、同じように、複数回スキャンニング考察をした結果、「ばかり」の上接する語句にたどり着く。また、例（22）の「形ばかり」のスキャンニング考察の過程も例（21）と同じである。

また、「名詞（句）＋ばかり＋の」も「名詞（句）＋ばかり＋は／が／も」と同様、「ばかり」の用法に強い偏りが見られる。327 例のうち、231 例が数量指示用法である。70.6% の割合を占めている。

### 2.3 「名詞（句）＋ばかり＋で<sup>8</sup>」

「名詞（句）＋ばかり」の全 3286 用例のうち、「名詞（句）＋ばかり＋で」の用例は 752 例ある。そのうち、以下のような用例は 646 例見られる。

(23) もっとも、川というのは名ばかりで、それはゴミとドブ泥のあいだを、汚水がかれがれに流れている大きなドブのようなものだったから、誰にしても、その中に足を踏み入れる気にはなれなかった。（山本有三『路傍の石』）

(24) 男子生徒たちに混って名門の大学受験校へ入学した数少ない女生徒たちのことであるから誇りの高い勝気な娘ばかりで、そのことはふだん彼女たちと接しているため七瀬もよく知っている。（筒井康隆『エディプスの恋人』）

(25) パーリー家の庭は木かげが多く、見わたすかぎり花ばかりなので、運命を決する、こんな重大なおりでないなら、アンは大いに楽しむところだった。（モンゴメリ『赤毛のアン』）

(26) 坐りこんでいる人たちは殆ど怪我人ばかりだが、渡る気力がなくて捨鉢気分になっているように見えた。（井伏鱒二『黒い雨』）

(27) そうじゃないでしょうねえ。あすこの子どもたちは良い子ばかりにきまってるか

<sup>8</sup> 「名詞（句）＋ばかり＋で」以外に、「～ばかりだが、ばかりだから、ばかりだったが、ばかりであり、ばかりであるが、ばかりですが、ばかりですから、ばかりでは、ばかりでも、ばかりなので、ばかりでなく、ばかりではなく、ばかりに」などの例がある。ここで「～ばかりで」と合わせて分析する。

ら、あんた方が悪いことをしたために受けてるような扱いをされる必要はないものね。  
(エミリー・ブロンテ『嵐が丘』)

(28) なにしろ、自分の家庭ばかりでなく、他人の家庭までも丸くおさめようとしているんですからね。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

(29) 俸給を貰ったのは彼ばかりではなく、会社の人なことごとく、俸給袋をふところ  
にしているのだから、どの人のふところでも袋は鳴っているはずであった。(新田次郎『孤  
高の人』)

(30) うん、本文ばかりじゃなく、署名までそうなんだ。(コナン・ドイル『シャーロッ  
ク・ホームズの冒険』)

例(23~27)は例(3~9)(19~22)と同じように、「ばかり」の複数性明示用法である。例(23)は例(21)(22)と同じように、「ばかり」の上接する語句は「名」である。スキヤニング考察の過程は同じように図5のようである。例(24~27)は例(4)のような例文と同じで、スキヤニング考察の過程は図2と同様になる。また、このような例文がほかに308例見られる。一つ一つのスキヤニング考察の過程は多少異なるにせよ、「ばかり」によるスキヤニング考察はすべて複数回行われ、たどり着いた結果は「ばかり」の上接する語句である。

一方、例(28~30)では、例(23~26)とは異なる。その一番の特徴は「ばかり」に接続するのは肯定の表現ではなく、否定の表現(「ではなく」など)だということである。例(28)では、「ばかり」の上接する語句は「自分の家庭」である。どのような家庭を丸くおさめようとしているかという課題に対し、複数回スキヤニング考察をした結果、「ばかり」の上接する語句の「自分の家庭」にたどり着く。スキヤニング考察の過程は図2のようであるはずだ。つまり、スキヤニング考察を行い、たどり着いた結果はすべて「自分の家庭」だが、一回一回スキヤニング考察をする時に、要素を選ぶ集合の中の、考えられるほかの要素「他人の家庭」は結果的に、排除されている。しかし、「ばかり」によるスキヤニング考察の過程で排除された「他人の家庭」は、文の後半に言語的に明示されている。このようなことができるのは、「じゃない」という否定の統語的な環境条件があるからである。また、「まで」を用い、一度「ばかり」で排除されたほかの要素をもう一回提示することにより、スキヤニング考察の上接する語句とほかの要素を対比している。結果的に、例(28)では、「ばかり」が表しているのは「自分の家庭」という結果を得るスキヤニング考察の複数性の明示だが、文全体のスキヤニング考察は以下のように図示できる。

図 6

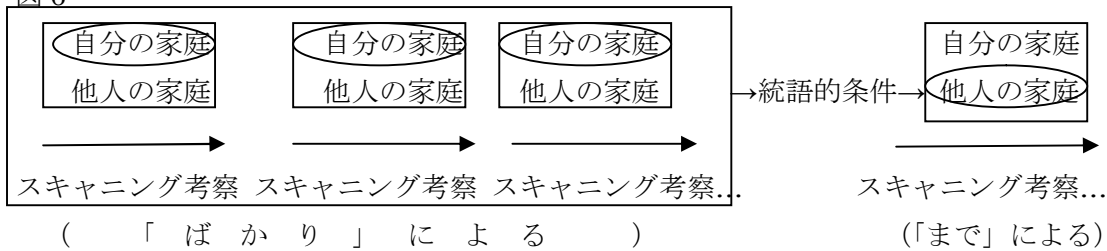


図 1、図 2 と図 6 を比べるとわかるように、図 1 と図 2 では、スキャンニング考察が複数回行われ、たどり着いた結果はすべて「ばかり」の上接する語句である。関係のない夾雑物が入っていても構わないが、発話者の注目が「ばかり」の上接する語句に帰結するという事は変わらない。複数回行われるスキャンニング考察の結果の一致から、「ばかり」の複数性明示用法だといえる。例えば、例 (25) では、もし小さい草が一本生えていたら、スキャンニング考察の結果がすべて「花」ではなくなるが、「小さい草」は夾雑物として無視でき、帰結は「花」となる。一方、図 6 では、「まで」を用い、一度「ばかり」で注目されなかったほかの要素「他人の家庭」を提示することにより、「自分の家庭」と「他人の家庭」の対比性が明示された。つまり、「ばかり」によるスキャンニング考察では、どのような家庭を丸くおさめようとしているかという課題に対し、何回スキャンニング考察をしても、結果は「自分の家庭」にたどり着く。「まで」によるスキャンニング考察では、どのような家庭を丸くおさめようとしているかという課題に対し、スキャンニング考察をしたら、結果は「他人の家庭」にたどり着く。例 (27) では、「ばかり」の表す用法は複数性明示用法だが、否定、また排除されたほかの要素の提示という二つの統語的な環境条件があるので、文の後半ではほかの語句によるスキャンニング考察が行われている。例 (29)、(30) も例 (28) と同じである。

また、2.1 節で述べたように、スキャンニング考察は発話者や聞き手<sup>9</sup>により、瞬時に行われている。複数回、全く同じスキャンニング考察を行って複数性を明示することにより限定的解釈が生じる例 (28~30) のような用法では、「ばかり」は結果的に、「だけ」同様、集合内の特定の要素を限定するので、「だけ」と互換できる。例 (28~30) では、統語的な環境条件が提示されてから、「まで」などほかの機能語によるスキャンニング考察が行われているが、これは「ばかり」によるスキャンニング考察とは独立に行われる。

一方、以下のような、数量名詞（句）を上接語句とする用例は 106 例見られる。

(31) 玄関口に行ってみると、救護事務は割合うまく捗って、あと二十人ばかりで一段落のところであった。(井伏鱒二『黒い雨』)

(32) いたのは三十分ばかりだが、ひどく興奮した様子で、手を振り振り歩きまわりながら、何事か熱心にしゃべりまくるのが、居間の窓からちらちらと見えた。(コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』)

<sup>9</sup> 聞き手は例文を解釈する時、スキャンニング考察を行うと考えられる。

例 (31) (32) のような例文は「名詞 (句) +ばかり+の」の例 (12~18) と同じように「ばかり」の数量指示用法である。「名詞 (句) +ばかり+で」では、「名詞 (句) +ばかり+は／が／も」が複数性明示用法に偏り、「名詞 (句) +ばかり+の」が数量指示用法に偏るのと同様、「ばかり」の用法の偏りが見られる。752 例の中の 646 例、つまり 85.9% の割合で、「ばかり」の数量指示用法に偏る。「名詞 (句) +ばかり+の」と同じ傾向を示すことについては考察の余地がある。結論 (第五章) で再度検討する。

## 2.4 「名詞 (句) +ばかり+か」

「名詞 (句) +ばかり+か」のような用例は 123 例見られる。以下の用例を見てみよう。

(33) 絵画ばかりか、文学にまであてはまりますわ、ゾラとかドーデーなどの。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

(34) 十六章を読めばわかるように、昆虫は殺虫剤に抵抗性をみせるようになり、昆虫ばかりか、おそらくほかの生物の遺伝因子がかわりつつある。(レイチェル・カーソン『沈黙の春』)

例 (33) では、「ばかり」の上接する語句は「絵画」であり、一回一回スキニング考察をする時に、要素を選ぶ集合の中の、考えられるほかの要素の一つが「文学」である。複数性明示用法と解釈できる。しかし、例 (28) と同じく、「絵画ばかり」で結果的に排除された「文学」が、文の後半に提示されている。このようなことができるのは、「ばかり」に下接する「か」の作用と考えられる。『日本国語大辞典』(小学館) では、「か」は「疑問あるいは反語の意を表す」とある。例 (33) において、「ばかり」の直後に、「か」を用いることで「絵画ばかり」について疑問を投げかけ、後続の主節で「文学にまで」を提示することで、スキニング考察の帰結が「絵画」のみとなることを否定している。したがって、例 (33) の「ばかりか」の「か」が疑問あるいは断定の留保を表し、限定される事柄が、スキニング考察の帰結としての「ばかり」の上接語句のみに決定しないという点で、例 (33) は例 (28) に非常に似ている。例文全体のスキニング考察を図で表せば、図 6 と全く同じ形の図になるだろう。

しかし、例 (33) では例 (28) と違い、「ばかりか」は「だけか」と置き換えられない。「ばかりか」の表す意味は、「だけか」と全く異なる。よって、本稿では、「ばかりか」を「ばかり」から派生した新しい表現だと考えている。理由は以下の二つである。一つは、「ばかりか」の用法は、「ばかり」の用例全体の中でごくわずかだということである。もう一つは、例 (28) のような用例では、「ばかり」は「だけ」と置き換えることができるが、類似する例 (33) のような用例では、「ばかりか」は「だけか」と置き換えられないことである。すなわち、「ばかりか」は、「ばかり」とは、異なる定型の、別の語彙項目になっている。したがって、本稿では、「ばかりか」を「ばかり」から派生した表現と

して扱う。

## 2.5 「名詞（句）＋ばかり＋だ／である<sup>10</sup>」

「名詞（句）＋ばかり」の全 3286 用例のうち、「名詞（句）＋ばかり＋だ／である」の用例は 520 例ある。まず以下のような用例を見よう。

(35) その時代のことは、いま思い出してもおかしな事ばかりだ。(五木寛之『風に吹かれて』)

(36) みんな生きのいい若者ばかりである。私は外国のいたる所で連中に出会い、友だちになった。(五木寛之『風に吹かれて』)

(37) すべての項目が予想をはるかに上廻る数字ばかりであった。(吉村昭『戦艦武蔵』)

(38) ぼつりぼつりと安田が口にする文句は、おそろしくありきたりの言葉ばかりであった。(北杜夫『楡家の人びと』)

(39) 少将や侍従たちを連れてきた。いい若者ばかりだろう。(田辺聖子『新源氏物語』)

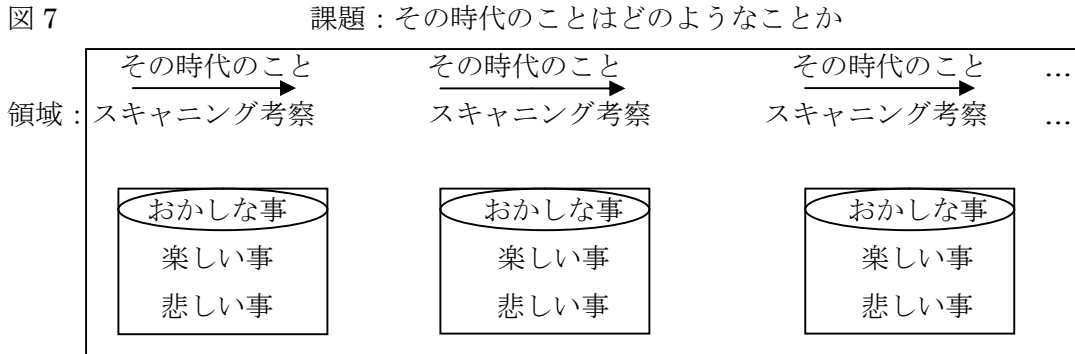
(40) それは収入のためばかりではありません。むしろ収入なんてのは、どっちでもいいことなんですよ。(イプセン『人形の家』)

例 (35～38) は (3～9) と同じように、「ばかり」の複数性明示用法である。例 (35) では、「ばかり」の上接する語句は「おかしな事」である。まず、発話者が例 (35) を言うためには、一連の観察行動を取らなければいけない。つまり、例 (35) では、一回観察して、思い出したのは「おかしな事」だった。何回観察しても、思い出したのはすべて「おかしな事」だった、というようなスキニング考察が行われているとすれば、つまり、複数回スキニング考察をし、たどり着いた結果はすべて「ばかり」の上接する語句の「(いま思い出しても) おかしなこと」であるということだ。しかし、ここでは課題の設定について再検討の必要がある。例 (35) の課題は「その時代のことは(思い出すと) どのようなことであるか」であると考えられる。課題を設定する時、「ばかり」の上接する語句についての質問、課題の述語は「ばかり」を含む節の述語部分を使用するという設定条件以外に、場合によっては主語が必要だといえる。なぜなら、「名詞（句）＋ばかり＋だ」の場合「ばかり」自体が節の述語位置にあるので、2.1 節で提示した二つの設定条件だけでは、観察行動に十分な課題が設定できないからである。ここでは、「ばかり」の上接する語句から設定できる疑問詞「どのようなことであるか」を聞いている時の主語を、「ばかり」を含む節の主語が示していると考えられる。例 (35) では、「ばかり」を含む節の主語は「その時代のこと」であるので、課題は「その時代のことはどのようなことか」となる。したがって、2.1 節で提示した課題の設定条件だけでは課題を設定で

---

<sup>10</sup> これ以外に、「～ばかりだった、ばかりだからね、ばかりだろう、ばかりだわ、ばかりであった、ばかりでした、ばかりでございます、ばかりではない、ばかりなのです、ばかりよ、ばかりり」などの例も含める。

きない場合、追加条件が適用されると考える。「名詞（句）＋ばかり＋だ」の場合、課題の主語は、「ばかり」を含む節の主語によって設定される。例（35）でのスキヤニング考察は以下のように図示できる。



例（35）でのスキヤニング考察の過程は例（4）の過程、図2と同様である。

例（36）では、「ばかり」の上接する語句は「生きのいい若者」である。課題は「みんなはどのような人か」である。2.1節で提示した二つの設定条件だけでは、課題は「どのような人か」となる。これは例（35）と同じように、漠然としすぎて、何を観察するか迷ってしまう。よって、上接語句によって直接設定できる質問「どのような人か」の追加条件として、主語が必要である。したがって、2.1節で提示した課題の設定条件だけで課題を設定すると、状況が漠然としすぎる場合、追加条件（ここでは主語）を使用する。課題の主語は、「ばかり」を含む節の主語で、例（36）の課題は「みんなはどのような人か」となる。

このように、「ばかり」句の文中での位置によっては、2.1節で提示した二つの設定条件以外に、追加条件も必要であるといえるだろう。例（35）（36）以外の例文にも、この追加の設定条件が適用される場合がある。例えば、例（37）では、課題は「すべての項目がどのような数字なのか」である。課題に「すべての項目が」という主語が必要である。主語がないと、範囲が広すぎて、何を観察するか迷ってしまう。例（38）では、課題は「ぼつりぼつりと安田が口にする文句は、どのような言葉なのか」である。同じように、課題に「ぼつりぼつりと安田が口にする文句は」という主語が必要である。また、「名詞（句）＋ばかり＋だ／である」の520例すべてに、この追加条件が適用できる。

また、例（40）は、「名詞句＋ばかり＋で（は）なく」の例（28～30）と似ている。例（40）では、「ばかり」に下接するのは否定の表現ではあるが、結果的に排除されたほかの要素の提示が次の文でなされる。したがって、例（40）では、文二つで図6のようなスキヤニング考察をしている。最初の文「それは収入のためばかりではありません」は図6の左のほうのスキヤニング考察を行っており、次の文「むしろ収入なんてのは、どっちでもいいことなんですよ」は図6の右のほうのスキヤニング考察（例（40）では、「まで」ではなく「むしろ」によるスキヤニング考察が行われる）を行っている。

一方、以下のような数量名詞を上接語句とする例文がこの類型でも 16 例見られる。

(41) 西鉄香椎駅で降りて、海岸の現場までは、歩いて十分ばかりである。(松本清張『点と線』)

(42) 「常在寺へゆく」と、城門を出た。供は十人ばかり。この時代のこととて、それぞれ腹巻をつけ、弓、長槍をもっている。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

(43) 今別れるんなら、どうしたって二千元は貰わなくちゃ。(中略) 何さ、五百円ばかり。これじゃ今までの苦労が水の泡じゃないの。このくらいなら、もうすこし潮時を見てたほうがよかったわ。あたしどうしたって二千元……。(石川淳『焼跡のイエス・処女懐胎』)

例 (41) (42) は例 (12~18) と同じく、「ばかり」の数量指示用法である。また、課題の設定条件に追加条件が必要である。つまり「海岸の現場まではどれくらいなのか」という主語が必要である。ほかの 14 例も同様で、追加条件が必要だという課題の設定条件が適用される。

しかし、例 (43) では、課題は「いくらもらえるか」ではない。前文脈と例文の最後に「どうしたって二千元」という表現がある。このような先行文脈がある場合、これがスキミング考察を行う前提として関与し、「どうしたって二千元ほしいが、いくらもらえるか」が課題となる。つまり、2.1 節で提示した設定条件と以上で提示した設定条件以外に、例 (43) のような先行文脈がある場合、課題に、その先行文脈が連用修飾節として必要とされるという条件が考えられる。この条件は、特殊（先行文脈がある）な場合のみ、必要とされるので、特殊条件とする。また、「ばかり」の上接する語句「五百円」は予想していた「二千元」と対比され、「五百円」は単なる数量ではなく、「五百円」という、「少ない」という評価を伴う表現となる。ただし、このような例文はごくまれである。

また、「名詞（句）+ばかり+だ／である」では、2.1、2.2、2.3 節同様、「ばかり」の用法に偏りが見られる。「名詞（句）+ばかり+だ／である」の全 520 例のうち、「ばかり」の複数性明示用法を表す例文は 504 例見られる。96.9%の割合で「ばかり」の複数性明示用法に大きく偏る。

## 2.6 「名詞（句）+ばかり+述語句」

「名詞（句）+ばかり」の全 3286 用例のうち、「名詞（句）+ばかり+述語句」の用例は最も多く、1297 例ある。まず以下のような用例を見よう。

(44) 「ヒースクリフは家にいないの？」と、キャサリンが手袋を脱ぎながら聞きましたが、その指は、何もしないで家の中にばかりいたせいで、びっくりするほど白くなっていました。(エミリー・ブロンテ『嵐が丘』)

(45) なぜこんな不運な目にばかりあうのかしらとお考えになると、悲しくて、死んでしまいたいようなお気持ちになるのであった。(田辺聖子『新源氏物語』)

(46) けれども、いつまでもランプそうじや、お茶くみばかりしていたのでは、仕事が覚えられないから、吾一は、かつてに文選の練習をやっていた。(山本有三『路傍の石』)

(47) 喜助の父親は茶器や菓子器などの細工師だとばかり思っていたのだが、人形までもつくっていたのかと思うと、いっそうこの暗い大きな藁屋根の下に住む父子二代の竹工に尊敬の念が湧いた。(水上勉『雁の寺・越前竹人形』)

例(44~47)は例(3~9)と同じように、「ばかり」の複数性明示用法である。例(44)では、「ばかり」の上接する語句は「家の中に」である。まず、発話者がキャサリンがどこにいて白くなったのかを知らない場合、例(35)を言うためには、発話者は一連の観察行動を取らなければいけない。つまり、一回観察して、キャサリンは「家の中に」いる。時間を経ってからもう一回観察をし、キャサリンはまた「家の中に」いる。何回観察しても、キャサリンは「家の中に」いる。したがって、複数回スキニング考察をし、たどり着いた結果はすべて「ばかり」の上接する語句の「家の中に」であるといえるだろう。例(44)でのスキニング考察の過程は例(35)の過程、図7と同様である。

また、2.1節と2.5節で提示した課題の設定条件が例(44)の場合に適用できるかどうかについて見てみよう。例(44)では、「ばかり」の上接する語句は「家の中に」なので、課題の疑問詞は「どこに」となる。「ばかり」を含む節の述語部分は「いた」なので、課題の述語は「いた」である。「いた」という述部の項として主語が自動的に要請される。つまり追加条件として、「キャサリンは」という主語が必要である。したがって、課題は「キャサリンはどこにいたか」である。この課題は発話者が当該の文を発話する前の心理行動と一致している。よって、前節で提示した課題の設定条件は例(44)に適用できるといえる。

例(45)では、課題は「例文の主人公はどんな目に合うか」である。2.1節で提示した設定条件と2.5節で提示した設定条件で設定できる。また、ほかに見られる例文877例では、2.1節で提示した二つの設定条件がすべて適用できる一方、2.5節で提示した設定条件の必要ない例文もある。したがって、2.1節で提示した設定条件(「ばかり」の上接する語句についての質問、そして、「ばかり」を含む節の述語部分を使用する質問)は必須条件である。また、2.5節で提示した設定条件は、2.1節で提示した課題の設定条件だけでは課題が設定できず、状況が漠然としすぎる場合、新たな条件として要請される。つまり、課題の主語は「ばかり」を含む節の主語によって設定することが追加条件となることが、はっきりわかった。

一方、以下のような数量名詞が「ばかり」の上接する語句となる例文がこの類型にも420例見られる。

(48) 甘ったるい声が出て、うしろの障子が半分ばかりあいた。(山本有三『路傍の石』)



- (49) ちょっとお寄りして、腰をかけて、五分ばかりお天気のお話でもされて、それから立って失礼なされば、それでいいんですもの。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)
- (50) 男が二十人ばかり雨のなかに立っていた。(スタインベック『怒りの葡萄』)
- (51) もう一つの事件は、それから三月ばかり経って、青山の榎家のほうで起った。(北杜夫『榎家の人びと』)

例(48~51)は例(12~18)と同様、「ばかり」の数量指示用法である。

また、「名詞(句)+ばかり+述語句」の全1297例のうち、「ばかり」の複数性明示用法の用例が877例見られ、「ばかり」の数量指示用法の用例が420例見られる。「ばかり」の複数性明示用法の例文が占める割合が67.6%である。2.1、2.2、2.3、2.5節で見られた強い用法の偏りはない。

### 3. まとめ

「名詞(句)+ばかり」は、「ばかり」句の文中での位置によって、六つのパターンに分けられる。この時、「ばかり」の用法には、複数性明示用法と数量指示用法が見られる。それぞれのパターンについて、用法ごとの用例数を表1に示した。「名詞(句)+ばかり+は/が/も」「名詞(句)+ばかり+で」「名詞(句)+ばかり+だ/である」の場合、「ばかり」の用法はそれぞれ88.8%、85.9%、96.9%の割合で強く複数性明示用法に偏る。「名詞(句)+ばかり+の」の場合、70.6%の割合で強く数量指示用法に偏っていることがわかる。

表1 「名詞(句)+ばかり」の用例の分布

単位：例

	複数性明示用法	数量指示用法	合計
ばかり+は/が/も	237(88.8%)	30(11.2%)	267
ばかり+の	96(29.4%)	231(70.6%)	327
ばかり+で	646(85.9%)	106(14.1%)	752
ばかり+か	123(100%)	0	123
ばかり+だ	504(96.9%)	16(3.1%)	520
ばかり+述語	877(67.6%)	420(32.4%)	1297
合計	2484	802	3286

このような用法の偏りは、「ばかり」節の文中での位置が大きく影響していると思われる。「は/が/も」が「ばかり」に下接する場合、「ばかり」節自体が項名詞句となりやすく、おのずと上接名詞は人やモノなどに偏る。人やモノなど、個物の集合を対象領域としてスキヤニング考察をすれば、人やモノといった個物の複数性明示になりやすいといえるだろう。

一方、「名詞(句)+ばかり+の」の場合、「ばかり」節が名詞を修飾するので、被

修飾名詞の性質や状態、属性を説明する節となる。数量表現は、被修飾名詞の属性の一つといえるので、被修飾名詞の属性を説明する「名詞（句）＋ばかり＋の」が数量指示用法に傾くのは理解しやすいだろう。

「名詞（句）＋ばかり＋で」の場合に数量指示用法に偏りやすいのも、「名詞（句）＋ばかり＋で」が述語句を構成しており、なんらかの属性を示すためであると考えられる。また、「名詞（句）＋ばかり＋でなく」のような用例が数多く、207例見られる。このような統語的な環境条件がある例文の用例数が多いのも、「ばかり」の用法の偏りの原因の一つだと考えられる。

また、「名詞（句）＋ばかり」におけるスキヤニング考察の課題の設定条件を明らかにした。必須条件は、課題は「ばかり」の上接する語句についての質問、そして、「ばかり」を含む節の述語部分を使用する質問だということである。追加条件は、必須条件だけでは課題を設定できない場合や、状況が漠然としすぎる場合には、「ばかり」を含む節の主語が課題の主語となる、ということである。さらに、二つの特殊条件が考えられる。一つは、「ばかり」に「の」が下接する場合、課題の構文はばかり節の構文環境をとり、「疑問詞＋の＋名詞」となるということである。もう一つの特殊条件は、例文に先行文脈がある場合、その先行文脈を連用修飾節として課題に組み込むということである。「名詞（句）＋ばかり」の場合、必須条件と追加条件がすべて適用される。「名詞（句）＋ばかり＋の」構文の例文では、一つ目の特殊条件がすべて適用される。例文に先行文脈のある例文、つまり、二つ目の特殊条件が適用される例文はごくまれである。

### 第三章 「動詞（句）＋ばかり」における「ばかり」の諸用法について

#### 1. はじめに

動詞は事物の動作、作用、状態、存在などを表す品詞である。「ばかり」が動詞に下接する場合、動作が完了してまだ間もないという意味の例文が数多く見られる。例えば、例（1）である。また、事物の状態を表す例文も多く見られる。例えば、例（2）である。例（2）では、動詞「とろける」＋「ばかり」は実際行われたデキゴトではなく、「悦び」の状態（または程度とってよいだろう）を表している。一方、動詞の表すデキゴト自体に注目せず、そのデキゴトが繰り返されることを強調する例文も見られる。例えば、例（3）である。

（1）こいつは、まだ山から来たばかりで、なれていないんですよ。（開高健『パニック・裸の王様』）

（2）恋の初めての感動の、とろけるばかりの悦びよ。（ツルゲーネフ『はつ恋』）

（3）ケートが、優しく抱きかかえて慰めたが、ジャックは、「許して、許して」と泣き叫ぶばかりだ。（ジュール・ベルヌ『十五少年漂流記』）

例（1）と（2）（3）では、「ばかり」は明らかに全く異なる意味である。本章では、動詞に下接する「ばかり」の用法分化の条件や用例の分布の特徴などを明らかにしたい。また、前章と同じく、スキヤニング考察という観点で、動詞に下接する「ばかり」のすべての用例を分析する。スキヤニング考察という認知的な観察行動が、すべての、動詞に下接する「ばかり」の例文に適用できるかどうかを確かめる。さらに、スキヤニング考察の課題の設定条件は前章で提示したもの以外にどのようなものがあるかを探りたい。

また、本章では、「動詞＋助動詞＋ばかり」（「～た＋ばかり」「～れる／られる＋ばかり」「～せる／させる＋ばかり」「～される＋ばかり」「～たい＋ばかり」「否定＋ばかり」）と「動詞＋格助詞＋ばかり」も含め、「動詞（句）＋ばかり」のすべての実例を考察し、動詞句における「ばかり」の特徴を分析していく。

#### 2. 考察

「動詞（句）＋ばかり」の用例は 2431 例見られる。「ばかり」の上接する動詞の形の違いによって、以下の三つのパターンに分けて記述説明する。

- タ形＋ばかり
- テ形（「ている」も含む）＋ばかり
- ル形（「んばかり」と否定のル形を含む<sup>11</sup>）＋ばかり

---

<sup>11</sup>また、「～れる／られる＋ばかり」は 17 例、「～せる／させる＋ばかり」は 25 例、「～され

## 2.1 「タ形+ばかり」

「動詞（句）+ばかり」の全 2431 用例のうち、「タ形+ばかり」の用例は 862 例見られる。まず、以下の用例を見てみよう。

(4) おまえは、いまきたばかりだ。たぶんこれから土地のこともわかってくるだろうよ。  
(スタインベック『怒りの葡萄』)

(5) つぎに試みに、死体の発見された二十一日朝の六時半ごろを見ると、列車は岩手県の一戸駅を発車したばかりであった。(松本清張『点と線』)

(6) 二日前に元老院で決議されたばかりで、国会にはまだ通告されていないから知らないと思うが、ヴェネツィア共和国はビザンチン帝国皇帝の援軍要請に応じて、コンスタンティノーブルに艦隊を派遣することになった。(塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』)

(7) きっといまして起きたばかりで、まだ着物を着はじめてもいないのであろう。(カフカ『変身』)

(8) その前には試食用のテーブルが置かれていたが、まだ夜も明けたばかりなので、試食サービスは行われてはいなかった。(村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』)

例(4)では、「ばかり」は動詞、つまり、デキゴト「きた」に下接している。まず、発話者が動作主「おまえ」の行動がどうだったかを知らないと仮定しよう。発話者が例(4)を言うためには、動作主「おまえ」を行動の面から観察する必要がある。まず、動作主「おまえ」が「きた」という眼前で把握した事態が観察できる。デキゴト「くる」は完了の状態である。次に、同じく事態のレベルで観察行動を続けると、考えられるほかのデキゴト、例えば、後続節で言及のある「土地のことを分かってくる」にたどり着く。デキゴト「土地のことを分かってくる」は発話時点では、未完了の状態である。その次に、考えられるほかのデキゴト、例えば「近所付き合いをする」にたどり着く。デキゴト「近所付き合いをする」も未完了の状態である。

つまり、発話者はまず、動作主がどのような行動で特徴付けられるかという疑問のもと、動作主の行動を観察する。自然に、動作主の起こすデキゴトにたどり着く。また、動作主がすでに起こしたデキゴトと、考えられるほかのデキゴトは発話者にとって、実際に起こると想定されたデキゴトなので、すべてのデキゴトが時間軸に起こる順番で並んでいる。さらに、一回一回の観察の領域である各デキゴトは、一つの集合をなし、各要素（デキゴト）は集合の中に時間的前後関係で位置している。

また、各デキゴトを見る時、デキゴトについてそれぞれ時間的展開の様相の集合（中

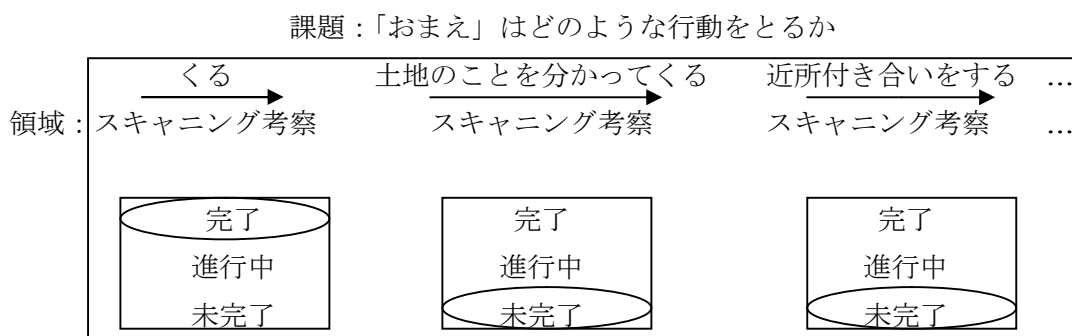
---

る+ばかり」は 14 例、「～たい+ばかり」は 12 例と数少ないので、このような用例もこのパターンに入れる。

に「完了、進行中、未完了」などの要素がある)から、「未完了」(一つ目のデキゴト)と「完了」(その後のデキゴト)を選んでいく。したがって、例(4)では、複数要素からなる集合を前提としたスキヤニング考察が行われていると言えるだろう。複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた帰結は、デキゴト「くる」のみが完了し、その後のデキゴトはすべて未完了の状態だということである。よって、「ばかり」の上接する語句のデキゴト「きた」はタ形で表されている。

さらに、前章で提示した課題の設定条件が、例(4)に適用できるかどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「きた」である。したがって、疑問詞を含む課題の要点は「どのような行動をとる<sup>12)</sup>」である。「ばかり」を含む節の述語部分は例(4)の主節述語なので、課題は「どのような行動をとるか」となる。また、この課題では、動作主がわからないので、追加条件で動作主の「おまえ」を主語として課題に組み込む。したがって、課題が「「おまえ」はどのような行動をとるか」となる。この課題は発話者が例(4)を発話する際の心理行動と一致している。よって、前章で提示した課題の設定条件は例(4)に適用できるといえるだろう。例(4)でのスキヤニング考察は以下のように図示できる。

図 1



「ばかり」による全体のスキヤニング考察の領域は、各デキゴトを領域とするスキヤニング考察の集合である。一回一回のスキヤニング考察の結果は、当該のデキゴトが完了/未完了の状態だということである。全体のスキヤニング考察の帰結は、デキゴト「くる」のみが完了し、その後のデキゴトはすべて未完了の状態だということである。

例(5~8)は例(4)と同様の過程が考えられる。例(5)では、「ばかり」の上接する語句は「発車した」である。まず、発話者が例文の記した時間「二十一日朝の六時半ごろ」に、列車の動きを知らないと仮定しよう。発話者が例(5)を言うために、例(5)中に明示された時間「二十一日朝の六時半ごろ」の列車の動きを観察する必要がある。

<sup>12)</sup> 課題は「ばかり」の上接する語句「きた」についての質問である。「きた」は実際のデキゴトなので、課題では「どんな動作/動き/行動をとる」などのいずれを使用してもよいだろう。ここでは「どんな行動をとる」を用いて説明する。下の例文でも疑問詞はは適宜使用する。

まず、列車が岩手県の一戸駅を「発車した」ことを把握する。デキゴト「発車する」は完了である。それから、考えられるほかのデキゴト「1キロを走る」にたどり着く。デキゴト「1キロを走る」は未完了の状態である。その次に、考えられるほかのデキゴト「ほかの駅を通過する」にたどり着く。デキゴト「ほかの駅を通過する」は未完了の状態である。続けて複数のデキゴトについて観察し、たどり着いた帰結は、デキゴト「発車する」のみが完了し、その後のデキゴトはすべて未完了の状態だということである。例(5)でのスキヤニング考察は図1と同じ構造である。

また、「ばかり」の上接する語句は「発車した」なので、課題の疑問の要点は「どんな動き」である。「ばかり」を含む節の述語部分が例(5)の述語なので、課題は「どんな動きをするか」である。また、追加条件で主語「列車は」を設定する。前章で提示した課題の設定条件で課題を設定すると、課題は「列車はどんな動きをするか」である。しかし、この課題では、列車を観察する時刻がわからない。異なる時刻に、列車の動作は全く異なると思われるので、時刻を指定する必要があるといえる。課題においても、例(5)中に明示された時刻「二十一日朝の六時半ごろ」が参照時として必須要素<sup>13</sup>となる。よって、課題は「二十一日朝の六時半ごろに、列車はどんな動きをするか」になる。したがって、前章で提示した設定条件以外に、さらなる追加条件が必要だということがわかった。つまり、発話時以外の対象を観察する場合、追加条件で、文中に示された連用修飾句の時間表現など、文脈上で把握できる参照時を課題において連用修飾節として使用する。

例(6~8)でも、例(5)と同じように、例(4)の図1のようなスキヤニング考察が行われる。例(4)(7)(8)では、「動詞タ形+ばかり」は、動作が完了してまだ間もないという意味を表す。

なぜこのような意味が生じるかという点、日常生活ではデキゴトが次々と起こる。デキゴトを把握する際には、複数のデキゴトが集合をなしつつ時間軸上に並ぶ。そのうち、発話時から見て、一つだけのデキゴトが完了し、ほかのデキゴトがすべて未完了だということは、この一つのデキゴトが発話時にもっとも近いということ、発話時は、そのデキゴト完了時と次のデキゴトの間に位置することになり、その結果、完了してまだ間もないという解釈につながると考えられる。一方、例(6)では、観察時が「二日前」である。発話時から見ると、デキゴト「決議される」はすでに完了して二日経つのである。当然、デキゴトの完了の直後ではない。それでは、なぜ例(6)は不自然ではなく自然な文章なのだろうか。一つの説明は、発話者がデキゴト「決議される」のほかに想定したデキゴトが未完了であれば、客観的な時間に関わらず、完了して間もないものと位置づけられるというものである。また、例(5)でわかるように、発話時以外にスキヤニング考察の参照時がある場合、注目する時刻、すなわち参照時は、文中の時間句であり、

---

<sup>13</sup> 例(4)の場合でも、課題には時間が必要なはずである。しかし、実際に例(4)の課題では参照時が必要なのは、例(4)の場合、「発話時」と「観察時」が一致するので、課題にわざわざ参照時を組み込む必要がないからだといえる。

文脈から明らかである。つまり、例(6)では、スキヤニング考察を行う時、「二日前」を、発話時とは異なる参照時として持つ。スキヤニング考察自体は発話時に行うものだが、注目する時刻は発話時ではなく、例文の記した時刻「二日前」である。「二日前」の時点で、デキゴト「決議される」のみが完了し、ほかの考えられるデキゴトはすべて未完了である。よって、例(6)でも、「ばかり」の上接する語句「決議される」は発話時に完了して間もないものでなくても、例(6)は成り立ち、その時点での「直後」解釈が成り立つのである。したがって、「動詞タ形+ばかり」の表す「直後」は必ずしも発話時の直後を表すものではなく、厳密には参照時の直後を表すといえるだろう。

さらに、以下(9~12)の用例を見てみよう。ここでは、「動詞(句)+ばかり+の+名詞」の形式で、「動詞句+ばかり」が連体修飾節を構成している。

(9)「...中略...」と、はっきりした口調で言った。鮎太が十行程記事を書いたばかりの時だった。左山町介というのはこの男かと、鮎太は改めて彼の方を見た。(井上靖『あすなる物語』)

(10) そんな書き出しの長い手紙を、社から帰ったばかりのわたしは、レインコートのボタンを外しただけの恰好で、部屋の電燈の下に立ったまま読みました。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

(11) けれども、嵐山の病院に着き、ちょうど手術室から出て来て病室のベッドに移されたばかりの男性を見たとき、ひと目であなたであることを認めました。(宮本輝『錦繡』)

(12) その死体のなかで、らんと眼をむいて槍を構えている近習の武士が一人、それにその背後で衣装をつけおわったばかりの美濃の国主土岐政頼が、ふるえている。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

例(9)では、「ばかり」は動詞、つまり、デキゴト「書いた」に下接している。また、「書いたばかり」は「時」の連体修飾成分である。まず、発話者が注目する時刻に鮎太が何をしているかを知らないと仮定しよう。発話者が例(9)を言うために、鮎太の行動について観察しなければならない。まず、「鮎太が十行程記事を書く」というデキゴトにたどり着く。デキゴト「鮎太が十行程記事を書く」は完了状態である。次に、考えられるほかのデキゴト「鮎太が何かを言う」にたどり着く。デキゴト「鮎太が何かを言う」は未完了の状態である。その次に、考えられるほかのデキゴト「鮎太が帰る」にたどり着く。デキゴト「鮎太が帰る」も未完了の状態である。したがって、例(9)ではスキヤニング考察が行われているといえるだろう。複数回スキヤニング考察をした結果、デキゴト「鮎太が十行程記事を書く」のみが完了し、ほかのデキゴトがすべて未完了の状態であることにたどり着く。例(9)は例(5~8)と同様の説明ができる。

また、前章で提示した課題の設定条件と上で提示した設定条件が、「動詞(句)+ばかり」が連体修飾句をなす例(9)のような場合にも適用できるかどうかについて検討してみよう。

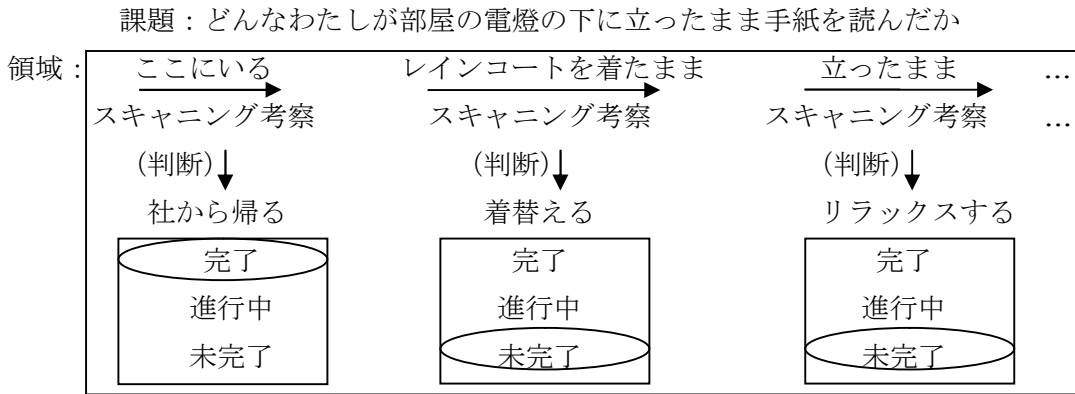
「ばかり」の上接する語句は「書いた」である。したがって疑問詞は「どのような行動」である。「ばかり」を含む節の述語部分は例文の述語である。また、追加条件で、「鮎太」を主語として使用する。さらに、前章で提示した特殊な設定条件では、「ばかり」に「の」が下接する場合、課題の構文は「ばかり」節の構文環境をとり、「疑問詞＋の＋名詞」である。したがって、課題は「鮎太がどんな行動の時であるか」である。この課題は発話者が例文を発話する前の心理行動と一致している。よって、前章で提示した課題の設定条件と以上で提示した設定条件は例（9）に適用できるといえるだろう。

例（10）では、「ばかり」は動詞、つまり、デキゴト「社から帰った」に下接している。また、「社から帰ったばかり」は「わたし」の連体修飾成分である。例（10）を言うために、どのようなわたしなのかを知らなければならない。したがって、「わたし」について観察をする。まず、「わたし」はここにいる。よって、デキゴト「社から帰る」は完了している。次に、レインコートを着たままである。よって、デキゴト「着替える」は未完了である。さらに、立ったままである。よって、デキゴト「リラックスする」も未完了である。つまり、どんなわたしが部屋の電燈の下に立ったまま手紙を読んだかに関して、「わたし」を観察する。観察で得た情報でデキゴトがどのような進行状況であるかを判断する。その結果、デキゴト「社から帰った」のみが完了し、ほかのデキゴトがすべて未完了の状態であることにたどり着く。このような複数回のスキニング考察をした結果、デキゴト「社から帰る」のみが完了し、ほかの考えられるデキゴトはすべて未完了の状態だということにたどり着く。

また、前章で提示した課題の設定条件と以上で提示した設定条件が例（10）に適用するかどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「社から帰った」である。したがって「(デキゴトについて) どんな」となる。「ばかり」を含む節の述語部分は例文の述語なので、課題の述語は「部屋の電燈の下に立ったまま読んだか」である。また、前章で提示したように、「ばかり」の文中の位置によって特殊な設定条件が必要になる。「ばかり」に「の」が下接する場合、課題の構文は「ばかり」節と同じ形式をとり、「疑問詞＋の＋名詞」となる。したがって、課題は「(デキゴトについて) どんなわたしが部屋の電燈の下に立ったまま読んだか」である。この課題は発話者が文を発話する前の心理行動と矛盾しない。よって、前章で提示した課題の設定条件と上で提示した設定条件は例（10）に適用できるといえるだろう。例（10）でのスキニング考察は以下のように図示できる。



図 2



例 (11) (12) では、例 (10) と同じ構造のスキャンニング考察が行われている。例 (11) では、「ばかり」の上接する語句は「病室のベッドに移された」である。動詞の受身を使用している。また、「病室のベッドに移された」は実際のデキゴトを表すより、「男性」の様子、つまり状態を表すといったほうが妥当だろう。課題は「ばかり」の上接する語句についての質問なので、「何をする」を使用するのではなく（「ばかり」の上接する語句は実際のデキゴトを表していないので）、「どのような」（「ばかり」の上接する語句は状態を表すので）をそのまま使用する。したがって、課題は「動作主はどのような男性を見たか」である。この課題は発話者が例文を発話する前の心理行動と一致している。例 (12) では、「ばかり」の上接する語句は「衣装をつけおわった」である。また、例 (11) と同じように、「衣装をつけおわった」は実際のデキゴトを表すより、「美濃の国主土岐政頼」の様子、つまり状態を表すといったほうが妥当だろう。課題は「ばかり」の上接する語句についての質問なので、「何をする」を使用するのではなく、「どのような」を使用する。したがって、課題は「どのような美濃の国主土岐政頼がふるえているか」である。この課題は発話者が例文を発話する前の心理行動と一致している。

以上でわかるように、課題は「ばかり」の上接する語句についての質問文だが、「ばかり」の上接する語句が実際に表す意味によって、疑問詞が異なる。「ばかり」の上接する動詞が実際のデキゴトを表す時、疑問詞は「どんな動作」「どんな動き」「どんな行動」のようになる。「ばかり」の上接する動詞が人物また事物の状態を表す時、課題は「どのような」を使用する。

また、例 (4~12) では、スキャンニング考察の過程はほんの少し異なる<sup>14</sup>が、「ばかり」による全体のスキャンニング考察の帰結は同じである。つまり、「ばかり」の上接する語句のデキゴトのみが完了し、ほかのデキゴトがすべて未完了の状態だということである。発話時に「ばかり」の上接する語句のデキゴトが完了して間もない場合 (例 (4) (10) (11))

<sup>14</sup> 例 (4~9) では、一回一回のスキャンニング考察の領域は実際のデキゴトである。一方、例 (10~12) では、一回一回のスキャンニング考察の領域は「ばかり」を含む節の修飾語句 (例 (10) では「わたし」、例 (11) では「男性」、例 (12) では「美濃の国主土岐政頼」) である。

など)でも、文中で記した時刻に「ばかり」の上接する語句のデキゴトが完了の直後で、発話時には完了の直後ではない場合(例(5)(6)など)でも、スキヤニング考察の結果は、「ばかり」の上接する語句のデキゴトとほかの考えられるデキゴトは時間的前後関係であるということでは一致している。したがって、例(4~12)のような「ばかり」の用法を「ばかり」の時間関係明示用法とする。例文では、「ばかり」の上接する語句のデキゴトが唯一完了状態であるため、「ばかり」の上接する語句、つまり動詞は「タ形」となる。

また、例えば、例(10)では、複数回スキヤニング考察をした結果の①デキゴト「社から帰る」が完了の状態、②デキゴト「着替える」が未完了の状態、③デキゴト「リラックスする」が未完了の状態の中の①だけが②や③と異なるという認識が成り立つためには、スキヤニング考察が3回以上行われなければならない。簡単な例で説明すると、例えば、

- (a) 彼が来ていない。
- (b) 彼だけが帽子の色が違う。

例(a)では、来るはずの人が何人いても、ほかの人が来た場合でも、来なかった場合でも、例(a)は成り立つ。「彼」は特殊ではない。例(b)では、帽子をかぶっている人の数が2人だと、彼の帽子の色がほかの人と違うということにはならない。彼の帽子の色が特殊だと証明するために、彼と対比するほかの人物が2人必要とされる。つまり、帽子をかぶっている人の数が最低3人必要である。

よって、例(10)でも同じである。デキゴト「社から帰る」が唯一完了されたデキゴトであることを証明するために、デキゴト「社から帰る」と対比するデキゴトが二つ以上必要である。つまり、スキヤニング考察の回数は、デキゴト「くる」を考察する一回と、対比するために必要最小限とされる二つのデキゴトを考察する2回を合わせ、3回以上必要である。例(4~9)(11)(12)も同じである。したがって、「ばかり」が時間関係明示用法を表す例文では、一回一回のスキヤニング考察は複数回、つまり、3回以上行う必要があるといえよう。

「動詞タ形+ばかり」の用例は862例見られる。そのうち、「動詞タ形+ばかり+の」の用例は347例、「動詞タ形+ばかり+だ<sup>15)</sup>」の用例は221例、「動詞タ形+ばかり+で<sup>16)</sup>」の用例は189例、「動詞タ形+ばかり+か」「動詞タ形+ばかり+に」「動詞タ形+ばかり+述語句」の用例はそれぞれ61例、27例、17例見られる。

「動詞タ形+ばかり+の」の用例はすべて時間関係明示用法である。また、前章で提

<sup>15)</sup> これ以外に、「～ばかりであった、ばかりである、ばかりでした、ばかりです、ばかりだった、ばかりだよ、ばかりなのだ、ばかりなんです、ばかりらしい」などの例も含める。

<sup>16)</sup> これ以外に、「～ばかりでなく、ばかりではなく、ばかりだが、ばかりだから、ばかりじゃ、ばかりなのに」の例も含める。

示した課題の設定条件の必須条件（課題は「ばかり」の上接する語句についての質問、そして、「ばかり」を含む節の述語部分を使用する質問である）と、追加条件（必須条件だけで課題を設定すると課題が設定できない場合、新たな条件が生まれる。つまり、課題の主語として、例文の「ばかり」を含む節の主語を使用する）、また、特殊条件（「ばかり」に「の」が下接する場合、課題の構文は例文の構文をとり、「疑問詞+の+名詞」となる）についても、すべての例文に適用できる。

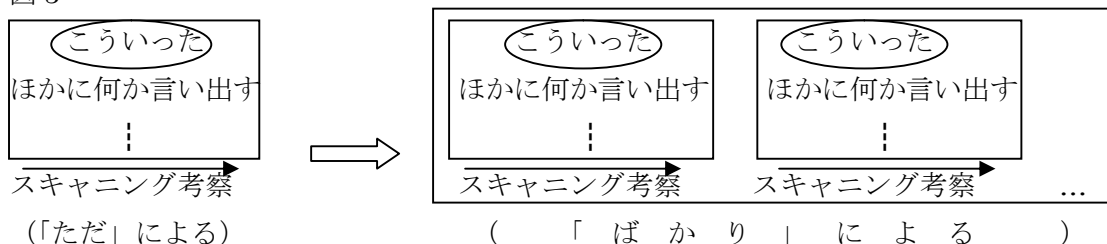
「動詞タ形+ばかり+だ」の用例は14例を除く、すべて時間関係明示用法である。その14例のうち、8例は「ただ」を用いる例文で、1例は「あながち～ない」を用いる例文である。例えば、

(13) 彼女のほうからなにかいいだすだろうと期待していた。ところが、アンナはただこういったばかりであった。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

(14) 自分を本当に自由人とするためには、たった一人で、傷つくことを覚悟しながら、勇気をもって、既成の体制と戦わねばならぬ、という公式をわかってはいるのだが、思っただけで、背筋がすかさずするのは、あながち夜が冷え込んで来たばかりでもあるまい。(曾野綾子『太郎物語』)

例(13)では、「ばかり」の上接する語句は「こういった」である。発話者が表したいのはデキゴト「こういう」のみが完了し、ほかのデキゴトがすべて未完了の状態であるということではなく、何回観察してもデキゴト「こういった」にたどり着くということである。スキヤニング考察の課題は「アンナは何をするか」で変わらないが、スキヤニング考察の過程は例(4~12)と異なってくる。これの原因は、文中に「ただ」という語句があるからである。「ただ」には、ある物や事柄に限定され、ほかの問題にならないことを表す意味がある。よって、「ただ」によって、デキゴト「こういった」に注目させてから、「ばかり」によるスキヤニング考察が行われる。以下のように表示できる。

図3



「ただ」でほかの考えられるデキゴトを排除しているので、「ばかり」によるスキヤニング考察は瞬時に素早く、複数回全く同じスキヤニング考察が行われるわけである。したがって、例(13)では、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。

例(14)では、「ばかり」の上接する語句は「夜が冷え込んで来た」である。「あながち

ち」の後に打ち消しの語「まい」を伴い、必ずしもという意を表す。つまり、前章の例(28~30)の「ばかりで(は)なく」や例(40)の「ばかりではありません」のような例文と同じく、統語的な環境条件(「あながち~まい」という否定表現)がある例文である。前章で分析した通り、「ばかり」の用法は「ばかり」の複数性明示用法である。

「動詞タ形+ばかり+だ」では、「ばかり」が時間関係明示用法を表さない14例のうち9例は例(13)(14)のような用例である。「ばかり」の用法は複数性明示用法である。例(13)には、「ばかり」以外に「ただ」のような限定を表す副詞類を伴っている。「ばかり」によるスキヤニング考察は結果的に図3のような形になるのは、「ただ」という統語的な環境条件があるからである。例(14)も同じく、否定表現「あながち~まい」という統語的な環境条件があるので、「ばかり」に「でなく/ではなく」が下接する場合と同じく、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。また、「ばかり」が時間関係明示用法を表さない14例のうち5例は「動詞タ形+と+ばかり」の形である。用例数は少なすぎるので、ここでは分析せず、2.3節で詳しく記述説明する。

「動詞タ形+ばかり+で」の全189例では、117例が「ばかり」の時間関係明示用法である。4例は「ただ」、1例は「たった」を用いる例文で、複数性明示用法を示す。63例は「ばかり」に「でなく/ではなく」が下接して、前章で分析した通り、「ばかり」の複数性明示用法である。4例は「動詞タ形+と+ばかり」の形である。

「動詞タ形+ばかり+か」の用例は61例で、前章で分析した通り、「ばかり」の複数性明示用法を示す。「動詞タ形+ばかり+に」の用例は27例見られるが、やはり用例数は少ないので、2.3節で詳しく記述説明する。「動詞タ形+ばかり+述語句」の用例は17例見られるが、すべては「動詞タ形+と+ばかり」の形である。2.3節で詳しく記述説明する。

「動詞タ形+ばかり」の用例では、特殊な構文(「ただ」や「たった」を用いる、また「ばかり」に「でなく/ではなく」が下接すると文中に「あながち~ない」がある、さらに、「動詞タ形+と+ばかり」などの稀な構文)でない限り、「ばかり」の用法は時間関係明示用法である。つまり、77.8%の割合で、「ばかり」の用法は時間関係明示用法に偏る。

「ばかり」の上接する語句の動詞は「タ形」を用い、「ばかり」の上接する語句のデキゴトが唯一完了し、ほかの考えられるデキゴトはすべて未完了の状態であることを明示している。したがって、「動詞タ形+ばかり」の用例では、特殊な構文でないかぎり、「ばかり」の用法はすべて時間関係明示用法であるということは、至極自然な結果であるといえよう。

## 2.2 「テ形+ばかり」

「動詞(句)+ばかり」の全2431用例のうち、「テ形+ばかり」の用例は257例見られる。まず、以下の用例を見てみよう。

(15) 留学生活は、私にとってただとまどいの連続であった。私は、ことごとにとまどってばかりいた。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

(16) はっきりした意味はわからないが、年中、こき使われてばかりいる彼は、なんとかして、一度「主人」というものになってみたいと、猛烈に思った。(山本有三『路傍の石』)

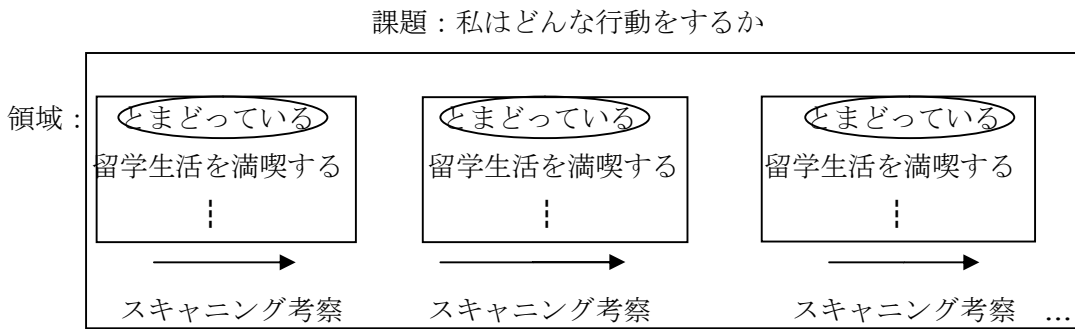
(17) 大声をあげて、からだに手をかけた。返答がない。喉がごろごろ鳴っているばかりである。(中略) 医者が到着したとき、不幸なウェルテルは床上に仆れたままで、もう手のくたしうがなかった。(ゲーテ『若きウェルテルの悩み』)

(18) いささか初歩的なきらいはあるが、こう拾いあげてみると、なかなかおもしろいね。しかしおもしろがってばかりいちゃいけない。(コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』)

例(15)では、「ばかり」の上接する語句は「とまどって」である。例(15)を言うためには、発話者は「私」の行動を知らなければならない。つまり、「私」の行動について観察する。一回観察したら、たどり着いた結果は、「私」はデキゴト「とまどう」を進行していることである。「私」は、考えられるデキゴト「留学生活を満喫する」を進行しておらず、デキゴト「とまどう」を進行している(また、未完了や完了の状態でもない)。また、何回観察をしても、たどり着いた結果はすべて「私」は「とまどって」いた。よって、例(15)では、スキヤニング考察が行われているといえるだろう。つまり、複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた帰結は「ばかり」の上接する語句の「とまどって」である。「とまどっている」は「進行中」の状態、「未完了」や「完了」などの状態ではない。よって、「ばかり」の上接する語句はテ形を用いる。また、例(15)では、「ばかり」の表す用法は複数性明示用法である。

また、前章で提示した課題の設定条件と前節で提示した設定条件が例(15)に適用できるかどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「とまどって」で、実際のデキゴトであるので、課題の疑問詞は「どんな行動」となる。「ばかり」を含む節の述語部分は、「ばかり」を含む節自体であるので、課題は「どんな行動をするか」である。また、追加条件で主語「私」を使用する。よって、課題は「私はどんな行動をするか」である。この課題は発話者が例(15)を発話する際の心理行動と一致している。よって、前章、前節で提示した課題の設定条件は例(15)に適用できるといえるだろう。以下のように図示できる。

図 4



例（16～18）も同じである。例（16）では、「ばかり」の上接する語句は「こき使われて」である。まず、発話者が「彼」がどのような人物なのかを知らないと仮定しよう。例（16）を言うためには、発話者は「彼」について観察する必要がある。一回観察して、たどり着いた結果は「彼は「こき使われて」いる」であった。何回観察をしても、たどり着いた結果はすべて「彼」は「こき使われて」いることである。つまり、複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた帰結は「ばかり」の上接する語句の「こき使われて」である。「ばかり」の用法は、複数性明示用法である。例（16）での「ばかり」のスキヤニング考察は、例（15）と同じく図4のようになる。

また、前章で提示した課題の設定条件と前節で提示した設定条件が例（16）に適用するかどうかについて検証してみよう。「ばかり」の上接する語句は「こき使われて」で動詞の受身を使用している。「ばかり」の上接する語句「こき使われて」は実際のデキゴトを表すというより、「彼」の状態を表しているといったほうがよいだろう。よって、課題の疑問詞は「どのような」である。また、「ばかり」を含む節は「彼」を修飾している。つまり、連体修飾節である。前章で提示した設定条件では、「ばかり」に「の」が下接する場合、課題の構文は例文の構文をとり、「疑問詞＋の＋名詞」になる。つまり、「ばかり」節が連体修飾節を構成する場合、課題の形式も例文の構文環境をとる。よって、例文の構文が「動詞＋ばかり＋「ばかり」節の修飾する名詞」の場合、課題は「疑問詞＋「ばかり」節の修飾する名詞」になる。したがって、例（16）では、課題は「どのような彼であるか」になる。この課題は発話者が例文を発話する前の心理行動に矛盾しない。よって、前章で提示した課題の設定条件（「ばかり」に「の」が下接する場合、課題の構文はばかり節の構文環境をとり、「疑問詞＋の＋名詞」である）は例（16）に適用できるといえるだろう。また、前章で提示した設定条件の特殊条件は、「ばかり」節は連体修飾節の場合、課題の構文はばかり節の構文環境をとるといふふうに修正できるだろう。「名詞＋ばかり＋の＋「ばかり」節の修飾する名詞」の場合（例えば例（9））、課題は「疑問詞＋の＋「ばかり」節の修飾する名詞」（「鮎太がどんな行動の時であるか）になる。「動詞＋ばかり＋「ばかり」節の修飾する名詞」の場合（例えば例（16））、課題は「疑問詞＋「ばかり」節の修飾する名詞」（「どのような彼であるか）になる。

例（17）では、複数回スキヤニング考察をした結果、たどり着いた帰結は「ばかり」

の上接する語句「ごろごろ鳴っている」と考えられる。課題は「ウェルテルの喉はどんな動作をしているか」である。例(18)では、課題は「何をしたいやいけないのか」である。前章と前節で提示した課題設定の必須条件と追加条件、特殊条件は例(17)(18)に適用できる。

「テ形+ばかり」の全 257 例のうち、「テ形+ばかり+でなく」の用例は 20 例見られ、「テ形+ばかり+か」の用例は 11 例見られる。また、「ている+ばかり」は 97 例見られ、すべて「ている+ばかり+だ」「ている+ばかり+で」の構文で使用され、例(16)のような「ている+ばかり+の+名詞」は見られない。一方、「てばかりいる」は 129 例見られる。また、「テ形+ばかり」の全 257 例では、「ばかり」の用法はすべて複数性明示用法である。前章と前節で提示した課題の設定条件の必須条件と追加条件、特殊条件はすべての用例に適用できる。

### 2.3 「ル形+ばかり」

「動詞(句)+ばかり」の全 2431 用例のうち、「ル形+ばかり」の用例は 1311 例見られる。まず、以下の用例を見てみよう。

(19) 噂どおり、光るばかりのお美しい方でした。(田辺聖子『新源氏物語』)

(20) 夏の世界は、いたるところ明るく、すがすがしく、あふれるばかり活気がみなぎっていた。(海外作品¥マーク・トウェイン『トム・ソーヤーの冒険』)

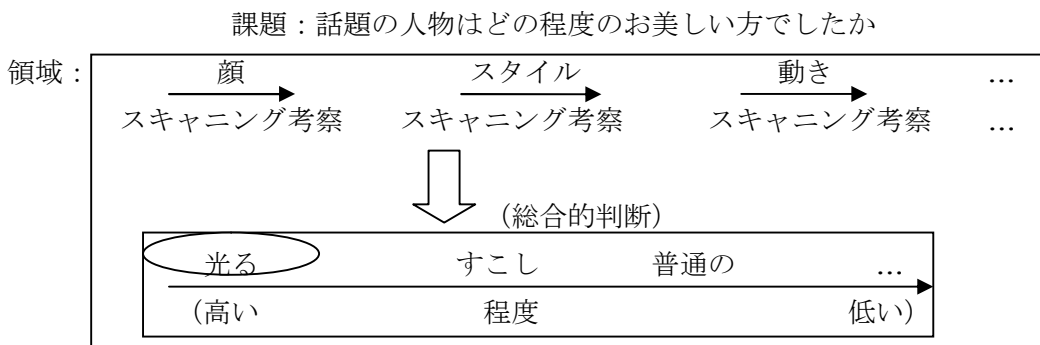
(21) 真昼の熱気を吸いこんだゲッセマネの灰色の地面にうずくまり、眠りこけている弟子たちから一人離れて、「死ぬばかり苦しみ、汗、血の雫の滴った」あの人の顔を司祭は今噛みしめる。(遠藤周作『沈黙』)

(22) 拍手はテントもひるがえるばかりでした。(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)

例(19)では、「ばかり」の上接する語句は「光る」である。「光る」は「お美しい方」を修飾する語句であるが、人間は光ることができないので、「光る」は実際のデキゴトを表すのではなく、美しさの程度を表しているといえるだろう。まず、発話者が話題の人物はどのような人かを知らないと仮定しよう。発話者は例(19)を言うために、話題の人物を観察しなければならない。顔や、スタイル、動きなどを素早く観察し、それから総合的判断をし、「光る」という帰結にたどり着く。例(19)では、複数回のスキヤニング考察を踏まえて話題の人物の様相を描いていることから、ある種のスキヤニング考察が行われているといえるだろう。一回一回のスキヤニング考察の領域は話題の人物の各部分である。つまり、顔やスタイルなどである。スキヤニング考察をしながら、総合的判断をし、最後に人の美しさを表す集合の中から程度として「光る」という動詞を選んでいる。また、人の美しさを表す集合の中に、存在しうるすべての要素は程度を表す語句だと考えられる。よって、集合の中の各要素は程度の高低により位置している。また、「光る」は最も高い程度である。「ばかり」の用法は高程度指示用法である。

また、前章と本章 2.2 節で提示した設定条件が例 (19) に適用できるかどうかについて検討してみよう。課題は「ばかり」の上接する語句についての質問文である。「光る」は実際のデキゴトを表しておらず、被修飾名詞「(人の) 美しさ」の程度を表している。「光る」は動詞ではあっても、デキゴトではなく、動詞で表される「程度」を示している。よって、この「ばかり」の上接する動詞「光る」がル形をとると考えられる。また、考察の領域内の集合が「程度」であることから、課題の疑問詞は「どの程度」である。「ばかり」を含む節の述語部分は例文の述語である。追加条件で、「話題の人物は」という主語を使用する。さらに、本章 2.2 節で提示した特殊な設定条件では、「ばかり」節は連体修飾節の場合、課題の構文は例文の構文をとると指定した。つまり、課題は「疑問詞＋の＋「ばかり」節の修飾する語句」という構文である。よって、課題は「話題の人物はどの程度のお美しい方でしたか」である。この課題は発話者が例文を発話する前の心理状況と一致している。よって、前章と本章 2.2 節で提示した課題の設定条件は例 (19) にも適用できるといえるだろう。例 (19) でのスキヤニング考察は以下のように図示できる。

図 5



例 (20~22) は例 (19) と同じである。例 (20) では、「ばかり」の上接する語句「あふれる」は「活気」を修飾しているので、実際のデキゴトを表しておらず、「活気」の程度を表している。発話者は例 (20) を言うために、夏の世界を知らなければならない。よって、夏の世界について観察する必要がある。空や大地、植物などについてそれぞれ観察し、最後に総合的判断をし、「活気」の程度を表す集合（中の要素は程度の高低により位置している）から最も高い「あふれる」程度を選んでいる。

また、前章と本章 2.2 節で提示した設定条件は例 (20) に適用するかどうかについて検討してみよう。課題は「ばかり」の上接する語句についての質問文である。「あふれる」は実際のデキゴトを表しておらず、「活気」の程度を表している。よって、課題の疑問詞は「どの程度」である。「ばかり」を含む節の述語部分は例文の述語である。追加条件で、「夏の世界は」という主語を使用する。さらに、本章 2.2 節で提示した特殊な設定条件では、「ばかり」節は連体修飾節の場合、課題の構文は例文の構文をとると指定した。つまり、課題は「疑問詞＋の＋「ばかり」節の修飾する語句」という構文である。よって、



課題は「夏の世界はどの程度の活気がみなぎっていたか」である。この課題は発話者が例文を発話する前の心理行動と一致している。よって、前章と本章 2.2 節で提示した課題の設定条件は例 (20) に適用できるといえるだろう。例 (20) でのスキニング考察は例 (19) と同じく、図 5 のようである。

例 (21) では、「ばかり」の上接する語句は「死ぬ」である。「死ぬ」は「苦しみ」を修飾しているが、話題の人物も実際に死んでいるわけではない。よって、「ばかり」の上接する語句「死ぬ」は実際のデキゴトを表しておらず、「苦しみ」の程度を表している。したがって、課題は「どの程度苦しむか」である。例 (22) では、「ばかり」の上接する語句は「ひるがえる」である。実際にテントがひるがえるというデキゴトが起こっていないので、「ひるがえる」は「拍手」の程度を表している。よって、課題は「拍手はどの程度でしたか」である。前章と本章 2.2 節で提示した課題の設定条件は例 (21) (22) に適用できるといえるだろう。

例 (19~22) の共通点は、スキニング考察をしながら、総合的判断をし、程度を表す集合から最も高い程度の語句、つまり、「ばかり」の上接する語句を選んでいることである。先行研究では、「「ばかり」だけは、〈高程度〉しか表わさないようである」(丸山 2001, p.157) や「相当程度の高程度で、「ほど」「くらい」に置き換えられる」(丹羽 1992, p.1134) との記述がある。本研究では、同様の立場から、例 (19~22) のような「ばかり」の用法を「ばかり」の高程度指示用法とする。

また、以下のような「動詞辞書形+ばかり+に」の形式をとる用例を見てみよう。

(23) フン先生は口をアゴが外れるばかりに大きくひらき、その中にラーメンをぶちあげた。(井上ひさし『ブンとフン』)

(24) 君ほどの頭であればきつと医者になれるのに。女であるばかりに惜しいことだ。(渡辺淳一『花埋み』)

(25) 鮎太は一刻も早くこの場を逃れたいばかりに、そう返事をした。(井上靖『あすなろ物語』)

例 (23) は例 (19~22) と同じである。「ばかり」は高程度指示用法を表す。同じ構文で例 (24) と例 (25) がある。例 (24) では、「ばかり」の上接する語句は「女である」である。例文の前半でわかるように、医者になるために、頭がいい、若い、男であるなどの条件が必要であり、「君」は「男である」以外の条件はすべてクリアしている。よって、「女である」つまり、「男である」という条件を満たさないことは発話者にとって非常に程度の高い、都合の悪いことである。また、『日本文法大辞典』(松村明編) では、「ばかりに」の形で、「それだけが原因(理由)で」(事態の悪化を示すような結果の)導かれることが多いと説明している。しかし、この説明ではなぜばかりが原因理由句の解釈となるのかが明確ではない。例 (24) では、発話者にとって都合の悪いことの程度が高すぎるので、「ばかりに」に下接する語句が成り立つという関係がある。言い換えれば、「女

である」ということは発話者にとって都合の悪い程度が高過ぎるので、悪い帰結をもたらす「原因」という意味が発生してしまうといえよう。例(25)では、「ばかり」の上接する語句「一刻も早くこの場を逃れたい」という気持ちは、「鮎太」にとって非常に程度の高い気持ちで、程度が非常に高いからこそ、「そう返事をした」のである。したがって、例(24)(25)のような「原因、理由」を表す例文も「ばかり」の高程度指示用法と見てよいだろう。

また、本章 2.1 節で「タ形+ばかり+に」の用例が 27 例見られると述べた。「タ形+と+ばかり+に」の 6 例を除き、残りの 21 例では「ばかり」はすべて原因を表している。例えば、

(26) 現に、おまえだって、そんな幻想相手の鬼ごっこに疲れはてたばかりに、こんな砂丘あたりにさそい出されて来たのではなかったか。(安部公房『砂の女』)

(27) たとえば病院の食事には、ニューヨークの食物と同じくらい DDT が入っていた。ほんのちょっと文明社会にふれたばかりに、エスキモーは毒のお土産をもらったのだった。(レイチェル・カーソン『沈黙の春』)

例(26)では、「ばかり」の上接する語句は「疲れはてた」である。「疲れはてる」のもとの意味は、疲れが極限の高程度まで達するというものなので、例(26)は「ばかり」の高程度指示用法と見ていいだろう。例(27)では、「ばかり」の上接する語句は「ほんのちょっと文明社会にふれた」である。「ほんのちょっと文明社会にふれた」ことはもともと程度の低いものを表すが、しかし、全く文明社会にふれないことよりは程度が高い。また、このデキゴトの招いた結果から考えれば、全く文明社会にふれないより、ほんのちょっとふれたとしても、最悪な結果を招いてしまったので、発話者にとって、「ほんのちょっと文明社会にふれた」ことは却って非常に程度の高いことになってしまう。よって、例(27)での「ばかり」の用法も、「ばかり」の高程度指示用法と見ていいだろう。

また、中里(1995)では、「ばかり」の接続助詞的用法について「「...たばかり」の形になることが多く... (後略)」(p. 94)と述べているが、「動詞(句)+ばかり」の 2431 例のうち、原因を表す「ばかり」の用例は、「タ形+ばかり+に」が 21 例、「ル形+ばかり+に」が 13 例であって、決して多くない。よって、本研究では、原因を表す「ばかり」の用法を他の用法と区分せず、「ばかり」の高程度指示用法とする。

一方、以下のような用例を見てみよう。以下の例(28~33)は、例(19~25)同様、「ル形+ばかり」構文だが、高程度指示用法ではない。

(28) 「心当たりは?」「さあ」と首をひねるばかり。(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

(29) 同じ姿勢のまま、ただ首を左右にふりつづけるばかりである。(安部公房『砂の女』)

(30) 綱ひきや相撲が効を奏したこともあるが、肉体に訴えるばかりが手段ではない。(開高健『裸の王様』)

(31) こうして、充たされた人生を謳歌するばかりの人々の中で、紫の上は、ある日、微笑みつつ、源氏にいった。(田辺聖子『新源氏物語』)

(32) 士気は高まるばかり、軍規もまったく乱れないのが、若い主人の後に馬で従うトルサンには、眼を見張るばかりの驚きだった。(塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』)

(33) ますます矢須子に対して負目を感じるばかりである。(井伏鱒二『黒い雨』)

例(28)では、「ばかり」が文末の述語位置にあり、上接する語句は「「さあ」と首をひねる」である。まず、発話者が話題の人物が何をするかを知らないと仮定しよう。発話者は例(28)をいうために、話題の人物の行動について観察しなければならない。一回観察したら、たどり着いた結果は「「さあ」と首をひねる」である。もう一回観察したら、たどり着いた結果は「「さあ」と首をひねる」である。何回観察をしても、たどり着いた結果はすべて「「さあ」と首をひねる」である。つまり、複数回スキニング考察をし、たどり着いた結果は「ばかり」の上接する語句の「「さあ」と首をひねる」と考えられる。

また、前章で提示した課題の設定条件と本章 2.2 節で提示した設定条件が例(28)に適用できるかどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「「さあ」と首をひねる」で、実際のデキゴトであるので、課題の疑問詞は「どんな行動」である。「ばかり」を含む節の述語部分は、「ばかり」を含む節自体であるので、課題は「どんな行動をするか」である。また、追加条件で話題の人物を主語として使用する。よって、課題は「話題の人物はどんな行動をするか」である。この課題は発話者が例(28)を発話する際の心理行動と矛盾しない。よって、前章と本章 2.1 節で提示した課題の設定条件は例(15)に適用できるといえるだろう。以下で表示できる。

図 6

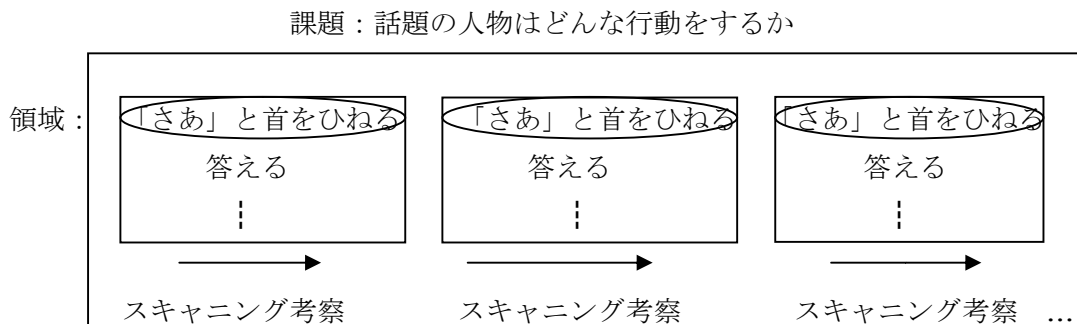


図 6 は図 4 と同じ形をしている。例(28)も例(15~18)と同じように、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。例(29~33)は例(28)と同じである。例(31)では、「ル形+ばかり+の」構文で、「ばかり」は複数性明示用法を表す。「ル形+ばかり+の」構文の 165 例のうち、例(31)のような複数性明示用法を示す例文は 12 例しか見られな

い。例 (32) では、「ばかり」の上接する語句は「高まる」である。スキヤニング考察が複数回行われ、たどり着いた帰結はすべて、「ばかり」の上接する語句「高まる」である。また、「高まる」自体は変化を表している。複数回スキヤニング考察の帰結は「高まる」というのは、一回一回スキヤニング考察をする時、デキゴト「高まる」は行われている。したがって、例 (32) のような例文では、ますます+動詞（ここでは「高まる」）、動詞+続けるという意味も表すことができる。

さらに、以下のような例文を見てみよう。以下の例 (34~37) は、例 (28~33) 同様、「ル形+ばかり」構文だが、複数性明示用法ではない。

(34) 基一郎はそこに歩いて行って署名をし、それで参内はおしまいなのであった。もうあとは帰るばかりなのであった。(北杜夫『楡家の人びと』)

(35) あとは、志乃に懐妊のきざしを待つばかりである。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

(36) 騒ぎだったわね、せっかく自分のために家を建てさせておいて、いざ入るばかりになった時に、蹴っちゃったんですもの。(川端康成『雪国』)

(37) この地獄からのがれるための最後の手段、これが失敗したら、あとはもう首をくくるばかりだ。(太宰治『人間失格』)

例 (34) では、「ばかり」の上接する語句は「帰る」である。まず、発話者が動作主「喜一郎」の行動はどうなっているかを知らないと仮定しよう。発話者が例 (34) を言うために、話題の人物「基一郎」の行動を観察する必要がある。まず、デキゴト「基一郎はそこに歩いていく」にたどり着く。デキゴト「基一郎はそこに歩いていく」は完了の状態である。次に、デキゴト「喜一郎は署名する」にたどり着く。デキゴト「喜一郎は署名する」も完了の状態である。...最後に、デキゴト「帰る」にたどり着く。デキゴト「帰る」は未完了の状態である。

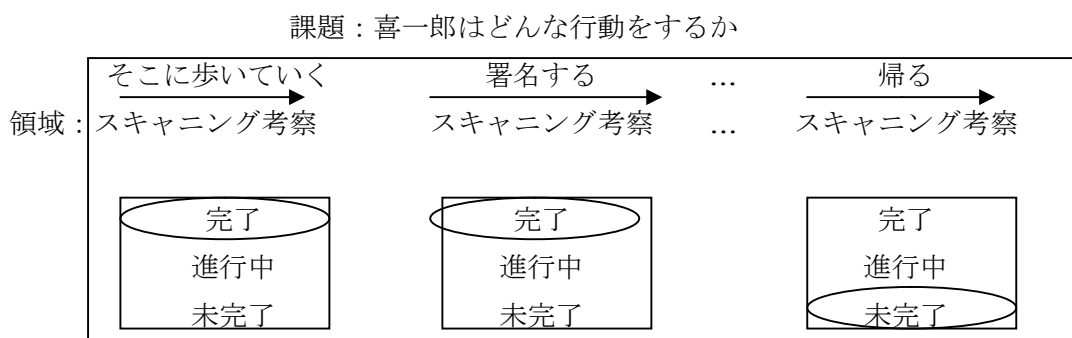
つまり、発話者はまず、話題の人物「基一郎」がどんな行動を起こすかという疑問を持ち、「喜一郎」の行動を観察する。自然に、「喜一郎」の起こすデキゴトにたどり着く。また、考えられる「喜一郎」がすでに起こしたデキゴトと、「ばかり」の上接する語句のデキゴトは実際に起こるデキゴトなので、すべてのデキゴトが時間軸に起こる順番で並んでいる。

また、各デキゴトを見る時、デキゴトの進行状態の集合（中に「完了、進行中、未完了」などの要素がある）から、「完了」（「ばかり」の上接する語句以外のデキゴト）と「未完了」（「ばかり」の上接する語句のデキゴト）を選んでいる。したがって、例 (34) では、複数回のスキヤニング考察が行われていると言えるだろう。複数回のスキヤニング考察をし、たどり着いた帰結はデキゴト「帰る」のみが未完了の状態で、ほかの考えられるデキゴトはすべて完了の状態だということである。

さらに、前章と本章 2.2 節で提示した課題の設定条件が例 (34) に適用できるかどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「帰る」である。したがって、

疑問詞は「どんな行動」となる。「ばかり」を含む節の述語部分は例文の述語なので、課題は「どんな行動であるか」である。また、この課題では、動作主がわからないので、追加条件で動作主の「喜一郎」を主語として設定する。よって、前章と本章 2.2 節で提示した課題の設定条件は例 (34) に適用できるといえるだろう。例 (34) でのスキヤニング考察は以下のように図示できる。

図 7



「ばかり」による全体のスキヤニング考察の領域は、各デキゴトを領域とするスキヤニング考察の集合である。一回一回のスキヤニング考察の結果は、デキゴトが完了／未完了の状態だということである。全体のスキヤニング考察の結果は、デキゴト「帰る」のみが未完了の状態、ほかの考えられるデキゴトはすべて完了の状態だということである。また、図 7 は図 1 と似た形をしている。例 (34) の「ばかり」は、例 (4) と同じように、時間関係明示用法といえるだろう。例 (34) が例 (4) と異なるところは、例 (34) では、「ばかり」の上接する語句「帰る」が時間軸の最後に位置して唯一「未完了」である一方、例 (4) では、「ばかり」の上接する語句が時間軸の最初に位置して唯一「完了」であるということである。

例 (35～37) は例 (34) と同様である。複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた帰結は「ばかり」の上接する語句のデキゴトのみが未完了の状態、ほかの考えられるデキゴトはすべて完了の状態だという関係が成り立っている。

また、例 (34～37) のような用例は、確かに例 (4～8) のような用例とは、スキヤニング考察のたどり着いた結果は「未完了」か「完了」かにおいて異なる。しかし、複数回のスキヤニング考察の帰結は、「ばかり」の上接する語句のデキゴトとほかの考えられるデキゴトは時間的前後関係であるということでは一致している。したがって、例 (34～37) は例 (4～8) と同じように、「ばかり」の用法は時間関係明示用法とする。

さらに、例 (34～37) での「ばかり」の用法を、例 (28～33) のような「ばかり」の複数性明示用法としないのは、例文に時間的前後関係を示す語句があるからである。例 (34) では「もうあとは」、例 (35) では「あとは」、例 (36) では「いざ」、例 (37) では「あとは」がある。

一方、以下のような例文が見られる。

(38) 後はただ、小川所長の手にする斧が閃くのを待つばかりであった。(吉村昭『戦艦武蔵』)

文中に「後は」と「ただ」の両方がある。ここまでの観察からは、「ばかり」は複数性明示用法を表すという説明も、または時間関係明示用法を表すという説明もともに可能である。必ずどちらかの用法だという決定はできない。それは、両用法の関係性の表れでもある。したがって、例(38)のような、どの用法なのか判断に迷う例も見られる。このような用法間の関係性については、第五章で論じたい。

また、以下のような、「んばかり」「ないばかり」の形式をとり、従来、歴史的用法の残存とされてきた用例も見られる。

(39) 乳母車はからっぽになり、鉢にはあふれんばかりにピカンがたまっています。(カポーティ『ティファニーで朝食を』)

(40) それは、近づいてきたときには鼓膜を破かんばかりの叫び声だが——この大都会でいま眠っている幾百万の市民たちが起きてそれを聞くときには、さまざまの意味を伝えてくれる、ききなれた叫び声であった。(オー・ヘンリ『O・ヘンリ短編集』)

(41) 源氏はそういいながら、玉鬘に触れんばかり近づいてゆく。(田辺聖子『新源氏物語』)

(42) 私の凡てを聞いた奥さんは、果して自分の直覚が的中したと云わないばかりの顔をし出しました。(夏目漱石『こころ』)

(43) いよいよ艶な女ざかりの風趣が、こぼれんばかりだった。(田辺聖子『新源氏物語』)

本稿では、例(39~42)は、例(34~37)と同様のスキヤニング考察が行われていると考える。複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた結果は、「ばかり」の上接する語句のデキゴトのみが未完了の状態、ほかの考えられるデキゴトはすべて完了の状態だということで、時間関係明示用法といえる。しかし、例(39~42)のような用法は、例(34~37)より、今にもしそうになるという意味が強く出ている。それは「ん」に理由があると考えられる。「ん」の用法は、数多くの先行研究では古代語の推量の「む」の「仮定婉曲」用法だとされる。例えば、例(34)では、「あふれん」は「あふれようとする」という意である。したがって、今にもしそうになるという意味が強く表れる。

一方、例(43)は、例(39~42)と同じ構文であるが、「ばかり」の意味は異なると考える。例(43)では、「こぼれる」のは「風趣」である。風趣は実際にこぼれることはありえないので、ばかりの上接する語句「こぼれん」は実際のデキゴトを表しておらず、「風趣」の程度を表している。したがって、例(43)での「ばかり」の用法は高程度指示用法である。しかし、例(43)は例(39~42)と同じく、風趣が今にもこぼれそうになることを表している。したがって、同じく、今にもしそうになるという意味を表すとされてきた例は、例(39~42)のように時間関係明示用法と考えられるものと、例(43)の

ように、高程度指示用法と位置づけられるものがあることがわかった。これは、「ばかり」の諸用法間の連続性を示唆するものだと考えられる。「ばかり」の上接する語句が同じく動詞であっても、時間的展開に関与する動作、すなわちデキゴトの要素として集合をなすのか、程度の一様相を示す述語として集合をなすのかによって、時間関係明示用法か、高程度指示用法かに分化すると考えられる。詳細は、第五章で論じる。

ほかに、以下のような例も従来、程度を表す慣用的な用法と見られてきたものである。

(44) 例の鋭い眼力でひとわり彼女を観察してから、さあお話しなさいとばかり椅子のなかで眼を細め、両手の指先をつき合せて待ちかまえた。(コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』)

例(44)では、例(39~42)と同じく、デキゴト(ここでは「さあお話しなさい」と言う)が今にも実現しようとしている状態を表す。よって、「ばかり」の用法は時間関係明示用法として解釈できる。一方、主節の述語「(話題の人物が)待ち構えた」の様子(程度)を、「さあお話しなさい」と(言う)くらいだ、と表現しているように思われる。つまり、例(19)の「光るばかりのお美しい方」で、動詞「光る」が動詞であるにもかかわらず程度を表しているように、「さあお話しなさい」「待っていた」(例(45))のようなセリフが一番ぴったりあてはまるような「程度」だと考えられる。つまり、「ばかり」の用法は高程度指示用法として解釈できる。本研究では、時間関係明示用法と高程度指示用法の二種類の用法として解釈できる点から、例(44~46)のような「ばかり」の用法を「ばかり」の派生的用法とする。

また、「さあお話しなさい」「待っていた」は人物の言うセリフなので、「と」が必要だと考えられる。この「とばかり」の形式は、「タ形+ばかり」の例文にも19例見られる。例えば、以下のような例文である。

(45) ようやく接近に成功すれば、待っていたとばかりに、高いジェノヴァ船の見張台から石が投げられ、ひるむトルコ兵を、船べりに並んだ石弓の放つ矢が、適確に倒していった。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)

(46) さて、佐山はその電話を聞いて、待っていたとばかりに出て行った。(松本清張『点と線』)

「ル形+ばかり」の全1311例のうち、「ばかり」が複数性明示用法を表す用例は711例見られる。また、「ル形+ばかり+だ」構文の用例に集中する。したがって、「ばかり」が複数性明示用法を表す時、「ばかり」節は述語になる傾向が高いことがわかった。時間関係明示用法は240例見られる。特に偏りが見られない。高程度指示用法を表す用例は360例見られる。「ル形+ばかり+の」構文の用例は115例見られ、「ル形+ばかり+の」構文の全165用例の69.7%を占める。「ル形+ばかり+述語句」の構文の用例は76例見

られ、「ル形+ばかり+述語句」構文の全 103 例の 73.8%を占める。したがって、「ばかり」が高程度指示用法を表す時、「ばかり」節は連体修飾節になる傾向が高いことがわかった。また、前章と本章 2.2 節で提示した課題の設定条件はすべての用例に適用できる。

### 3. まとめ

「動詞（句）+ばかり」の場合、「ばかり」の上接する動詞の形の違いによって、三つのパターンに分けられる。また、「ばかり」の用法には、複数性明示用法と時間関係明示用法、高程度指示用法が見られる。それぞれのパターンについて、用法ごとの用例数を表 1 に示した。

表 1 「動詞（句）+ばかり」の用例の分布 単位：例

		複数性明示	高程度指示	時間関係明示	合計
タ形	ばかりだ	9	5	207	221
	ばかりで	68	4	117	189
	ばかりの	0	0	347	347
	ばかりに	0	27	0	27
	ばかりか	61	0	0	61
	ばかり+述語	13	4	0	17
	合計	151	40	671	862
テ形	ているばかり	97	0	0	97
	てばかりいる	129	0	0	129
	ばかりで(は)なく	20	0	0	20
	ばかりか	11	0	0	11
	合計	257	0	0	257
ル形	ばかりだ	383	26	82	491
	ばかりで	207	8	37	252
	ばかりの	12	115	38	165
	ばかりに	3	136	77	216
	ばかりか	78	0	0	78
	ばかり+述語	21	76	6	103
	ばかりが	7	0	0	7
	合計	711	360	240	1311
合計	1119	401	911	2431	

「動詞タ形+ばかり」の用例では、特殊な構文（「ただ」や「たった」などの限定の副詞を用いる、また「ばかり」に「でなく／ではなく」が下接する、文中に「あながち～」



ない」がある、さらに「動詞タ形＋と＋ばかり」の構文) でない限り、「ばかり」の用法は時間関係明示用法である。また、77.8%の割合で、「ばかり」の用法は時間関係明示用法に偏る。「テ形＋ばかり」の用例では、すべての用例での「ばかり」の用法は複数性明示用法である。「ル形＋ばかり」の用例では、「ばかり」が複数性明示用法を表す時、「ばかり」節は述語と連用修飾節（「ばかりで」）になる傾向が高い。「ばかり」が高程度指示用法を表す時、「ばかり」節は連体修飾節になる傾向が高い。

このような用法の偏りは、「ばかり」の上接する語句の形態が大きく影響していると思われる。「タ形＋ばかり」では、「ばかり」の上接する語句の動詞はタ形である。動詞のタ形は動作の完了を表すので、おのずと、デキゴトの進行状態の「完了」「未完了」などが注目され、「ばかり」の用法は、以上で述べたような特殊な構文でない限り、時間関係明示用法になる。

一方、「テ形＋ばかり」では、「ばかり」の上接する語句の動詞はテ形で、例文の構文は「てばかりいる」「ているばかり」の構文に集中している。「ている」は動きの最中、つまり、動作が進行中である状態を表す。しかし、「ばかり」の上接する語句は進行中の状態だが、考えられるほかのデキゴトはどのような進行状態なのかはわからず、何回スキニング考察が行われても、帰結は「ばかり」の上接する語句のデキゴトが進行中（ほかのデキゴトが起こっていない）という状態で、複数回スキニング考察の結果の一致が強調される。よって、「テ形＋ばかり」では、「ばかり」の用法は、「増えるばかり」「上がるばかり」のような複数性明示用法になりやすいといえるだろう。

また、前章でも述べたように、「ばかり」節の文中での位置も、「ばかり」の用法の偏りに大きく影響していると思われる。「動詞（句）＋ばかり＋の」の場合、「ばかり」節が名詞を修飾するので、被修飾名詞の性質や状態、属性を説明する節となる。よって、「ばかり」の上接する語句の動詞は、実際のデキゴトではなく、モノの属性／状態である程度を表すようになりやすいのは理解しやすいだろう。

さらに、前章で提示した課題の設定条件を修正した。必須条件は、課題は「ばかり」の上接する語句についての質問文で、課題の述語は「ばかり」を含む節の述語部分によって設定されるということである。また、「ばかり」の上接する語句の文中での意味、すなわちスキニング考察の領域内の集合が、何を要素とするかによって、疑問詞は異なってくる。例えば、「ばかり」の上接する動詞が実際のデキゴトを表す時、課題はデキゴトについての質問である。「ばかり」の上接する動詞が事物の程度を表す時、課題は程度についての質問である。追加条件は、二つ考えられる。一つは、必須条件だけでは課題を設定できない場合や、状況が漠然としすぎる場合、要請される。つまり、課題の主語は、例文の「ばかり」を含む節の主語によって設定することである。もう一つの追加条件は、時間関係明示用法では、参照時が必須となる。必須条件だけでは課題を設定できないため、課題に、文中の時間句などを参照時とし連用修飾節の形で課題に組み入れることである。また、特殊条件は、「ばかり」節は連体修飾節の場合の設定条件で、課題の構文が「ばかり」節と同じ形式をとるというものである。つまり、「動詞（句）＋ばかり

十の十「ばかり」節の修飾する名詞」（例えば「鮎太が十行程記事を書いたばかりの時だった」）の構文の場合、課題は「疑問詞十の十「ばかり」節の修飾する名詞」（例えば「鮎太がどんな行動の時であるか」）の構文である。「動詞（句）＋ばかり＋「ばかり」節の修飾する名詞」（例えば「こき使われてばかりいる彼は」）の場合、課題は「疑問詞＋「ばかり」節の修飾する名詞」（例えば「どのような彼であるか」）の構文である。このように考えると、すべての「動詞（句）＋ばかり」の場合について、課題の設定条件が矛盾なく説明できる。

## 第四章 「形容詞／形容動詞／副詞など＋ばかり」における「ばかり」の諸用法について

### 1. はじめに

形容詞、形容動詞はともに事物の性質・状態、人の感情等を表すものである。副詞は、述語の修飾語として働くのを原則とする語である。「ばかり」の上接する副詞はほとんど程度の副詞である。

「ばかり」が形容詞に下接する場合、以下の用法が見られる。

(1) このことばの遊びはやがて、井上ひさしが最も大きなエネルギーを注ぐ戯曲『表裏源内蛙合戦』『道元の冒険』『天保十二年のシェイクスピア』などで、一種すさまじいばかりの巨大化をとげることになる。(井上ひさし『ブンとフン』)

(2) あれの境遇は、あれにとって苦しいばかりでなく、だれにとっても、なんの役にも立たないんだからね。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

例(1)と例(2)では、「ばかり」の意味用法は明らかに全く異なる。また「ばかり」が形容動詞に下接する場合、以下の用例が見られる。

(3) というのは、そうした事情のもとで、いまさら驚いたり怒ったりしてみせるのは不自然なばかりでなく、たくらみある男ならばそうするのが最良の策だからね。(コナン・ドイル『シャーロック・ホームズの冒険』)

(4) 何のことやらわからぬといった顔をしているので、里子は慈海の言葉をひきとって説明した。と、木田黙堂の顔がわずかばかり暗くなって行った。(水上勉『雁の寺・越前竹人形』)

例(3)と例(4)でも、「ばかり」の意味用法は明らかに全く異なる。

本章では、形容詞／形容動詞／副詞などに下接する「ばかり」の用法分化の条件や用例の分布の特徴などを明らかにしたい。また、前章と同じく、スキヤニング考察という観点で、形容詞／形容動詞／副詞などに下接する「ばかり」のすべての用例を分析する。スキヤニング考察という認知的な観察行動が、すべての、形容詞／形容動詞／副詞などに下接する「ばかり」の例文に適用できるかどうかを確かめる。さらに、スキヤニング考察の課題の設定条件は前章で提示したもの以外にどのようなものがあるかを探りたい。

### 2. 考察

#### 2.1 「形容詞＋ばかり」

「形容詞＋ばかり」の用例は110例見られる。そのうち、原因理由を表すとされる「ばかりに」と、物事がただそれだけに限らず、他にまで及ぶ意を表す「ばかりか」のよう

な表現を含め、名詞＋接尾辞の「っぽい＋ばかり」など特殊な形式の用例も見られる。用例数を表で示すと以下のようである。

表 1

「ばかり」の下接語句	の	述語	だ	で（ではなく）	に	か	が
用例数	28	10	10	25 (11)	14	10	5

また、「形容詞＋と＋ばかり」「形容詞＋から＋ばかり」の用例はそれぞれ 8 例と 2 例見られる。

まず、以下の用例を見てみよう。

(5) 灯明りの影で筋肉の一つ一つが隈どりされ、胸の谷を体毛がうずめて、すさまじいばかりの巨漢である。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

(6) 帯にさした半月刀は、眼もまばゆいばかりの黄金でつくられていた。(塩野七生『コンスタンティノープルの陥落』)

(7) 私たちのまわりでいとなまれている不思議な、ときにはおそろしいばかりの力に溢れた自然を見る人はいない。(レイチェル・カーソン『沈黙の春』)

(8) 小さい本ながら、まことに盛りだくさんである。しかもこの本は、月が絵かきに物語の話という形を取ってはいるものの、その特徴とするところは絵画の素材を与えるための、眼まぐるしいばかりの場面の展開にあるのではない。(アンデルセン『絵のない絵本』)

(9) そして眼には、痛々しいばかりの苦痛の色と、おかしいほどの驚きの表情が溢れていた。(モーム『月と六ペンス』)

(10) 彼女の体はまばゆいばかり美しかった。(三島由紀夫『金閣寺』)

(11) 心にくいばかり澄んで冴えた、気品たかい爪音である。(田辺聖子『新源氏物語』)

(12) もちろん、あれも美しいわ——そうだわ、まばゆいばかりに美しいわ——自分が美しいってことを知ってるようね——でも、何もかもことを言ってるんです。(モンゴメリ『赤毛のアン』)

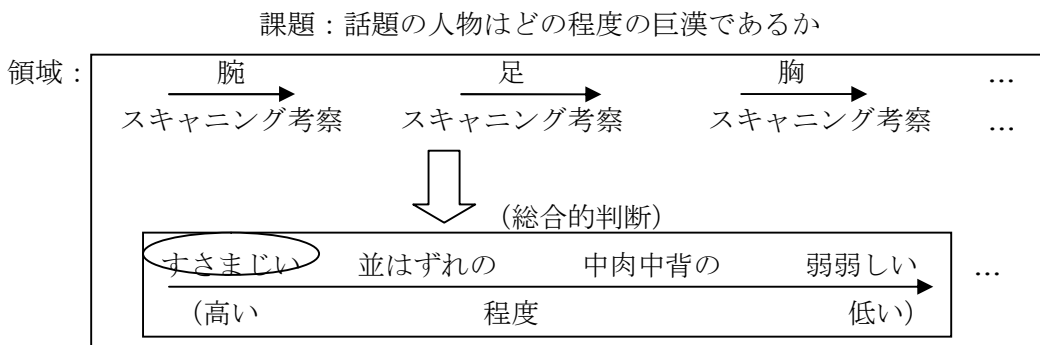
(13) ふじ子だって、小さい時から、足が悪いばかりに小さな子からもいじめられたり、今だって、さげすむような目で見ていく奴も多いからなあ。(三浦綾子『塩狩峠』)

例 (5) では、「ばかり」の上接する語句は「すさまじい」である。また、「すさまじいばかり」は「巨漢」を修飾している。まず、発話者が話題の人物がどのような外見の人なのかを知らないと仮定しよう。発話者が例 (5) を言うために、当該の人物について観察しなければならない。人間は、畳半畳の部屋のように狭く、見通しがきくものではないので、一目ですべての外見の特徴が一举に把握されることはない。よって、発話者は話題の人物を、いくつかの部分に分けて、観察する。つまり、腕や胸、背中、足など、

それぞれ観察する。腕または足を観察し、「灯明りの影で筋肉の一つ一つが隈どりされ」ることがわかった。胸を観察し、「胸の谷を体毛がうずめ」ていることがわかった。それで、この様子を描写するために、総合的に判断をし、程度を表す語句の集合から「すさまじい」を選び、問題の人物の巨漢ぶりを表している。また、程度を表す語句の集合を構成する各要素は当然、程度の高低により位置づけられている。「すさまじい」は集合の中の最も高い程度を表す語句である。例(5)では、スキヤニング考察が行われていると考えて矛盾はない。

また、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が例(5)に適用できかどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「すさまじい」である。前章までの記述でわかるように、スキヤニング考察の課題においては、「ばかり」の上接する語句の、文中での意味によって、疑問詞が異なってくる。「すさまじい」は文中で、「巨漢」の程度を表しているので、疑問詞は「どの程度」である。「ばかり」を含む節の述語部分は例文の述語である。追加条件で、課題の主語を、「話題の人物」とする。また、前章で提示した特殊条件では、「ばかり」節が連体修飾節の場合、課題の構文も当該の「ばかり」句と同じ形式の構文をとるとした。例文の構文は「すさまじいばかりの巨漢」なので、課題の構文は「どの程度の巨漢であるか」になる。よって、課題は「主人公はどの程度の巨漢であるか」である。この課題は発話者が例(5)を発話する前の心理行動と一致している。よって、第二章と第三章で提示した課題の設定条件は例(5)に適用できるといえるだろう。したがって、例(5)の「ばかり」の用法は、高程度指示用法である。例(5)でのスキヤニング考察は以下のように図示できる。

図1



例(6~13)は例(5)と同じである。例(6)では、「ばかり」の上接する語句は「眼もまばゆい」である。まず、発話者は「半月刀」がどのようなものでできているかを知らないと仮定しよう。発話者が例(6)を言うために、半月刀について観察しなければならない。つまり、半月刀の色、輝き、材料などを一瞬で、それぞれ観察する。それで、半月刀の材料である「黄金」の様子を描写するために、総合的に判断をし、程度を表す語句の集合から「眼もまばゆい」を選び、「黄金」の様子を表現している。また、程度を表す語句の集合に、考えられる各要素は当然、程度の高低により位置づけられている。「眼

もまばゆい」は集合の中で最も高い程度を表す語句である。したがって、例(6)では、例(5)と同じように、スキヤニング考察が行われているといえるだろう。

また、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が例(6)に適用できるかどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「眼もまばゆい」である。前章の記述でわかるように、「ばかり」の上接する語句の文中での意味によって、疑問詞が異なってくる。「眼もまばゆい」は文中で、「黄金」の程度を表しているので、疑問詞は「どの程度」である。「ばかり」を含む節の述語部分は例文の主節の述語である。追加条件で、課題の主語を、「半月刀」とする。また、前章で提示した特殊条件では、「ばかり」節は連体修飾節の場合、課題の構文は例文の構文と同じであるとした。例文の構文は「眼もまばゆいばかりの黄金」なので、課題の疑問の要点は「どの程度の黄金」になる。よって、課題は「半月刀はどの程度の黄金でつくられていたか」である。この課題は発話者が例文を発話する前の心理行動と一致している。よって、第二章と第三章で提示した課題の設定条件は例(6)にも適用できるといえるだろう。

例(7)では、「ばかり」の上接する語句は「おそろしい」である。「おそろしい」は文中では、恐怖を感じるという意味を表しておらず、程度が並はずれていることを表している。課題は「自然はどの程度の力に溢れるのか」である。この課題は発話者が例(7)を発話する前の心理行動と一致している。例(8~12)も同様に分析できる。また、例(13)の「ばかりに」は原因理由を表すとされるが、前章で分析した通り、例(6~12)と同様、「ばかり」の高程度指示用法と考えられる。したがって、例(6~13)での「ばかり」の用法はすべて、「ばかり」の高程度指示用法である。

また、以下のような用例を見てみよう。以下の例(14~22)は、例(6~13)同様、「形容詞+ばかり」構文だが、高程度指示用法ではない。

(14) 大売出しの景気付けの音楽が聞えていた。やかましいばかりで何の面白味もない音楽だった。(石川達三『青春の蹉跎』)

(15) それに、イギリスが金を出さなければ、オーストリアも、ロシアも、プロシアも、威勢がいいばかりで金のない国々ですから、フランスに対して、せいぜい一度か二度の戦争をしかけるのが関の山です。(スタンダール『赤と黒』)

(16) 康子だって気位が高いばかりで、女としての能力、女としての価値という点から言うと、案外くだらない女ではないかと思った。(石川達三『青春の蹉跎』)

(17) 井上に目の前でこうして明らさまにすばすばやられると、太郎自身、煙草など煙いばかりだと、実感をもって思うのである。(曾野綾子『太郎物語』)

(18) いくら女だって、堅いばかりが能じゃないわ。(志賀直哉『小僧の神様・城の崎にて』)

(19) そして、しばらく会わなかった間に、若いとばかり思っていたこのイタリアの若者が、五歳は年とって見えるのが、衰れに思えたのかそれとも喜んだのか、少しの間、ウベルティーンをじっと眺めていた。(塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』)

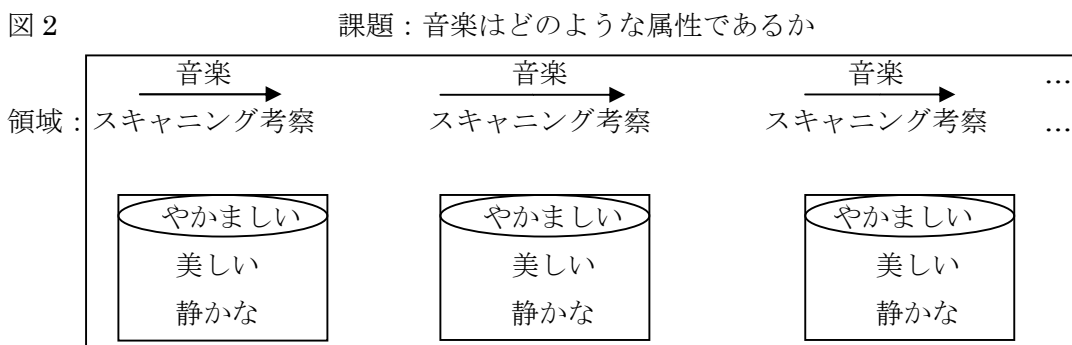
(20) 調子が変わなばかりじゃない、議論がみんな都合のいいように**ばかり**仕組んであるよ。(宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)

(21) 子供たちは、華やかに着飾った姿がとても美しかった**ばかり**でなく、しとやかな行儀作法が愛らしかった。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

(22) ネヴェドフスキーは、そんな呼びかけには少しも興味がない**ばかり**か、むしろそんなものを軽蔑《けいべつ》しているような態度をとっていた。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

例(14)では、「ばかり」の上接する語句は「やかましい」である。まず、発話者が聞こえていた音楽についてどのような音楽かを知らないと仮定しよう。例(14)を言うためには、発話者は聞こえてくる音楽について観察しなければいけない。一回観察したら、その音楽は、考えられるほかの音楽の属性「美しい」「静かな」などではなく、「やかましい」ものだった。もう一回観察しても、その音楽は「やかましい」ものだった。何回観察をしても、音楽は「やかましい」ものだった。その帰結が「やかましいばかり」となった。このような過程が想定できるので、例(14)では、スキヤニング考察が行われているといえるだろう。つまり、複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた帰結が、「ばかり」の上接する語句の「やかましい」である。

また、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が例(14)に適用できるかどうかについて検討してみよう。前章までの記述でわかるように、「ばかり」の上接する語句の文中での意味によって、課題の要点をなす疑問詞が異なってくる。「やかましい」は文中で、当該の「音楽」の属性を表しているのだから、疑問詞は「どのような属性」である。「ばかり」を含む節の述語部分は「音楽だった」である。また、前章で提示した特殊条件では、「ばかり」節は連体修飾節の場合、課題の構文は例文の構文と同じであるとした。例文では、「やかましいばかり」は「音楽」の連体修飾節である。よって、課題は「どのような属性の音楽だったか」という形で同じく連体修飾構造をとる。この課題は発話者が例(14)を発話する前の心理行動と一致している。よって、第二章と第三章で提示した課題の設定条件は例(14)に適用できるといえるだろう。したがって、例(14)の「ばかり」の用法は、複数性明示用法である。例(14)でのスキヤニング考察は以下のように図示できる。



例（15～22）についても例（14）と同様に分析把握できる。例（15）では、「ばかり」の上接する語句は「威勢がいい」である。まず、発話者が話題の国々についてどのような国なのかを知らないと仮定しよう。例（15）を言うためには、発話者はその国々について観察しなければいけない。まず「オーストリア」について観察したら、その国は「威勢がいい」国だった。次に「ロシア」について観察したら、その国は「威勢がいい」国だった。何回もそれぞれの国について観察した結果、話題の国々はすべて「威勢がいい」国だった。したがって、例（15）では、スキニング考察が行われているといえるだろう。つまり、複数回スキニング考察をし、たどり着いた帰結は「ばかり」の上接する語句の「威勢がいい」と考えられる。

また、第二章と第三章で提示した課題の設定条件で課題を設定すると、例（15）での課題は「どのような国々か」である。この課題は、発話者が例（15）を発話する前の心理行動と一致している。よって、第二章と第三章で提示した課題の設定条件は例（15）に適用できるといえるだろう。例（15）では例（14）と同じく、「ばかり」用法は複数性明示用法である。

例（19）では、「形容詞＋と＋ばかり」という構文を使用している。ばかりの上接語句「若い」は「思う」の内容である。「若い」は人間の属性であるが、ここでは発話者の思考の内容なので、疑問詞は「どのように」になる。課題は「発話者がどのように思っていた青年なのか」である。第二章と第三章で提示した課題の設定条件は例（19）に適用できるといえるだろう。

例（21）（22）では、「ばかり」に「でなく」と「か」が下接している。第二章で記述したように、このような例文では、上接語句が形容詞の場合にも、「ばかり」の用法は複数性明示用法となることがわかる。また、例（17～22）では、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が適用できる。したがって、例（14～22）では、「ばかり」の用法はすべて、「ばかり」の複数性明示用法である。

しかし、「形容詞＋ばかり」のすべての例文では、以上のように、「ばかり」の用法が、高程度指示用法か複数性明示用法か、そのどちらであるとはっきりわかるわけではない。例えば、以下のような用例である。

（23）源氏の心あたりの邸は住む人もないままに留守居役だけが守っている。門の内は、ゆくほどに木立が深く物古りて、気味わるいばかりである。（田辺聖子『新源氏物語』）

（24）それにしても信長の応接ぶりはすさまじいばかりで、二十日の（このときはすでに光秀は安土にいない）高雲寺殿での宴会のときは、信長みずから家康のための御膳をはこんできたほどであった。（司馬遼太郎『国盗り物語』）

（25）女武者・佐々木三冬が、根岸の我が家を出たころは、梅雨明けの青空が眩しいばかりであったが、坂本・車坂を経て浅草への大通りを下谷広徳寺門前をすぎようとしたとき、突如、雨が叩いてきた。（池波正太郎『剣客商売』）

（26）女人たちのかき鳴らす琴の音はいずれもすぐれて堪能であるが、中でも明石の上



の琵琶の音色は澄み切って神々しいばかりである。(田辺聖子『新源氏物語』)

(27) 思い出の中の彼は、ただ恐ろしいばかりの人であった。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

前章までで述べたように、課題の設定は、「ばかり」の上接する語句の文中での意味に大きく影響される。例えば、「動詞+ばかり」の場合、動詞が実際のデキゴトを表す時、課題はデキゴトについての質問文となる。一方、動詞が修飾する名詞の属性を表す場合、課題は属性についての質問文となる。例(23)では、「ばかり」の上接する語句は「気味わるい」である。「気味わるい」は属性的意味を示す形容詞であるが、場合によって情意的意味を示す形容詞としても用いることができる。「気味わるい」が情意的意味を示していると解釈すれば、課題の疑問詞は「どの程度」になり、スキミング考察をする時、「気味わるい」を選び出す集合の中で、考えられるほかの要素は例えば「さほど悪くない」「普通」などで、すべての要素は集合の中で程度の高低によって位置づけられる。また、「気味わるい」は最も高い程度と考えられる。したがって、「ばかり」の用法は高程度指示用法として解釈できる。一方、「気味わるい」が属性的意味を示していると解釈すれば、課題の疑問詞は「どのような(属性)」になり、スキミング考察をする時、「気味わるい」を選び出す集合の中で、考えられるほかの要素は例えば「涼しい」「侘しい」などで、各要素は均質に対立的に集合を成している。複数回のスキミング考察での結果の一致から、「ばかり」の用法は複数性明示用法として解釈できる。例(24~26)も同様に2通りの解釈が成り立つ。

例(27)では、「ばかり」の上接する語句は「恐ろしい」である。また、文中に「ただ」という語句がある。「ただ」には、数量・程度などのわずかなこと、わずか、たったという意味があり、すなわち、低い程度を表している。一方、「恐ろしい」には情意的意味はあるが、「こわい」という意味、つまり属性的意味もある。したがって、より「恐ろしい」の働きを重視すれば、「恐ろしい」は情意的意味を表し、課題の疑問詞は「どの程度」になる。「恐ろしい」を選び出す集合の中で、考えられるほかの要素は例えば「普通の」などで、すべての要素は集合の中で程度の高低によって位置づけられる。また、そのうち「恐ろしい」は最も高い程度である。したがって、「ばかり」の用法は高程度指示用法として解釈できる。一方、より「ただ」の働きを重視すれば、「恐ろしい」は属性的意味を示し、「恐ろしい」を選び出す集合の中で、考えられるほかの要素は例えば「無口」「陰気」などで、各要素は均質に対立的に集合を成している。複数回スキミング考察での結果の一致から、「ばかり」の用法は複数性明示用法として解釈できる。

以上のように、例(23~27)では、「ばかり」の用法は、複数性明示用法と高程度指示用法の両方として解釈できると思われる。このような例文はごくわずだが、「名詞(句)+ばかり」「動詞(句)+ばかり」の用例より、「形容詞+ばかり」の用例に多く見られる。これは、「ばかり」の上接する語句の形容詞に、属性的意味と情意的意味の両方に解釈できる形容詞が多いからだと思われる。また、このような用例は、「ばかり」の各用法の連続性を表しているといえよう。

また、「形容詞+ばかり」の用例には、「ばかり」の用法の偏りが見られる。「形容詞+ばかり+の」の場合、73.6%の割合で、「ばかり」の用法は高程度指示用法に偏る。「形容詞+ばかり+だ」の場合、68.3%の割合で、「ばかり」の用法は複数性明示用法に偏る。

## 2.2 「形容動詞+ばかり」

「形容動詞+ばかり」の用例は62例見られる。そのうち、「とばかりに」と、「ばかりか」のような表現も見られる。用例数を表で示すと以下のようである。

表2

「ばかり」の下接語句	述語	で	だ	な／の	か	に	を
用例数	20	15	6	3	10	6	1

まず、以下のような用例を見てみよう。形容動詞が「ばかり」に上接する場合、さまざまな活用形で出現することがわかる。

(28) 腹がいっぱいになると、悲観的にばかり事態を受け取っていることが馬鹿らしくなってきた。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(29) 都会にいたたまれないでこんな田舎暮らしをするようなことになっている僕を不幸だとばかりお考えなさらないで下さい。(堀辰雄『風立ちぬ・美しい村』)

(30) 男が、繰返される砂との闘いや、日課になった手仕事に、あるささやかな充足を感じていたとしても、かならずしも自虐的とばかりは言いきれない。(安部公房『砂の女』)

(31) つまり、あれはきみが好きなばかりでなく、キチイはかならずきみの奥さんになるといつてるのさ。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

(32) このようなことは可能なばかりか、いますでに起っているのだ。(レイチェル・カーソン『沈黙の春』)

例(28)では、「ばかり」の上接する語句は「悲観的に」である。まず、発話者が話題の人物がどのように事態を受け取っているのかを知らないとする。例(28)を言うためには、発話者は話題の人物(ここでは自分自身)が事態を受け取る時の様子を観察しなければいけない。一回観察したら、自分は「楽観的」などではなく、「悲観的に」事態を受け取っている。もう一回観察しても、自分は「悲観的に」事態を受け取っている。何回を観察しても、自分は「悲観的に」事態を受け取っている。つまり、複数回スキミング考察をし、たどり着いた帰結が「ばかり」の上接する語句の「悲観的に」である。したがって、例(28)では、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。

また、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が例(28)に適用可能かどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「悲観的に」である。「悲観的に」は人間の態度(状態)を表す語句なので、課題の疑問詞は「どのように」である。「ばかり」

を含む節の述語部分は「受け取っている」なので、課題の述語は「受け取っている」である。追加条件で、課題の主語を「話題の人物（話者自身）」とする。また、特殊条件で、「ばかり」節は連用修飾節なので、課題は例文（つまり「ばかり」節）と同じ構文をとる。したがって、課題は「主人公はどのように事態を受け取っているか」である。第二章と第三章で提示した課題の設定条件は例（28）に適用できるといえるだろう。「ばかり」によるスキニング考察の過程は図2と同様になる。

例（29～32）も、例（28）と同じく、「ばかり」の用法は複数性明示用法であると考えられる。例（31）（32）では、「ばかり」に「でなく」「か」が下接している。第二章で記述したように、上接語句が形容動詞の場合も、否定や疑問の「か」をとまうこのような例文では、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。また、例（28～32）では、いずれも第二章と第三章で提示した課題の設定条件が適用できることも確認した。

また、以下のような「形容動詞な+ばかり+に」の形式をとる用例を見てみよう。

（33）馬鹿正直なメビウスの輪も、そんなことはすっかり承知のうえで、ただ精神的強姦がいやなばかりに、せつせと空き家の呼び鈴を押しつづけていたのだろう。（安部公房『砂の女』）

（34）その館長は、先史時代の土器に無知なばかりにその壺をローマ時代のものと思っ  
て、博物館にあるローマのテラコッタの収集全部よりも価値があるというのに、それをローマ時代の土器の間に並べたのである。（シュリーマン『古代への情熱』）

例（33）（34）は「（な）ばかりに」の構文で、原因を表している<sup>17</sup>。前章で記述したように、このような例文では、「ばかり」の用法は高程度指示用法となる。

また、以下のような「わずか+ばかり」用例も見られる。

（35）白布に包まれた棺が唐門を出るとき、曇った空一杯の雲がわずかばかり割れて陽がさしてきた。（水上勉『雁の寺・越前竹人形』）

（36）日ぐれ、わずかばかり時雨が通り、空までが感動の涙をこぼしたようだった。（田辺聖子『新源氏物語』）

（37）それに、奥さまがお優しいお母さまだっ  
てことを存じていましたで、ご入用とお  
っしゃるわずかばかりをお貸し申した  
でござえます。（モーパッサン『女の一生』）

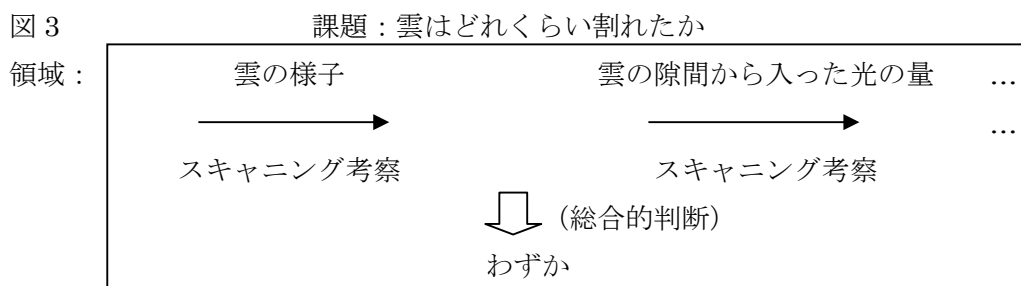
例（35～37）では、「ばかり」の上接する語句は「わずか」である。例（35）において、まず、発話者が雲がどれくらい割れたのかを知らないと仮定しよう。例（35）を言うために、発話者は雲について観察しなければならない。つまり、雲の様子、雲の隙間から入った光の量などを一瞬で素早く観察し、それで総合的に判断をし、「わずか」という事

---

<sup>17</sup> この場合、上接の形容動詞は「～な」形に偏る。ただし、なぜこのような偏りがあるかについては今後の課題とする。

態の量にたどり着く。例(36)も同じである。例(36)を言うために、発話者は時雨について観察しなければならない。つまり、雨の降った量、増えた湿気、濡れた地面などを、一瞬で素早く観察し、それで総合的に判断をし、時雨の量は「わずか」にたどり着く。

また、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が例(35)に適用できるかどうかについて検討してみよう。「ばかり」の上接する語句は「わずか」である。「わずか」は数量を表す語句なので、課題の疑問詞は「どれくらい」である。「ばかり」を含む節の述語部分は「割れて」なので、課題の述語は「割れた」である。また、追加条件で、課題の主語を「雲」とする。したがって、課題は「雲はどれくらい割れたか」である。この課題は発話者が例文を作る前の心理行動と一致している。よって、第二章と第三章で提示した課題の設定条件は例(35)に適用できるといえるだろう。したがって、例(35)では、「ばかり」の用法は数量指示用法である。例(35)の「ばかり」によるスキニング考察は以下のように図示できる。



例(36)(37)は例(35)と同じく、「ばかり」の用法は数量指示用法である。また、「わずかばかり」の用例は11例見られる。全11例に、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が適用できる。

また、「形容動詞+ばかり」の用例にも、「ばかり」の用法がどの用法なのかを判断できない用例が見られる。例えば、

(38) その焦燥は気の毒なばかりである。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

例(38)は前節の例(23~27)と同じように、「ばかり」の上接する語句に、二種類の解釈ができる。「気の毒」はかわいそうに思うと表す時、つまり、程度が最も高いことを表す時、例(38)での「ばかり」の用法は高程度指示用法といえる。「気の毒」が困ること、つまり、「その焦燥」についてのただある種の属性を表す時、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。

### 2.3 「副詞+ばかり」

「副詞+ばかり」の用例は334例見られる。また、「ばかり」の上接する副詞はほとん

ど程度の副詞である。「すこしばかり」が 245 例、「ちょっとばかり」が 27 例、「ちっとばかり」が 26 例見られる。そのほか、「ちょいとばかり」「少々ばかり」なども数例見られる。このような例文は、前節の例 (28~30) と同じように、「ばかり」の用法は数量指示用法である。ほかの例文は、例えば、以下のようである。

(39) 頭を下げると、ずしりとリュックサックが首や頭を押し、背中を水平にして這って行くと脇腹か腋の下へ廻る。そのつど平衡を失って体が揺れるので、はっとばかりにレールをしっかりと握る。何度冷汗をかいたか知れないが、事故なく赤坂駅に着くことが出来た。(井伏鱒二『黒い雨』)

(40) というのは夕方帰宅した妹がグレーゴルの部屋の様子が変わったのを認めるやいなや、かんかんに怒って茶の間に駆けこみ、まあまあとって手で制する母親を尻目に、わっとばかり身をよじらせて泣きだした。(カフカ『変身』)

例 (39) では、「ばかり」の上接する語句は「はっと」である。例 (40) では、「ばかり」の上接する語句は「わっと」である。このような用例は、前章 2.3 節で述べた「とばかり」同様、主節の述語事態の様相や程度を(象徴的に)示している。その点で、本研究で設定した「ばかり」の高程度指示用法に類すると考えられるが、量の副詞以外に出現するのは「はっとばかり」「わっとばかり」などに限られ、「ばかり」の上接する語句は定型化、語彙化しているともいえる。基本的用法(複数性明示用法、数量指示用法、高程度指示用法、時間関係明示用法)というよりは、「ばかり」の派生的用法とする。

#### 2.4 「感動詞／連語／〇+ばかり」

「感動詞+ばかり」の用例は 4 例見られる。例えば、以下の用例である。

(41) 太郎は部屋へ戻って来ると、やれやれとばかり、散らかったままの荷物の間に腰を下ろした。(曾野綾子『太郎物語』)

(42) すこしずつ甲羅が引っぱられて、よいしょとばかり起きあがって、元どおりの姿勢になった。(スタインベック『怒りの葡萄』)

例 (41) では、「とばかり」の形で、「やれやれ」を今にも言おうとしている状態を表すとされる。例 (42) では、同じく「とばかり」の形で、「よいしょ」と今にも言おうとしている状態を表している。2.3 節で述べたように、本研究ではこのような用法を「ばかり」の派生的用法とする。ただし、「今にも言おうとしている」という点では、時間関係明示用法とも関わりが深く、あるいは主節述語「腰をおろす」様相・程度について、もっともふさわしい表現としての総合判断の帰結と考えれば高程度指示用法との連続性も認められる。(この点については、第五章で検討したい。)

そのほかに、「連語+ばかり」の用例は 6 例見られる。例えば、以下の用例である。

(43) 書く資格はすでにないのだ。そう思うと、いくらか楽になった。スポーツについて、というばかりでなく、しばらくはルポルタージュそのものを書くのをやめよう。(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

(44) 彼も独身だったころには、よく他人の結婚生活をながめながら、そのくだらない心配やら、いさかいやら、嫉妬やらを見ると、内心そっとさげすみの笑いを浮かべ、自分の未来の結婚生活には、そうしたことはいっさいありえないばかりか、その外面的な形式までが、あらゆる点において、他人の生活とはまったく違っていなければならないと確信していた。(トルストイ『アンナ・カレーニナ』)

例(43)(44)では、「ばかり」の上接する語句はそれぞれ「という」「ありえない」である。また、「ばかり」に「でなく」「か」が下接している。「～という」「ありえない」の文法的扱いは難しいが、いずれにしても、第二章で述べたように、このような「ばかり」の用法は「ばかり」の複数性明示用法である。この場合、上接語句よりも、「ばかり」句の文中での位置と構文環境(「ばかり」に「でなく」「か」が下接する)が用法分化に作用しているといえる。

「 $\emptyset$ +ばかり」の用例は3例見られる。例えば、以下の用例である。

(46) 「いかなされた」と今川氏豊はおどろき、侍医に診させ、薬をもあたえたが、なおらない。ばかりか、いよいよひどくなってゆくようである。「これは、もはや」と、織田信秀はいった。(司馬遼太郎『国盗り物語』)

例(46)では、例文の最初に「ばかりか」の形で出現している。しかし、例文の前文と併せて見ると、この「ばかりか」の表す意味は、「なおらない」の後に句点「。」がないのと同じだと考えられる。「 $\emptyset$ +ばかり」の3例の例文はすべて「ばかりか」の形式で、司馬遼太郎『国盗り物語』に見られる例文である。したがって、「 $\emptyset$ +ばかり」の用法は、『国盗り物語』の作者である司馬遼太郎が文章を書く時の癖のようなものだと考えられる。また、この3例の「ばかり」はすべて「ばかりか」の形であるので、その用法はすべて複数性明示用法である。

### 3. まとめ

「形容詞+ばかり」の用例では、「ばかり」の高精度指示用法と複数性明示用法が見られる。「形容動詞+ばかり」の用例では、「ばかり」の数量指示用法、高精度指示用法と複数性明示用法が見られる。「副詞+ばかり」の用例では、「ばかり」の数量指示用法が見られる。

また、「形容詞+ばかり」の用例では、「形容詞+ばかり+の」の場合、73.6%の割合で、「ばかり」の用法は高精度指示用法に偏る。「形容詞+ばかり+だ」の場合、68.3%

の割合で、「ばかり」の用法は複数性明示用法に偏る。「副詞+ばかり」の用例では、91.3%の割合で、「ばかり」の数量指示用法に偏る。また、「形容動詞+ばかり」の用例では、目立った偏りは見当たらなかった。さらに、「形容動詞+ばかり」と「形容動詞+ばかり」の用例では、「ばかり」の用法がどの用法であるか一義的に決められない例文が見られる。それは、「ばかり」の上接する語句に、複数の意味解釈ができることによると考えられる。また、このような曖昧例は「形容動詞+ばかり」の例文に一番多く見られる。これは、「ばかり」の上接する語句の形容詞に、属性的意味と情意的意味の両方に解釈できるものが多いからだと考えられる。さらに、このような用例は、「ばかり」の各用法の連続性の一現象面といえるだろう。

さらに、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が、本章の範囲の「ばかり」の用例に適用できるかどうかを検討した。その結果、「形容詞／形容動詞／副詞など+ばかり」のすべての用例に、第二章と第三章で提示した課題の設定条件が適用できるとわかった。したがって、本研究の第一章で提示した課題（スキヤニング考察の課題を明らかにする）には一定の検証が行われたといえるだろう。

## 第五章 結論と今後の課題

### 1. はじめに

本稿は、「ばかり」自体の多様性という点に注目し、「ばかり」の諸用法の用法分化の条件と連続性を明らかにするものである。また、スキヤニング考察という認知主義的アプローチを用い、「ばかり」のすべての用法でのスキヤニング考察の相違点を探り、それによって「ばかり」の用法を分類するものである。

本論（第二章～第四章）では、「ばかり」に上接する語句を名詞、動詞、形容詞、形容動詞、副詞など各品詞に分け、網羅的な記述考察を行った。「ばかり」の文中での位置及び、「ばかり」の上接する語句の意味特徴によって、「ばかり」の諸用法を分析した。スキヤニング考察の過程や結果、帰結の違いによって、「ばかり」の用法は複数性明示用法、数量指示用法、高程度指示用法、時間関係明示用法の四つに分けられる。

本章では、本論で提示したスキヤニング考察の課題の設定条件を再度確認し、確定する。「ばかり」の各用法の特徴や互いの連続性、各品詞に下接する「ばかり」の用例の分布や用法の偏りも全体的にまとめる。最後に、「ばかり」の用法の関連性を確認し、「ばかり」の本質的な特徴を一つの結論としてまとめる。

### 2. 用法分化の条件と連続性

本稿では、「ばかり」の用法を、スキヤニング考察の過程や結果の違いによって、改めて、複数性明示用法、数量指示用法、高程度指示用法、時間関係明示用法の四つの用法に分けた。

- スキヤニング考察の帰結が「ばかり」の上接する語句の場合：
  - スキヤニング考察が複数回行われ、そこから得られた帰結が「ばかり」の上接する語句である。複数回のスキヤニング考察の結果の一致が強調される。この場合、「ばかり」の用法は複数性明示用法である。
  - スキヤニング考察が複数回行われ、その過程で粗い計算、または総合的判断をし、そこから得られた帰結が「ばかり」の上接する語句である。この場合、「ばかり」の用法は数量指示用法である。
  - スキヤニング考察が複数回行われ、その過程で総合的判断をし、程度を表す語句の集合の中から「ばかり」の上接する語句を選択する。この場合、「ばかり」の用法は高程度指示用法である。
- スキヤニング考察をした結果、複数のデキゴトが互いに時間的前後関係にあり、「ばかり」の上接する語句は唯一、完了した、あるいは未完了のデキゴトだということにたどり着く。この場合、「ばかり」の用法は時間関係明示用法である。

四つに大別された「ばかり」のすべての用法に、スキヤニング考察が大きな役割を果



たしている。このことは、「ばかり」のすべての用法の連続性を示している。また、複数性明示用法と数量指示用法、高程度指示用法の共通点は、スキヤニング考察の帰結が「ばかり」の上接する語句にたどり着くことである。したがって、複数性明示用法、数量指示用法、高程度指示用法は、より近い用法で、時間関係明示用法は複数のスキヤニングを踏まえて唯一のデキゴトの完了／未完了に帰結する点で、ほかの三つの用法と特異であるといえる。さらに、一回一回のスキヤニングの結果と全体の帰結のいずれにおいても「ばかり」の上接語句にたどり着くのは複数性明示用法のみである。ほかの用法は一回一回のスキヤニング考察の結果を踏まえ、総合判断などで帰結として上接語句が得られる。以上のことから、複数性明示用法もほかの三つの用法と特異であるといえるだろう。

また、「ばかりか」と「とばかり」の用法を「ばかり」の派生的な用法とした。「ばかりか」の用例では、「ばかり」の上接する語句の属性、文中での意味などに関係なく、「ばかり」の用法は必ず複数性明示用法になる。また、文中での位置、「ばかり」の意味など数多くの類似点のある「ばかり+で(は)なく」とは、「ばかり」が「だけ」に置き換えられない点では、大きく異なる。言い換えれば、「ばかりか」は、すでに「ばかり」とは、異なる定型の、別の語彙項目になっている。したがって、本研究では、「ばかりか」を「ばかり」から派生した表現として扱う。

「とばかり」の用法は、「動詞タ形+ばかり」「動詞ル形+ばかり」「形容詞+ばかり」「副詞+ばかり」など多くの種類の品詞に下接する「ばかり」の用例で見られるが、その数はごくわずかである。「動詞タ形+ばかり」に19例、「動詞ル形+ばかり」に15例など、極めて少ない。また、「とばかり」での「ばかり」の用法は、時間関係明示用法としても、高程度指示用法としても解釈できる。例えば、

(1) さて、佐山はその電話を聞いて、待っていたとばかりに出て行った。(松本清張『点と線』)

例(1)では、「待っていた」を今にも言おうとしている状態を表すとされる。つまり、「ばかり」の用法は時間関係明示用法として解釈できる。また、主節の述語「(佐山が) 出て行った」の様子(程度)を、「待っていた」と(言う)くらいだ、と表現しているとも考えられる。つまり、「ばかり」の用法は、高程度指示用法として解釈できる。また、「副詞+ばかり」の場合、「はっとばかり」「わっとばかり」などの用例が多く見られ、「ばかり」の上接する語句は定型化、語彙化しているともいえる。したがって、本研究では、「とばかり」を「ばかり」から派生した表現として扱う。

また、四つに大別された「ばかり」の各用法の連続性は以下のようなものである。

まず、数量表現や程度を表す語句に「ばかり」が下接する時、文中に「ただ」や「たった」のような語句がある時、また否定や「か」が下接する時、つまり、統語的な環境条件が提示されている時、数量指示用法や高程度指示用法を表すはずの「ばかり」が複

数性明示用法を表す。例えば、例（2）である。

（2）夕霧は、ただ一行ばかりのお文に目をあて、心ときめかせた。（田辺聖子『新源氏物語』）

この点は複数性明示用法と数量指示用法、高程度指示用法の連続性を示している。数量や程度・属性を表す語句も、尺度上の序列の上で把握される場合と、個々の数量や属性として均質な集合のもとに把握される場合があつて、一般的には前者だが、統語的な環境条件によって集合内の他の要素の排除が含意されると、後者の解釈に傾くと考えられる。

また、従来、歴史的用法の残存とされてきた用例「んばかり」の用例に、高程度指示用法として解釈できる用例と時間関係明示用法として解釈できる用例の両方が存在することは、高程度指示用法と時間関係明示用法の連続性を示している。例えば、例（3）（4）である。

（3）乳母車はからっぽになり、鉢にはあふれんばかりにピカンがたまっています。（カポーティ『ティファニーで朝食を』）

（4）いよいよ艶な女ざかりの風趣が、こぼれんばかりだった。（田辺聖子『新源氏物語』）

例（3）では、複数回スキヤニング考察をし、たどり着いた帰結は、「ばかり」の上接する語句のデキゴトのみが未完了の状態、ほかの考えられるデキゴトはすべて完了の状態だということ、時間関係明示用法といえる。一方、例（4）では、「こぼれる」のは「風趣」である。風趣は実際にこぼれることはありえないので、ばかりの上接する語句「こぼれん」は実際のデキゴトを表しておらず、「風趣」の程度を表している。したがって、例（4）での「ばかり」の用法は高程度指示用法である。例（3）（4）では、形態は同じく「んばかり」で、表す意味も同じく、今にもしそうになるという意味である。しかし、例（3）では時間関係明示用法と、例（4）では高程度指示用法と位置づけられる。上接語句が同じく動詞であっても、時間的展開に関与する動作、すなわちデキゴトの要素として集合をなすのか、程度の一様相を示す述語として集合をなすのかによって、時間関係明示用法か、高程度指示用法かに分化すると考えられる。この点は、高程度指示用法と時間関係明示用法の連続性を示している。

つぎに、「動詞タ形+ばかり」は大きく時間関係明示用法に偏るが、「ただ」「たった」などのような語句がある時、複数性明示用法を示す。また「動詞タ形」と「ばかり」の間に「と」が挟まれている時、高程度指示用法としても、時間関係明示用法としても解釈できる。この点は、時間関係明示用法と複数性明示用法、高程度指示用法の連続性を示している。例えば、例（5）（6）である。

(5) この前は、ただ挨拶に来たばかりで、すぐに隆士と町に出て行ったから、ほとんど話をしていない。(三浦綾子『塩狩峠』)

(6) 「あ、鳥飼君、いま、東京の警視庁の人が来て、君にあいたがっておられるよ」と、係長が待っていたとばかり、机の前から立ちあがって呼んだ。(松本清張『点と線』)

例(5)では、「ばかり」は「来た」に下接している。本来、例(5)の「ばかり」の用法は時間関係明示用法のはずである。しかし、文中に「ただ」という語句があり、ほかの考えられるデキゴトを排除している。「ばかり」によるスキヤニング考察は瞬時に素早く、複数回全く同じスキヤニング考察が行わるわけである。よって、例(5)の「ばかり」の用法は複数性明示用法である。

例(6)では、「とばかり」の形で、「待っていた」を今にも言おうとしている状態を表すとされる。「今にも言おうとしている」という点では、時間関係明示用法と関わりが深く、「ばかり」の用法は時間関係明示用法として解釈できる。一方、主節の述語「(係長が)立ちあがって呼んだ」の様子(程度)を、「待っていた」と(言う)くらいだ、と表現しているとも考えられる。つまり、「光るばかりのお美しい方」で、動詞「光る」が動詞であるにもかかわらず程度を表しているように、「待っていた」のようなセリフが一番ぴったりあてはまるような「程度」だと考えられる。したがって、例(6)では、「ばかり」の用法は、高程度指示用法として解釈できる。また、「ばかり」の用法をどういうふうにとらえても、「待っていた」は人物の言うセリフなので、「と」が必要だと考えられる。

さらに、主に「形容詞+ばかり」の例文に見られる、「ばかり」の用法がどの用法であるかを判断に迷う例が存在することは、高程度指示用法と複数性明示用法の連続性を示している。例えば、例(7)である。

(7) 思い出の中の彼は、ただ恐ろしいばかりの人であった。(三浦哲郎『忍ぶ川』)

例(7)では、「ばかり」の上接する語句は「恐ろしい」である。また、文中に「ただ」という語句がある。「ただ」には、数量・程度などのわずかなこと、わずか、たったという意味があり、すなわち、低い程度を表している。一方、「恐ろしい」には情意的意味はあるが、「こわい」という意味、つまり属性的意味もある。したがって、より「恐ろしい」の働きを重視すれば、「恐ろしい」は情意的意味を表し、課題の疑問詞は「どの程度」になる。「恐ろしい」を選び出す集合の中で、考えられるほかの要素は例えば「普通の」などで、すべての要素は集合の中で程度の高低によって位置づけられる。また、そのうち「恐ろしい」は最も高い程度である。したがって、「ばかり」の用法は高程度指示用法として解釈できる。一方、より「ただ」の働きを重視すれば、「恐ろしい」は属性的意味を示し、「恐ろしい」を選び出す集合の中で、考えられるほかの要素は例えば「無口」「陰気」などで、各要素は均質に対立的に集合を成している。複数回スキヤニング考察での

結果の一致から、「ばかり」の用法は複数性明示用法として解釈できる。また、このような曖昧例が形容詞で多く観察されるのは、形容詞が、明示的な統語的環境条件などがなくても、一属性と、高程度の評価的意味の両方を表しうるためだと考えられる。この点は、高程度指示用法と複数性明示用法の連続性を示している。

### 3. 用例分布の特徴と用法の偏り

各品詞に下接する「ばかり」の用例について、以下に品詞の分布を記す。

表1 各品詞の用例の分布について

単位:例

	複数性明示	数量指示	高程度指示	時間関係明示	二種類の用法として解釈できる	合計
名詞	2484	802	0	0	0	3286
動詞	880	0	378	1150	23	2431
形容詞	47	0	48	0	15	110
形容動詞	10	11	38	0	3	62
副詞	0	309	0	0	25	334
そのほか	6	0	0	0	7	13
合計	3427	1122	464	1150	73	6236

注:「ばかり」の用法を、二種類の用法として解釈できる用例では、「形容詞+ばかり」「形容動詞+ばかり」「動詞+ばかり」の一部の用例を除き、他はすべて「とばかり」の用例である。

表1でわかるように、「名詞(句)+ばかり」と「動詞(句)+ばかり」の用例は圧倒的に多く、両方を合わせ、「ばかり」の全6236例の91.7%を占めている。また、「ばかり」の四つの用法の用例数から見ると、一番多く使用される用法は「ばかり」の複数性明示用法である。「副詞+ばかり」の用例に見られないが、「ばかり」がほかの品詞に下接する場合、複数性明示用法の用例は数多く見られる。また、「副詞+ばかり」の用例では、「ちょっとばかり」「すこしばかり」のような「程度の副詞+ばかり」の用例がほとんどである。よって、「副詞+ばかり」の場合、「ばかり」の用法は大きく数量指示用法に偏る。

また、各品詞に下接する「ばかり」の用例に、それぞれ「ばかり」の用法の偏りが見られる。

「名詞(句)+ばかり」の場合、また「名詞(句)+ばかり+は/か/も」「名詞(句)+ばかり+で」「名詞(句)+ばかり+だ/である」の場合、「ばかり」の用法はそれぞれ88.8%、85.9%、97.1%の割合で強く複数性明示用法に偏る。「名詞(句)+ばかり+の」の場合、70.6%の割合で強く数量指示用法に偏る。

「動詞(句)+ばかり」では、「タ形+ばかり」の場合、特殊な構文(「ただ」や「た

った」を用いる、また「ばかり」に「でなく／ではなく」が下接する、文中に「あながち～ない」がある、さらに「動詞タ形＋と＋ばかり」の構文) でない限り、「ばかり」の用法は時間関係明示用法である。つまり、77.8%の割合で、「ばかり」の用法は時間関係明示用法に偏る。「テ形＋ばかり」の場合、すべての用例での「ばかり」の用法は複数性明示用法である。「ル形＋ばかり」の用例では、「ばかり」が複数性明示用法を表す時、「ばかり」節は述語と連用修飾節(「ばかりで」)になる傾向が高い。「ばかり」が高程度指示用法を表す時、「ばかり」節は連体修飾節になる傾向が高い。

「形容詞＋ばかり」では、「形容詞＋ばかり＋の」の場合、73.6%の割合で、「ばかり」の用法は高程度指示用法に偏る。「形容詞＋ばかり＋だ」の場合、68.3%の割合で、「ばかり」の用法は複数性明示用法に偏る。「副詞＋ばかり」では、92.5%の割合で、「ばかり」の数量指示用法に偏る。また、「形容動詞＋ばかり」の用例では、目立った偏りは見当たらなかった。

このような用法の偏りは、「ばかり」節の文中での位置が大きく影響していると思われる。「は／が／も」が「名詞(句)＋ばかり」に下接する場合、「ばかり」節自体が項名詞句となりやすく、おのずと上接名詞は人やモノなどに偏る。人やモノなど、個物の集合を対象領域としてスキニング考察をすれば、人やモノといった個物の複数性明示になりやすいといえるだろう。

「名詞(句)＋ばかり＋の」の場合、「ばかり」節が名詞を修飾するので、被修飾名詞の性質や状態、属性を説明する節となる。数量表現は、被修飾名詞の属性の一つといえるので、被修飾名詞の属性を説明する「名詞(句)＋ばかり＋の」が数量指示用法に傾くのは理解しやすいだろう。

「名詞(句)＋ばかり＋で」の場合に数量指示用法に偏りやすいのも、「名詞(句)＋ばかり＋で」が述語句を構成しており、なんらかの属性を示すためであると考えられる。また、「名詞(句)＋ばかり＋でなく」のような用例が数多く、207例見られる。このような統語的な環境条件がある例文の用例数が多いのも、「ばかり」の用法の偏りの原因の一つだと考えられる。

また、このような用法の偏りは、「ばかり」の上接する語句の形態が大きく影響しているとも考えられる。「動詞タ形＋ばかり」では、「ばかり」の上接する語句の動詞はタ形である。動詞のタ形は動作の完了を表すので、おのずと、デキゴトの進行状態の「完了」「未完了」などが注目され、「ばかり」の用法は、上で述べたような特殊な構文でない限り、時間関係明示用法になる。

「動詞テ形＋ばかり」では、「ばかり」の上接する語句の動詞はテ形で、例文の構文は「てばかりいる」「ているばかり」の構文に集中している。「ている」は動きの最中、つまり、動作が進行中である状態を表す。しかし、「ばかり」の上接する語句は進行中の状態だが、考えられるほかのデキゴトはどのような進行状態なのかはわからず、何回スキニング考察が行われても、帰結は「ばかり」の上接する語句のデキゴトが進行中(ほかのデキゴトが起こっていない)という状態で、複数回スキニング考察の結果の一致

が強調される。よって、「動詞テ形+ばかり」では、「ばかり」の用法は、「増えるばかり」「上がるばかり」のような複数性明示用法になりやすいといえるだろう。

また、「形容詞／形容動詞+ばかり」の用例では、「ばかり」の用法が、複数性明示用法と高程度指示用法の両方として解釈できると思われる用例が見られる。例えば、例(8)である。

(8) 源氏の心あたりの邸は住む人もないままに留守居役だけが守っている。門の内は、ゆくほどに木立が深く物古りて、気味わるいばかりである。(田辺聖子『新源氏物語』)

例(8)では、「気味わるい」は属性的意味を示す形容詞であるが、場合によって情意的意味を示す形容詞としても用いることができる。「気味わるい」が情意的意味を示していると解釈すれば、課題の疑問詞は「どの程度」になり、スキヤニング考察をする時、「気味わるい」を選び出す集合の中で、考えられるほかの要素は例えば「さほど悪くない」「普通」などで、すべての要素は集合の中で程度の高低によって位置づけられる。また、「気味わるい」は最も高い程度と考えられる。したがって、「ばかり」の用法は高程度指示用法として解釈できる。一方、「気味わるい」が属性的意味を示していると解釈すれば、課題の疑問詞は「どのような(属性)」になり、スキヤニング考察をする時、「気味わるい」を選び出す集合の中で、考えられるほかの要素は例えば「涼しい」「侘しい」などで、各要素は均質に対立的に集合を成している。複数回のスキヤニング考察での結果の一致から、「ばかり」の用法は複数性明示用法として解釈できる。このような用例は、「形容詞+ばかり」の用例に多く見られる。これは、「ばかり」の上接する語句の形容詞に、属性的意味と情意的意味の両方に解釈できる形容詞が多いからだと思われる。

#### 4. 課題の設定条件

本稿では、「ばかり」によるスキヤニング考察の課題を明らかにした。課題の設定条件に、必須条件と追加条件、特殊条件がある。

必須条件は、課題は「ばかり」の上接する語句についての質問であること、課題の述語は「ばかり」を含む節の述語部分を使用することである。また、課題の要点をなす疑問詞は「ばかり」の上接する語句の文中での意味によって、異なってくる。例えば、「ばかり」の上接する動詞が実際のデキゴトを表す時、課題はデキゴトについての質問である。「ばかり」の上接する動詞が事物の程度を表す時、課題は程度についての質問である。

追加条件は、二つ考えられる。一つは、必須条件だけでは課題を設定できない場合、新たな条件が生まれる。つまり、課題の主語を、例文の「ばかり」を含む節の主語として設定することである。もう一つの追加条件は、時間関係明示用法では、参照時が必須となる。必須条件だけでは課題を設定できないため、例文中など文脈に明示された時刻を参照時として連用修飾節の形で課題に組み入れることである。

さらに、特殊条件は、二つ考えられる。一つは、「ばかり」節が連体修飾節の場合に必要なとされる。課題の構文は「ばかり」節と同じ構文環境をとるということである。つまり、例えば、例文において、「動詞（句）＋ばかり＋の＋「ばかり」節の修飾する名詞」（例えば「鮎太が十行程記事を書いたばかりの時だった」）の構文であれば、課題は「疑問詞＋の＋「ばかり」節の修飾する名詞」（例えば「鮎太がどんな行動の時であるか」）の構文である。「動詞（句）＋ばかり＋「ばかり」節の修飾する名詞」（例えば「こき使われてばかりいる彼は」）の場合、課題は「疑問詞＋「ばかり」節の修飾する名詞」（例えば「どのような彼であるか」）の構文である。もう一つの特徴は、例文に先行文脈（例えば「どうしたって二千元は貰わなくちゃ（中略）五百円ばかり」）がある場合、その先行文脈を連用修飾節として課題に組み込むということである。

以上の設定条件について、本研究で対象とした『新潮文庫 100 冊』（CD-ROM 版）の昭和時代以降の用例に見られるすべての「ばかり」の用例で適用可能かどうか検討した結果、例外なく適用できると考えられる。

## 5. 「ばかり」の本質的な特徴

「ばかり」によるスキニング考察の過程と帰結の様相からわかるように、「ばかり」は複数のモノやデキゴトについてスキニング考察をするが、最終的に視点として帰結するのは「ばかり」の上接する語句である。つまり、考えられるすべての要素を、一応すべて視点に入れる。しかし最後は、「ばかり」の上接する語句にたどり着くのである。本研究では、このように、考えられるすべての要素を、一応すべて視点に入れるが、最終的に視点として帰結するのは「ばかり」の上接する語句であることを、「ばかり」の本質的な特徴とする。

また、「ばかり」の本質的な特徴は「だけ」などの助詞との違いを示すものだとも考えられる。例えば、「りんごばかり食べる」と「りんごだけ食べる」では、「ばかり」は考えられるすべての食べ物について、一応りんご以外の要素として、スキニング考察をする時の集合の中に入れておくが、注目しない。注目するのはいつも「りんご」である。ほかの食べ物が実際に目の前に存在してもしなくても問題ない。「ばかり」によるスキニング考察は話者の念頭で一瞬で行われる認知的な観察行動である。しかし、「だけ」は実際に目の前に比べる食べ物がないと、「りんごだけ」は言えないだろう。例えば、

(9) 右手に三軒の焼け残り、阪神石屋川の駅は屋根の骨組だけ、その先のお宮もまっ平らになって御手洗の鉢だけある（野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』）

例 (9) では、阪神石屋川の駅はもし、壁がすこし焼き残っていれば、例 (8) は成り立たない。しかし、例 (9) の「だけ」を「ばかり」に入れ替える場合、壁がすこしやき残っていても、「だけ」を「ばかり」に入れ替えた後の例 (9) は成り立つ。「ばかり」によるスキニング考察では、「屋根の骨組」以外の要素は、一応視点に入れるが、最終的に

注目しない。注目するのは「ばかり」の上接する語句「屋根の骨組」のみである。「屋根の骨組」以外のほかの要素はすこし混ざっていても、例文は成り立つ。一方、「だけ」によるスキニング考察では、「屋根の骨組」以外の要素も注目し、意図的に排除している。よって、もし壁がすこし焼き残っている場合、「屋根の骨組」以外に何もないという限定排除の意味は成り立たないので、実際に「屋根の骨組」以外に何もない。したがって、「ばかり」の本質的な特徴は、夾雑物の問題の解釈にもなると言えるだろう。

## 6. 今後の課題

本論の精密化、発展のためには、以下の点が考察課題となる。

- 「ばかり」の本質的な特徴の応用

「ばかり」と「だけ」などの助詞の違いについて、「ばかり」の本質的な特徴を基板に考えられないかと考えている。これから、詳しく検討したい。例えば、5節で、例(8)を用い、「ばかり」の本質的な特徴の視点で、「ばかり」と「だけ」の違いについて探ってみた。「ばかり」によるスキニング考察では、「ばかり」の上接する語句とほかの考えられる要素を一旦すべて、視点に入れる（スキニング考察をする時の集合の中に入れておく）が、最終的に、「ばかり」の上接する語句のみを注目する。他の助詞によるスキニング考察の過程や結果は「ばかり」のと異なると考えられる。例えば「だけ」によるスキニング考察の結果は、「だけ」の上接する語句の限定、他の要素の解除だと考えられる。このことから、「ばかり」と「だけ」の入れ替えられる例文と入れ替えられない例文の分別方法や、「ばかり」と「だけ」を入れ替えられる場合の条件などを明らかにできるのではないかと考えられる。また、5節でも触れてみた、「ばかり」特有の夾雑物の問題の解釈にも繋がるのではないかと考えられる。

- 「ばかり」の歴史的変遷について、詳しく研究したいと考えている。

例えば、

(10) あの日、伯母様の家の一間で、あの人と会った時に、私はたった一目見たばかりで、あの人の中に映っている私の醜さを知ってしまった。(芥川龍之介『袈裟と盛遠』)

このような現代語では「だけ」で表現されることが多い用例について、此島(1983)に興味深い指摘がある。「ばかり」は現代語では古語の「のみ」の意味を担い、古語の「ばかり」の意味は現代語の「だけ」に担われているというのである。「ばかり」の意味用法の変遷は興味深い。本研究で考察した各用法の連続性との関わりを踏まえ、これから、詳しく研究したい。



- 日本語教育に向けて

本稿で見られる「ばかり」の用法の偏りを基盤とし、日本語学習者がより有効かつ効率的に「ばかり」を使えるようになる説明の構築も課題となる。教育への応用は独立した課題となるが、これに貢献できると期待し、研究を進めていきたいと考えている。

例えば、日本語学習者が「最近いつも雨が降る」を表現したいとする。「いつも」という意味を表す「ばかり」の用法は複数性明示用法である。本稿で見られる新潮文庫 100 冊の例文の分布では、複数性明示用法は述語成分になりやすい。よって、「ばかり」節を述語部分として使用したほうがいいだろう。例えば、「最近雨ばかりだ」「最近雨ばかり降る」などである。このような文は自然な文である。一方、「ばかり」節が連体修飾節の時、「ばかり」の用法が複数性明示用法を表す例文は数少ない。よって、「ばかり」節を連体修飾節として、特に「ばかり＋の＋名詞」の構文で使用したら、例文がやや不自然な文になってしまうだろう。例えば「最近雨ばかりの天気だ」<sup>18</sup>はあまり使用されない文だと考えられる。

以上のように、本稿で見られる「ばかり」の用法の分布と偏りから、日本語学習者は「ばかり」を使用する時のルールを見つけることができるといえるだろう。このように、教育への応用に貢献できると期待し、研究を進めていきたい。

---

<sup>18</sup>筆者は、文「最近雨ばかり降る天気だ」は文「最近雨ばかりの天気だ」より自然な文章だと考える。なぜかというところ、「ばかり＋述語＋名詞」構文より、「ばかり＋の＋名詞」構文の方が、「ばかり」の複数性明示用法の例文がより少なく見られる、つまり、「ばかり＋述語＋名詞」構文より、「ばかり＋の＋名詞」構文では、「ばかり」の用法はより複数性明示用法になりにくいからだと考えられる。

参考文献

- 庵功雄 (2001) 「とりたて」『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 井上優 (1993) 「日本語の『ぼかし表現』をめぐって—文法論からのアプローチ—」『日本学研究』第3号、北京日本学研究中心 (編)
- 安部朋世 (2000) 「バカリによる「限定」」『和光大学表現学部紀要』第1号
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル (1963) 『文法教育—その内容と方法』むぎ書房
- 此島正年 (1983) 『助動詞・助詞概説』桜楓社
- 小林可奈子 (2003) 「動詞に後接する限定の「ばかり」」『日本語・日本文化』29
- 定延利之 (2001) 「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1巻1号
- 定延利之 (2003) 「現代語の限定のとりたて」沼田善子 (他) (編) 『日本語のとりたて—現代語と歴史的変化・地理的変異』くろしお出版
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高瀬匡雄 (1997) 「意味の“限定”と時間の“限定”」『立正大学国語国文』34
- 寺村秀夫 (1981) 「ムード形式と意味 (3) —取り立て助詞について—」『文 (芸) 言語研究 言語篇』6 筑波大学文芸・言語学系
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 中西久実子 (1995) 「取り立て助詞「ばかり」の限定機能—その複機能と単機能との連続性を中心に—」『大阪大学日本学報』14
- 中西久実子 (2001) 「単数のものをとりたてる「ばかり」の意味再考—教育の視点から—」『日本語と日本語教育』第30号、慶応義塾大学日本語・日本文化教育センター
- 仁田義雄ほか (2009) 「第9部とりたて」『現代日本語文法5』日本語記述文法研究会編、くろしお出版
- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』第44巻第13分冊、大阪市立大学文学部
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」奥津敬一郎 (他) 『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田善子 (1992) 『「も」「だけ」「さえ」など—とりたて (日本語文法セルフ・マスターシリーズ (5))』くろしお出版
- 沼田善子 (1992) 「とりたて詞と視点」『日本語学』11-8 明治書院
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」金水敏 (他) 『日本語文法 2—時・否定と取り立て』岩波書店
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房
- 前田直子 (2001) 「「～したところだ」と「～したばかりだ」」『東京大学留学生センター紀要』第11号
- 野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」益岡隆志 (他) (編) 『日本語

の主題ととりたて』、くろしお出版

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版

丸山直子（2001）「副助詞「くらい」「だけ」「ばかり」「まで」の、いわゆる〈程度用法〉と〈とりたて用法〉」『日本文学』95号、東京女子大学日本文学研究会

宮田幸一（1948）『日本語文法の輪郭』三省堂

茂木俊伸（2002）「「ばかり」文の解釈をめぐって」『日本語文法』2巻1号

森田良行（1968）「ぐらい、ほど、ばかりの用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』7、早稲田大学語学教育研究所

森田良行（1972）「「だけ、ばかり」の用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』10、早稲田大学語学教育研究所

半藤英明（1998）「『限定』と『とりたて』の視座」『國語國文』第67巻第3号

張培（2011）「現代語ダケの諸用法について—『形容詞・形容動詞+ダケ』を中心に」『名古屋大学人文学科学研究』第40号

朱琳（2013）「現代語『ばかり』の用法の多様性について—動詞（句）+ばかりを中心に—」『名古屋言語研究』Vol.7

朱琳（2014）「現代語『ばかり』の用法の多様性について—名詞（句）+ばかりを中心に—」『名古屋言語研究』Vol.8

『現代日本語コース中級Ⅱ』（1990）（名古屋大学日本語教育研究グループ）

『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』（2001）（庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘著）

『日本国語大辞典』第二版（2001）小学館

『日本文法大辞典』松村明編 明治書院

用例出典

新潮文庫の100冊CD-ROM版（昭和時代以降の用例を使用する）